

# 額兜世鏢

第三卷 · 十二月

## 道頓堀特輯



吉原

一陽齋  
曲豆園

昭和三年十二月一日發行  
昭和三年十一月廿八日印刷

御大典式場

# 京都御所拜觀

(十二月一日より)

- 京阪電車は御所に最も近くて一番御便利
- 三條終點より御式場跡迄徒歩十五分

▲ 大阪・京都・宇治間  
團體特別大割引斷行

おかへりには

● 帝

展

(七條下車)

● 伏見桃山御陵

參拜

● 京都大禮博

(神宮道下車  
又は七條すぐ)

● 石清水八幡宮

參拜

● ふしみいなり神社

參拜

京都  
南座

● 顔見世

十二月二日から二十日迄  
晝の部(十時分)夜の部(五時分)

京阪電車四條下車すぐ

御所拜觀に一番便利な

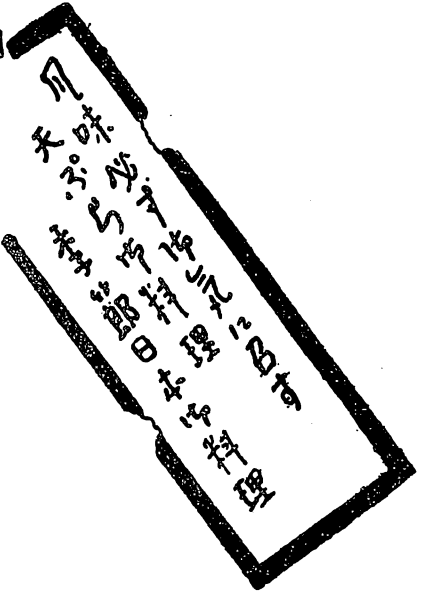
# 京阪電車

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を



# 吉屋食堂



道頓堀戎ばし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町  
京都支店 木屋町ドングリ橋



道頓堀 昭和三年顔見世號 第二十七輯

表紙……(すけろく)……………一陽齋豊國畫



口 繪

◇京都南座顔見世興行「源平布引瀧」鷹治郎の實盛◇助六由縁江戸櫻「宗十郎の白酒屋新兵衛、幸四郎の助六、福助の揚卷・「伽羅先代萩」福助の政岡・同舞臺面・「釣女」舞臺面「壽會我對面」舞臺面◇藍綬褒章御下賜の光榮に浴せる大谷竹次郎◇紺綬褒章御下賜の光榮に浴せる白井信太郎◇「壽會我對面」中車の工藤、鷹治郎の十郎、幸四郎の五郎◇「助六由縁江戸櫻」舞臺面(彦三郎の罷意休、福助の揚卷、幸四郎の助六)幸四郎の助六◇「敵討襖樓錦」舞臺面・鷹治郎の春藤治郎右衛門◇「鬼」法眼三略卷「舞臺面」扇雀の皆鶴姫宗十郎の奴虎藏、福助の奴智恵内・中車の鬼一法眼

◇扉……………(大晏寺堤)……………白井松次郎(二)

御大典奉祝記念興行に就いて……………白井松次郎(二)

◆考證研究と記録◆

- 期待さるべき圓熟味……………林久男(四)
- 星霜三十年……………成瀬無極(七)
- 顔見世手打の古式……………高谷伸(一一)
- 顔見世の感激に浸りつゝ……………富田泰彦(二三)
- 吉例 顔見世……………山本修二(二六)
- 「先代萩」その他……………楠田敏郎(三三)
- 皇室思ひの實盛……………新谷誠太郎(三四)
- 常磐津「釣女」……………石割松太郎(三六)
- 南北二座對立時代の顔見世……………堂本寒星(三八)
- 理想の人「助六」觀……………島華水(四七)
- 箱根越への「助六」……………高原慶三(五〇)
- 顔見世漫談……………高安吸江(五三)





- 大晏寺雜記……………森 ほんほ (五八)
- 大晏寺堤のことなど……………並山拜石 (六〇)
- 五等席の客……………野淵 禎 (六六)
- 畫面として……………吉川 觀方 (六八)
- 漫筆……………大村嘉代子 (七〇)
- 劇壇往來……………(五六)

◆芝居物語とあふむ石◆

- あふむ石…伽羅先代萩…(晝之部)……………(九)
- あふむ石…釣……………(一八)
- あふむ石…壽曾我對面…女…(同)……………(二〇)
- 芝居物語…鬼一法眼三略卷…(夜之部)……………(三〇)
- 芝居物語…敵討檻褌錦……………(三四)
- 芝居見儘…助六由縁江戸櫻……………(三八)
- あふむ石…大津繪……………(六二)
- 伽羅先代萩(あふむ石)……………(四九)
- 『助六』と紫の鉢巻……………(五五)
- 『助六』劇中の人々……………(五二)

◆劇場案内◆

- 南座……………(七三)
- 中座……………(七三)
- 角座……………(七四)
- 辨天座……………(七四)
- 松島八千代座……………(七四)
- 年極愛讀者募集……………(七五)
- ◆編輯後記……………(七六)
- ◆挿繪・カット……………(七六)



お芝居の幕間と

お帰りにはお揃で

食慾をそゝる冬のお献立が

お待ち申してゐます

園  
梅  
園

お芝居でのお食事は食堂にて……………

お帰りには白鷹にて一寸一ぶく江戸すしを……………

中  
座  
食  
堂

本店 大左衛門橋北一丁  
電話南六二二七番

# スキナ脂取紙

あぶら

君ケ代は千代に八千代にさかへませ

私共國民の報恩は健康そのものから生れるのです

その健康に皮膚の衛生に

是非スキナ脂取紙をお使用下さい

道頓堀の各座、及び各地化粧品店に販賣せり

お買求めの節は「スキナ」と御指定を乞ふ



現品縮圖  
スキナあぶら取紙

“GREASY SWEAT ABSORBER”

Take off a leaf of Greasy Sweat Absorber and pass over the face. The effect is that all greasy sweat will be soon absorbed and extremely light broom will be left.

本 舗

ス キ ナ ナ 屋 號

中 田 商 店

大 阪



留我原旗

原旗

綴

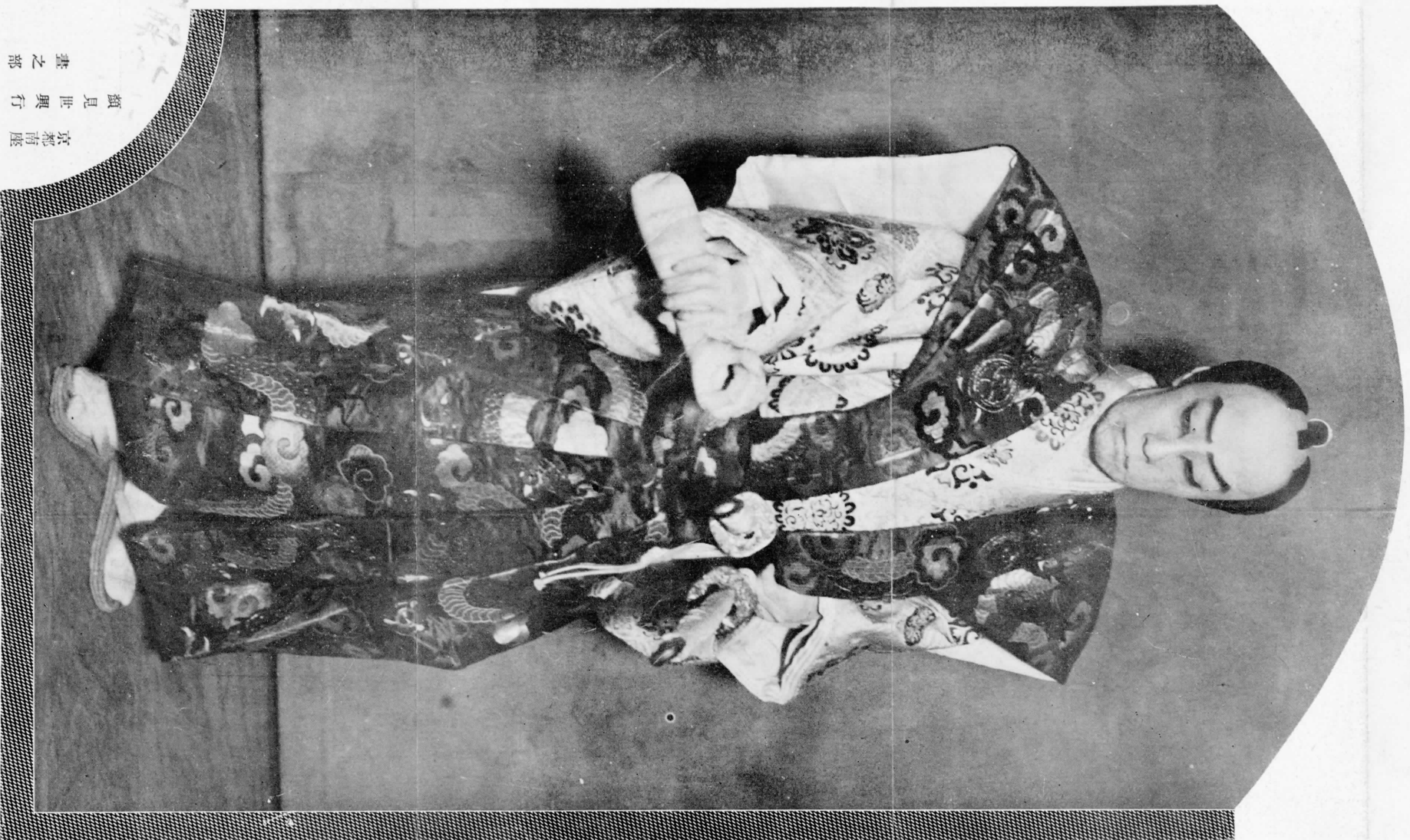
# 梅原商店

神戸市

梅社西門

番五六一町元

電話



畫之部

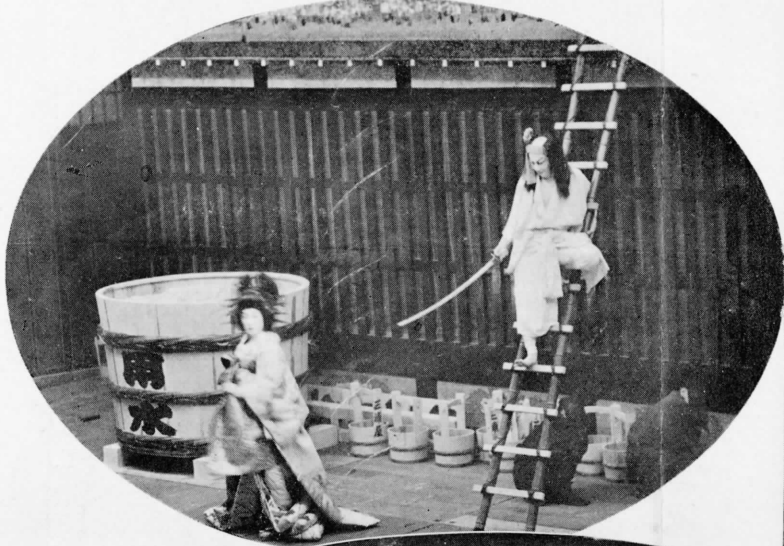
旗見世興行

京都南座

盛實の郎治鴈村中

瀧引布平源

〔櫻 戸 江 縁 由 六 助〕 部之夜  
 谷揚の助福村中・六助の郎四幸本松



〔萩 代 先 羅 伽〕 部之晝  
 岡政の助福村中



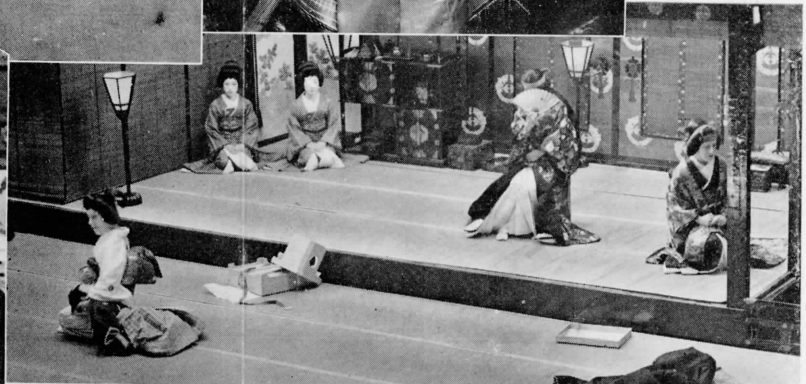
京都南座顔見世興行

夜之部「助六由縁江戸櫻」

澤村宗十郎の白酒屋新兵衛



面臺舞の〔面對我曾壽〕部之晝



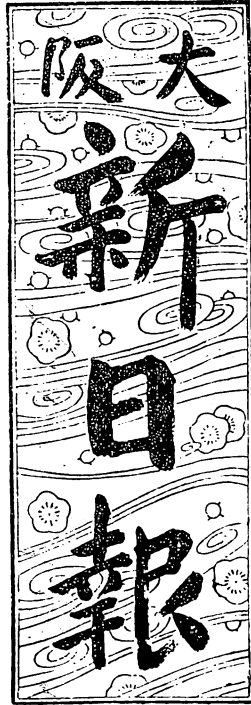
晝之部「伽羅先代萩」の舞臺面



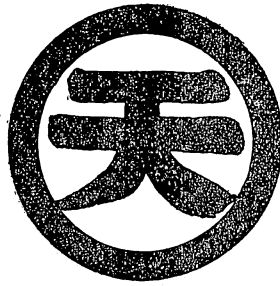
面臺舞の〔女釣〕部之晝



一番面白



夕刊新聞



淡口ノ親玉

# 景品

九升樽詰一挺毎二

中央製菓カルケツト 大カン 一個宛

又ハ 清水焼茶器一組宛

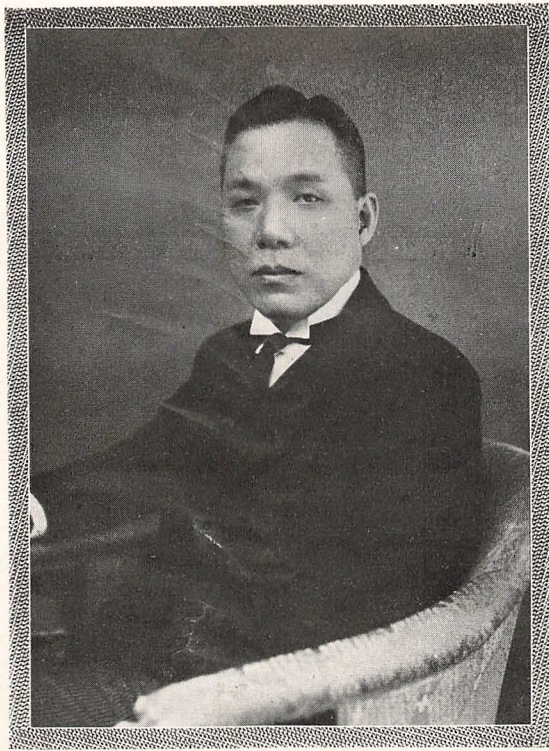
日本丸天醤油株式会社

大阪市東區高麗橋詰町

發賣元

柿浦佐一郎

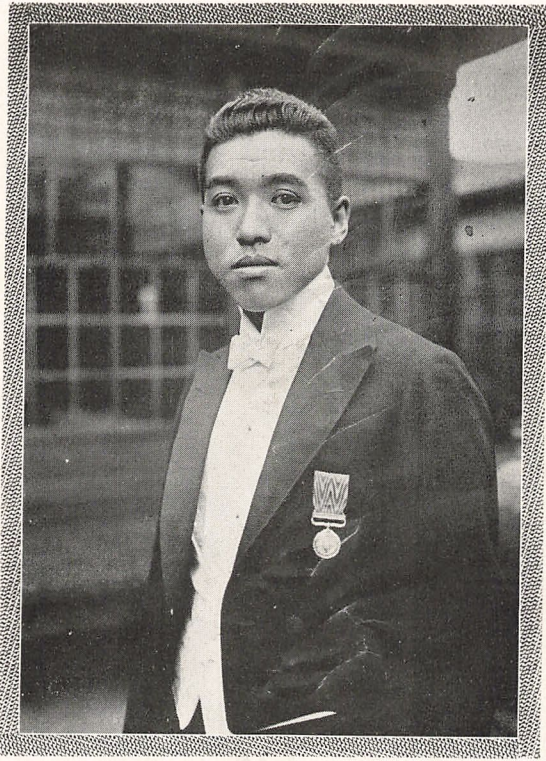
電話東 四二八五六二



勅定の藍綬褒章を、私如き微力非才のものが拜受したといふ事は、實に恐多い勿體ない氣持が致します。承れば此褒章は教育界學術界方面の第一人者にして始めて拜受し得る稀有なものでございますが、かういふものを、われわれ興行界に携はる者が戴いたといふ事は、誠に私一身一門の榮譽のみで無く、私情を去つて廣く演劇、映畫界の爲に祝福すべき事だと存じます。これに依つて愈々強く私がこの道に携つて來た事の幸福を感じると共に一方、將來に益々其責任の重大な事を思ふ次第で、微力誠に恐懼に堪えません。

大谷竹次郎





先に東京、大阪兩松竹合名社長に  
紺綬褒章並に藍綬褒章を御下賜の榮  
に接しまして恐れ多く存じて居りま  
した處、今回また、京都市の記念  
事業に功勞ありとして私にまで紺綬  
褒章を頂戴致しまして、只管聖恩の  
有難さに感泣致して居ります。松竹  
一門の光榮は申すに及ばず今後共演  
劇御奉公の赤誠を以て演劇文化の爲  
め大いに精勵致したいと存じて居り  
ます。

白井信太郎

理料洋



大阪市今橋五丁目

つる家本店

電話本局

三三

六三三

三一五

二六二

番付型

全國鐵道各驛揭出廣告取扱  
京都市營電車々内廣告取扱  
京津、京阪、嵐山電車  
沿道及車内廣告  
京都、大津全湯屋廣告  
一手取扱  
市内掲出廣告及諸看板製作  
廣告ニ關スル裝飾建設請負

京都市三條寺町角

# 實業廣告商事株式會社

電話長本四三二〇番

◇  
諸  
印  
刷  
◇

京都木屋町松原南

明文堂印刷所

電下四八五番



# 大阪毎日新聞

夕刊新聞界の霸王として永き  
歴史と壓倒的勢力を有し、記  
事の面白さ、観察の鋭さ、毎  
夕灯こもし頃本紙を手にはせざ  
る者殆んど無し、以て本紙が  
如何に愛讀されつゝあるかを  
知るに足らん

# 関西日報

何事かあれば直ちに問題の核  
心に突入り事件の真相を報ず  
る事掌を指す如く條理明晰必  
らず讀者を誤らず本紙の信用  
ある所以

本社 大阪北濱

支社 東京、名古屋、京都、神戸



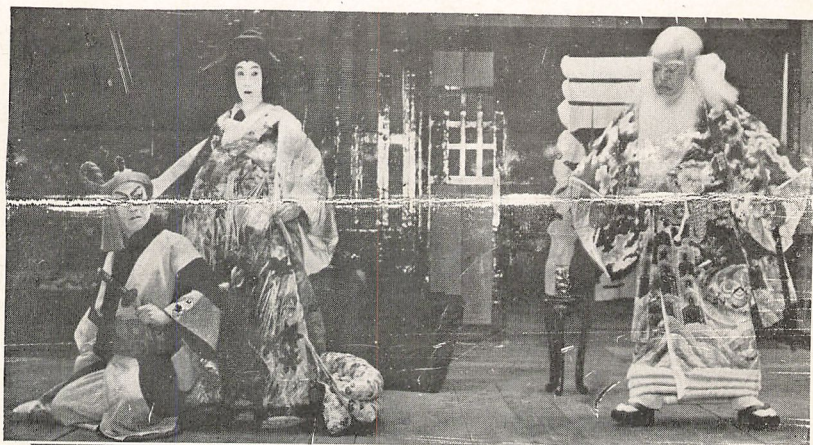
京都南座額見世興行

畫之部『壽曾我對面』

市川中車の工藤祐經

致時郎五の郎四幸本松 • 成祐郎十の郎治鷹村中





京都南座額見世興行夜之部

『助六由縁江戸櫻』

(上) 阪東彦三郎の罷の意休・中村福助の揚巻・松本幸四郎の助六

(下) 松本幸四郎の花川戸助六



庭園式大料亭

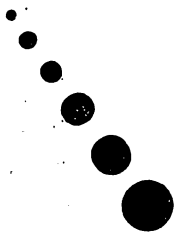
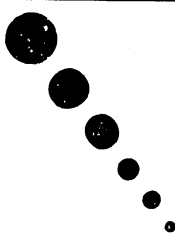
新築落成の

# 新明月

住吉驛に無料専用自動車がお待ち申します

住吉菖蒲園

電話 三三三 五〇番





裂 小・具道小

# 貸 衣 裳

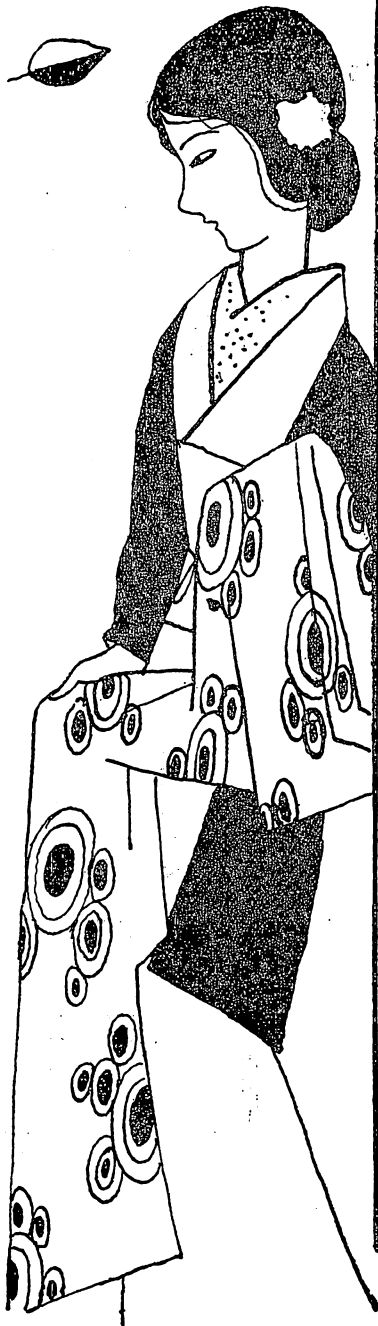
素人演藝會

宴會の催物

春秋温習會

婚禮の衣裳

## 松竹衣裳部



(其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい  
御來客の御相談に應じ便利よく取計ます)

本店

大阪市南區久左衛門町八

電話 南一四一七八番

東京支店

東京市淺草區並木町十五  
電話 淺草五五九九番

# 活版 印刷

中央堂印刷所

大阪市東區船越町二丁目

電話 三三四四番



# 櫻印 肉汁人參葡萄酒



大阪市東區豐後町(平野橋東詰)

橫 山 商 店

電話東 三 六 六 三 番

振替口座 大阪 二 八 四 七 八  
東京 一 六 二 七 八



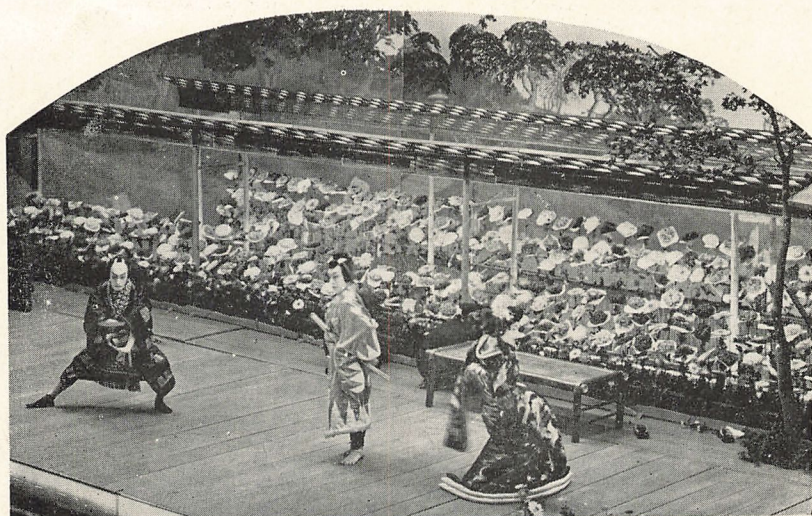
京都南座顔見世興行夜之部

『敵討襦袢錦』大晏寺堤

(上) 舞臺面

(下) 中村應治郎の春藤治郎右衛門





京都南座額見世興行夜之部

『鬼一法眼三略卷』菊畑

(上) 舞臺面

扇雀の皆鶴姫 宗十郎の奴虎藏 福助の奴智恵内

(下) 市川中車の鬼一法眼





! 品各贈御 未蔵

特長  
色濃く  
最も割が利く



・詰樽升九・  
・詰壇ルトツリニ・

上田  
油醬タゲヒ

御近所酒醬油へヒタゲ油と御名指し

近代

都會人的

設施



科學的な料理

音樂的な美酒

繪畫的な女給

民衆	高級	俱樂部	一階	二階	三階
大衆	酒場	宴會	一階	二階	三階
食堂	酒場	宴會	一階	二階	三階

心齋橋南詰

ヴイタミシ堂

電南五三三番



美しい人氣の中に  
 ますく輝やく  
 優良第一の品質

本舖 伊東胡蝶園

お待兼ねの映畫

松竹キネマ株式会社提供

新撰組首領

# 近藤勇

全三篇

阪妻プロダクション超特作品

阪東妻三郎主演

時幕末!! 國家累卵の危地に瀕し尊王? 佐幕? 物情騒然たる京洛! 壬生浪士首領、劔豪新撰組隊長近藤勇! 鬼神の如く怖れられ、愛刀虎徹にそりを打たし、眉宇に決然たる壯意を漲しつゝ、悠々濶歩する彼劔戟! 亂闘渦紋の巷に憂々響に快味をおぼねる彼! 阿修羅王の如く怖れられた彼にも、熱血迸り涙ある優しさ一面があつた

近第第第  
日一  
封  
三二  
開々  
仕新  
候春





第二十七輯

誌雜・究研劇演・刊月  
**演類通**

第三年

輯 特

號 [世 見 顔]



# 御大典奉祝記念興行に就いて

白井松次郎

先月は我等國民にまつて、千載一遇の御盛典が、我が京都の地に於てあけさせられ、我等京都市民は曠遠なる御聖徳に浴し、ひたすら天壽の無窮ミ、御代萬歳を御奉祝申上けるものでございます。

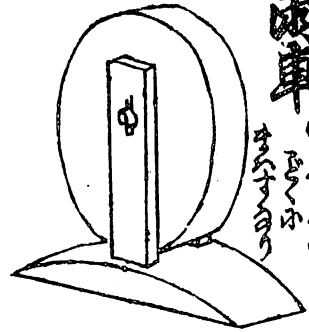
殊に今十二月は、吉例の顔見世月に相當いたしますので、曠古の御大禮のあみを享けて、我等が此の歡喜、此の法悦を永遠に記念するため、當る已歲顔見世興行は御大典記念として、空前の大顔合せに、上場狂言も悉く歌舞伎劇中典據ある名篇を網羅し、皆様と共に、永々そして凡く我等が一世一代の歡喜をおさして頂きたいと存じます。

特に夜の部の「助六由縁江戸櫻」は、御承知の如く歌舞伎十八番中に於ても定評ある名篇にて、これが上場の運びに至りますまでには、堀越宗家と再三の交渉を重ね、従来花時の狂言として、三四月の外は上演されなかつた同狂言を、榮あるこの度の興行中に差し加へました事は、御盛典に奉祝のため廣く地方より御入洛の旁々に對して、失禮ながら日本歌舞伎中でも代表的名狂言の觀賞を心ゆくばかりして載きたいと思つたからでございます。今一つ此狂言は色々なやかましい約束がございますので東京、大阪、京都の三都を除いて地方巡業なきでは仲々その準備だけでも整ひかねるごいふ大物でございます。ですからこの際斯うしたものを申し上げますのは、色んな意味に於て、意義深い事と存じましたので、強つて宗家の了解を求めて上場の運びにいたしました。

何んぞ申しましても、京の四條は、我が芝居國の發祥地でございますして、此の四條を日本歌舞伎の傳統から離して考へる事は出来ません。殊に、京都の年中行事の一つであり、又芝居國歌舞伎界の誇りである吉例顔見世興行を、曠古の御盛典記念として、稀有な大一座に珠玉の名狂言を揃へて皆様と共に其の歡を盡す事は、我々にまつて、以上の幸榮はございません。

雨車

いづるまの  
あつたまの  
あつたまの



## 期待さるべき圓熟味

林 久 男

遠くは團菊、近くは梅玉、松助なごの去つたあごは、何云つても、中車、鴈治郎は、歌右衛門、仁左衛門と共に、東西に於ける歌舞伎梨園に於ける長老であります。その押しも押されぬ長老が、幸四郎、宗十郎、福助、彦三郎等の、今を生き盛りの中老壯年と打ち揃つて、即位大禮の記念すべき年の顔見世狂言の吉例を飾るごは、如何にも目ざましい事です。餘り他では聞かれない河東節を、あの助六揚卷の華やかな色彩の中に聴くごの出来るのも一つの楽しみです。

殊に鴈治郎の實盛さか、中車の仁木さか、幸四郎の男之助さか、宗十郎の此度の役々なごは、何れも打つてつけの極まり役であるごは言ふまでもありません。これ等の人達の藝は、三十代四十代の人達の藝ほごに、もう將來大した變化のあるごは望まれますまいが、其代りいよく圓熟の境に入つて、所謂さびご云ふやうなものも次第に増して来るやうに感じられます。私は、日本の傳統的藝術の價値の尊重ご、其の支持に對する熱望に於ては、敢て人後に落ちないつもりで居りますが、それでも今後の時代には、歌舞伎の世界にも、所謂腕利きさか、頭で藝をする俳優は出て来るかも知れませんが、其の歌舞伎自身は内がはからも外がはからも段々變つて来るごは己むを得ません。従つて、何云つても、當代五十代六十代以上の俳優は、傳統的歌舞伎の眞の意味の殿將をなし、歌舞伎其物の長い歴史に一段落をつけるもので、今でこそ色々の評は受けるごがあ



つても、後々にはそれ／＼クラシックの藝ミして随分語り草になるべき人達であるに信じます。

「千代萩」で中車の仁木は、昨年二月の中座で梅幸の政岡、羽左衛門の八汐、三升の男之助といふ取り合せて見て居りますが中車は當時病後間もないことで、例の掛燭硝のセリ上りも、少し體が斜に崩れてゐて、力の充實ミ凄みの點に於て稍々物足りない感じがしました。無論今年は精一杯の處を見られることでせう。

セリ上りの仁木では、ごうも團藏のが今でも目にまざ／＼の残つてゐます。當時學校の卒業試験をそつちのけにして、三日も續けて見に行つたものです。燕生縮めの鬘に、三つ銀杏の紋附の長袴、眉間には黒血色の傷、眼張を濃くした兩眼をそつミ閉ぢ、口に例の一卷を咬へて、兩手で印を結んだ形で、すつミセリ上つて來た相好は、實以て凄いものでした。「曲者！」といふ男之助の聲で、手裏劍をうつつ呼吸が、間髪を入れぬ處に苦心があるといふので、その頃此優の直話が有名なものでした。それから一卷を懷へをさめて、揚幕へ入るまでの間は、見た目は何ともないやうですが、しまひまで寸分體が崩れないのであるといふのが、やる人にまつては言外の苦心があるものだに云ひます。唯だ、團藏には今少し背丈が欲しいやうな氣がしました。

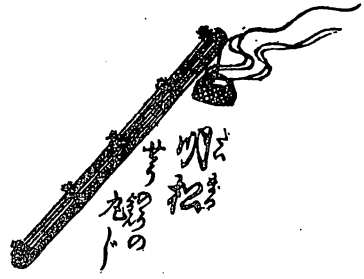
それから、對決では、例の印形へ引き毛をする爲め、そつミ左手を襟首へ持つて行く、その一瞬間が、何とも言へない深刻な味がありました。刃傷の場で、短刀を振りかざして出て來る所が又——松助の外記の至藝ミ相俟つて——如何にも魂のカタストローフも云ふべきやうな、凄愴な味を見せてゐたのが、今も目にありますが、中座でやつた中車のは、少し足取りが小刻みに早かつたやうです。併し、何に云つても中車は、吉右衛門と共に、當代の仁木役者です。それをおいては當分はいゝ仁木は見られますまい。

福助は一昨年十月、亡父の追善興行に「實録千代萩」の政岡で、歌右衛門や梅幸ミ違つた一種の味を見せて居ましたが「御殿」の方では昨年三月の中座の梅幸のミ對比出來るのも興味深いことです。梅幸のは、何よりは先づ其の烈女らしい凛とした氣品があるのが人の心を引きます。「何のまわ」といふ一語に、忠誠ミ情愛ミの複雑な氣分を見せ、雀の歌には涙ぐましい程の抒情的氣分を漂はせて居ました。福助の政岡も、複雑な内面的情緒を表はす上に於て其の特色を出して見せてくれることこそ期待して居ります。

成駒屋の「實盛」は、つい今年の三月中座で幸四郎の瀬尾で見て居りますが、其の型なごについては、もう諸家によつて餘りに多く語られて居ります。蓋し當代一品の實盛でせう。此芝居は作こしてはさうも少し御粗末な部類に屬しますが、白旗美女の片腕ミを楔にして時代ミ世話の間を縫つて行つてゐる所に一種獨特の味があります。又そこに無類の手腕を持つてゐる成駒屋には、何ミ云つても打つてつけの役柄です。純龍模様の織物の袴に福草履、突き袖の形で儼然ミ出て來るだけで、もうすつかり其人になつて居ります。

元來成駒屋の實盛の型は、昔の三津五郎、彦三郎を経て五代目菊五郎に傳はつたものを研究したものであるといふことでもあります。歌舞伎劇に於ける所謂「型」に對する私の考へ方は嘗て本誌に於ても述べておきましたが、併し「實盛」のやうな種類のものに於ては、さうしてもさういふ傳統的様式を度外視することは出来ません。今春の中座に於ける成駒屋の演出に於ては、例の水子實驗の場で、女の片腕ミ知りブツミ驚いての思ひ入から、物語に入つての細かい型、殊に「柴船の助けもなく、水におほれる不便さに」のあたりで扇をあつかふ指す手引く手なごの邊は、おほむね所謂五代目式の型によつてゐるやうでした。唯だ、「白旗諸共戻りしは、ア親を慕ひ子を慕ひ、流れよつたか、ハハア」で左を一足前へ出て、「チン」で右膝を沓脱へ踏み下すのが傳來の型ミ云はれてゐますが、私の見た日は、踏み下すことせず、従つて物語終つて、右から左の足を引いて元の座へ戻るといふ科もありませんでした。其代り、「何、御出生ありしは男子か女子か」ミ丸良助に詰めよる所では、五代目は二重でやつたさうですが、成駒屋は下へおりました。それから「ハハア、御尤も、若君御誕生ありし事……」以下白ミ矢走の仁惣太の出を抜いてゐました。成駒屋にも色々苦心の工夫を重ねた揚句のこゝでせうから、餘り細かい型の比較の詮議立てなごは大に慎むべき事ミ私かに思つて居るのですが、此の優獨特の世話ミ時代を絶妙に綯ひませる節々は、是非とも後々までも残つて欲しいミ痛感する處が可なりありました。例へば、「成人して母の怨、顔見覺えて——恨を晴らせ」ミ世話にくだけるあたりや、「つひに首をば搔き落され、篠原の土ミなるこも」での扇の扱ひや、馬上で幕外になつて、「さらば堅固で暮らせよ」ミ扇を開いて見返るあたりの情趣は、後々までも傳へらるべきものと思ひます。

瀬尾は四十四年には梅玉、今春は幸四郎、今度は中車、小萬は先には雀右衛門ミ宗十郎でしたが、今度は福助、さて、如何なる腕を生んで見せてくれるか、固唾を呑んで緊張してゐる次第です。



# 星霜三十年

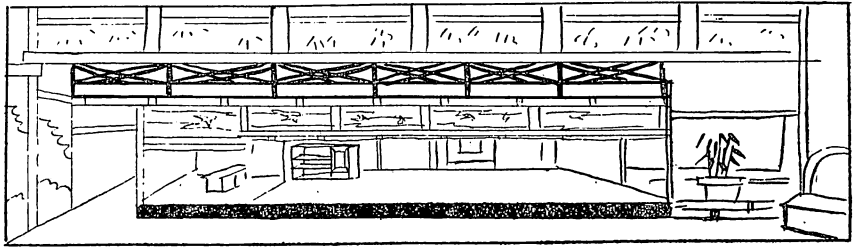
成瀬無極

「菊畑」について、昔の事が思ひ出された。殆ど三十年も前のことである。三十年云へば一時代だ。十年を一番さすれば、昔の昔の昔だ。偶然その時の番附の切抜きが日記帳の中に貼りつけてあつた。役人替名を見るに、鬼一法眼（市川團十郎）、智恵内（市川八百藏）、虎藏（尾上菊五郎）、皆鶴姫（中村福助）、笠原湛海（尾上松助）とある。これが中幕で、前後に「愛宕連歌」と「天網島」がすはつてゐたのだ。始めて、團十郎を見た少年はたゞ茫然してしまつたらしい。覺えてゐるのは、光秀が切腹の座に直つて、「時は今」云々詠じ、忽ち、身を翻して上使を一刀の下に切り捨てる、その呼吸の鮮かさであつた。その當時、剣道の修業を勵んでゐたので一層その微妙な變化に心を撲たれたのであらう。それから、「菊畑」の出の氣分こそその名調子には餘程感服したらしく、その事だけが特に日記に誌されてゐる。あすこは能樂で云ふ「鉢木」の出の「あ、降つたる雪かな」と同様、殆ど全曲を支配するやうな大切な瞬間ではないか。今も思ふ。書道で落筆の呼吸をやかましく云ふが、それはスポーツの方でスタートを切る刹那と等しく、全體の死活に關する、むしろ崇高なモメントだ。云へるであらう。それから、日記の端にこんな事が書いてあつた。「僕は常に團十郎を橋本雅邦先生に、菊五郎を川端玉章先生に比してゐたが

今日實見して益々比較の甚だ適當なるを覺えた」云、その頃の私は講筆を棄て、文學の方へ向はうとしてゐたのだ。この比較の當否については、兩優の藝を殆ど見てゐない自分には何んも云へない。少くとも、菊五郎と玉章との結合はあまり妥當でないと思はれるが、實際、畫壇に於ける雅邦、玉章と劇壇の團菊とは似たやうな地位を占めてゐたのである。

星霜三十年、それは遠い少年の夢であるが、更にこれから三十年の後を考へるに不思議な心地がする。それは、私といふものがもう存在しない世界の有様である。「菊畑」の諸役をさういふ俳優がさういふ劇場で、どんな見物を前にして演ずるであらうか。否、歌舞伎劇そのものがさうなつてゐるであらうか。先だつて南座で文樂の人形淨瑠璃を見物したときにも同じやうな感慨に耽つたことである。これは是非とも永續させなければならぬ。また實際それに價する藝術だに痛切に感じながら、一方にはまた凄まじい時代の急潮を眼のあたりに思ひ浮べて、何さなく心細く、覺束なく、果敢ない心もちにならざるを得なかつた。そのとき私はかう思つた、そして今も思ふ、問題は人間である、俳優であり、太夫であり、人形つかひである。およそすぐれた藝術家のあるとき、その藝術は決して滅びない。劇場の様式は變つても、見物の頭腦は進んでも、名人上手の卒藝はすたることはない。それは心情に訴へるものであり、そして心情は保守主義者であるからだ。一方に、優れた藝術家はその傳統を忠實に繼承すると同時に、隱微の間に絶えず新しい創造を續けて行く。樂譜は同一である、然し演奏者に依つて、何んいふ異つた音色と旋律が生み出されることだらう。そして、すぐれた藝術家の成長する素地をつくる責任は私たち公衆の双肩に懸つてゐる。祖先の心情から咲き出た藝術の花を護り育てることは私どもの喜ばしい義務である。——師走だけに、越し方行く末、様々の事を雜然と誌した。





南座顔見世興行畫の部上演

# 伽羅先代萩

御殿の場

政岡 中村 福助

彈正妹八汐 澤村宗十郎

荒獅子男之助 松本幸四郎

沖の井 中村 扇雀

ハ跡には一人政岡が、奥に

窺ひくゝて我子の死骸

抱きあげ、堪へこらへ

し悲しさを一度にわつ

きため涙、せきいりせ

きあげ歎きしが、

ト、政岡、千松の死骸

を抱き上げ、これにて

ぐれいの思入あつて、

政岡

御前さま御ゆるされて下さり

ませ。コレ千松よふ死んでくれた、出かしたな〜。

そなたが命捨てたゆへ邪智深き榮御前取替子三思ひ違ひ

おのが工みを打明けしは親子のものが忠臣を神や佛も

憐みて、鶴喜代君の御武運を守らせたもふか、ハ、ハ、

有難や、これこいふのも此母が常々教へて置た事、

雅心に聞わけて、手詰なつた毒害をよふこゝろみてた

もつたのう、ヲ、出かしゃつた〜、そなたの命は出

羽奥州五十四郡の一家中、所存の臍を堅めさす誠に國

の。

ハ礎ぞや、ミはいふもの、可愛やな、

君の御爲かねてより覺悟は極めて居ながらも、せめて

人らしい者の手に懸つて死ぬこゝか、素性しれざる彈

正が妹の八汐が手にかゝり、

ハなぶり殺しを現在に、

傍に見て居る母が氣は、そのやうにあらう、

「さう有ふ。」

思ひまわせば此程より、諷ふた唄に千松が、

「七八八ツから金山へ、一年待てどもまだ見へぬ、二年待てどもまだ見へぬ唄の中なる千松は待かい有て父母に顔をば見せる事も有る、同じ名の付く千松のそなたは百年待たせて、千年萬年待たせて、

上へ何んの便りがあらうぞいの。」

三千世界に子を持た、親の心は皆一ツ、子の可愛さに毒なもの喰うなさいふて呵るのに、毒を見たら試みて死んでくれい云ふやうな胸慾非道の母親が、又一人有るものか。

「武士の胤に生れたは、

果報か、

「因果か、

「いぢらしや、死るを忠義云ふ事はいつの世からのならはしぞこ、こりかたまりし鐵石心、流石女の愚にかへり、人目無ければ伏しまろび、死骸にひし抱き付き、前後不覺に歎きしは理り過て道理なり。」

ト、政岡よろしく愁ひの思入有て泣おとす。

此時以前の八汐何ひ出て、

八汐 おのれ政岡。

ト、懐劍にて切つて懸る。一寸立廻つて、

政岡 八汐さの、こりやなんこするのぢや。

八汐 ヤア榮御前様をたばかつた不届もの、此通り注進する覺悟しや。

ト、此時奥にて、

沖の井 ヤア不忠もの、彈正が妹八汐をこ一寸も、皆々 うごくまいぞ。

ト、皆々長刀を持出る。

八汐 や、なんこ。

ト、皆々を見て、

やア合點の行ぬ此八汐を不忠ものさは。

男之助 ヤア知るまいと思ふか、大塲宗益をもつて密に毒藥

調合せせ若君様を失はん云う深ひ工みで、

皆々 有ふがの。

八汐 イ、ヤ知らぬ、覺へはない。

沖の井 覺へないさは云はさぬ、證據見せう。やア、小巻

早や参れ。

小横 畏りました。

ト、下手より小横長刀を持て出る。



## 顔見世手打の古式

高 谷 伸

屋臺囃子、祇園囃子、六齋念佛、さては勤王隊のびいひより  
ひょうりひよりなごの賑かな御大典奉祝踊のさわぎを外に机  
にむかつてゐる自分の傍に踊り提灯が轉がつてゐる。

えらいやつちや萬歳萬歳には手頃の長提灯、紅の色こそ褪せ  
てゐるが、墨くろぐろご自分の名を書かれたのが、押入から現  
れたのである。

その提灯に印された二八の符號ミいふのが七八年前、京都に  
歌舞伎趣味の會であつた二八會の名残りなのである。その會員  
も今はちりぢりで、ある人は代議士になり、ある人は茶の宗匠  
になり二三の故人もできて、今でも芝居でよく顔を合せるのは  
高原慶三氏だけになつたが、この會のできたのが十二月の十六  
日、その頃京極の横町にあつた、ちよつと洒落たそばに初め  
て集つたものであつた。

その席上で顔見世の手打をやらうといふ話を持ちあがつた。

もこより揃ひの提灯を拵へるやうな洒落た會であるから、忽ち  
賛成者ができて、手打に就てのいろいろの話の花が咲いたが、  
結局、手は打たれずに終つてしまつた。それから後もよく手打  
の話は出たが、いつもお流れになつてしまつた。

手打ミいふのはきんなものか。おはづかしいが自分は大正五  
年十二月京都座で、ちよんぐりこ、ちよんぐりこミいふ奴  
を一度見たきりなのである。それもかなり末流の型のくづれた  
ものらしかつたので、いろ／＼の書物を漁つて大體、手打ミい  
ふもの様子を考へてみた。

手打の形式は江戸ミ上方ミでは同じではなかつたが、盛んな  
のは、道頓堀の顔見世手打であつた。大阪での手打は享保の頃  
に始まり、寶曆の頃が最も盛んであつたが、次第に下火になり  
最後は明治三十五年十二月の浪花座に現れたものだといふこと  
である。

顔見世や一番太鼓二番鶏

さいふ句は有名なものであるが、もつこ古くは暮六つに一番太鼓を入れた。今の午後六時である。それを初夜(八時)に打ち、二番太鼓を今の十時に打ち、四つ半(十一時)になるまで、「始り觸れ」云つて頭取が大音で觸れて廻る。これが夜半正九つで、これから場、棧敷に提灯が入り、三番太鼓を打てるまでを合圖に三番叟があり、それが濟むまで、「引合せ」になる。これは役者を紹介する意味で、一座の役者が素顔で袴をつけ手雪洞をもつて兩花道から出て舞臺へ並ぶのを、頭取が手打ち書いた雪洞を持つて迎へ、座元の挨拶があり、改めて座元から觀客に立役女形新參役者を引き合せの口上があり、それが終るまで場や棧敷にきてゐる最眞連が立つて景氣よく手を打つて顔見世の當りを祝ひ、囃子方が四海波を唄ふことになつてゐた。

それが濟むと頭取が出て、狂言名題と役割を読み上げ、その終りに柝が入るまで、花道から各俳優の最眞客が大きな聲で暫くと言つて、それぞれ奇抜な趣向を凝らした贈り物を持つてくるそれを舞臺へ積みあけて世話人が笹の葉に附けた目録によつて聲高に披露する。當時の劇通であつた手打の連中が前茶屋から堂々乗込んでくる。

その連中さいふのは四つあつて、一番古いのは享保五年にでき、船場の好劇家笹屋小兵衛、瀬戸物屋傳兵衛が統帥した笹屋連である。つゞいて享保二十年に大手連、明和七年に藤石連、

安永四年に花王連ができた。これが大阪の四連中である。藤石連は寛政頃に絶えたが、花王連のさくらさいふ言葉は、意味がかわつて今だに残つてゐる。

これらの連中の服装は、黒の金巾木綿の着附に帯は白紬に金糸の縫箔を交へ、頭巾は緋の毛羽に、笹せ大手なごの符號を切付けた龜末なものであつたが、後年整潔になり、仕組に應じて打手の衣裳に引締の仕掛をするなご派手なことになつた。

舞臺へ乗込んだ手打連中は、その折々の唄、たゞへば大矢數里の花、四季三景、道成寺なごに合せ、拍子木を打ち興を添へる。天明末から寛政になるまで、手打の曲に合打さいふ事が始まり、後には舞臺へ種々の造り物をせり出したり、花木の釣もの遠見なご、趣向を凝らしたものである。これが大阪の顔見世手打で、江戸のは初日の前夜最眞客が役者の家々を廻つて手打をやり最後に夜が更るまで一同劇場へ入り、思ひ思ひの聲色をつかつたさいふことである。

大阪の手打連中の發達したのは、この連中が箱提灯をかけ並べて景氣を添へ、本舞臺の大幕兩棧敷の高欄幕なごを贈るなご陰に陽に芝居を後援するご同時に、劇場側もこれを歓迎し、双方相俟つて進んだからである。

今ではこの古式も廢つたが、柴舟の延寶頃の句にある、

顔見世やまだ宵ながら人はいり

の趣は、今も猶京の顔見世に俤を残してゐる。





## 顔見世の感激に浸りつゝ

未だ見ぬ舞臺の幻想を描く

富田泰彦

洛内洛外の名所舊蹟が、悉く落葉に埋もれ、霜雪に掩はれた空林朔風落漠たる師走に、同じ京の街には、奇しくも歌舞伎の花が咲く。——貞享元祿の昔、京洛の劇場創始者村山又兵衛三小夜嵐ミ呼ばれ、六法に新機軸を出した初代嵐三右衛門ミに依つて、制定された顔見世なるものが、昭和三年の冬、同じ京都から起つて、我劇界の覇を握る處の松竹の檣幕に傳へて、寔や『周の春軒端に梅の花が咲き』の古川柳の如く、他も我もその春心地に酔ふこゝが出来たのだつた。

實際京都の人々は、歌舞伎見物には恵まれ過ぎてゐると思ふ春の花、秋の紅葉は、年々共に生長もしよう、祇園祭の鋒や葵祭扱つては時代祭の古典味に、誇りを感じ得る人は、先づ京都のみに、その名残りを偲ぶこゝの出来る『顔見世』情調なるもの

を、もつこ舉つて讃仰して可い譯ではあるまいか、——滅び行くものゝ美しさ、一瞬にして忽ち消えて終ふ舞臺の幻影、私達は幾度も云ひ古るした言葉だが、見果てぬ夢を追ふような、歌舞伎に對する惜愛、まア疑ミ考えても御覽なさい、こゝ五年間も出でざる内に、眞に歌舞伎らしい舞臺の生命を、誰々によつて取り止めるこゝが出来るでせうか、——是れぢや私だつて、勢ひ感傷的にならざるを得ない。

處が、年々歳々東西名優ミ、それに配する名狂言ミを網羅する顔見世——取り分け本年の狂言の選擇の妙を盡した點は、恐らく歌舞伎を愛好するほごの人には、堪能が出来すぎるもの云つて可い。大阪人が、一年中道頓堀の大歌舞伎を見遁さずに來ても、是れだけの收穫はあるまいと思ふ。今度の狂言は、何

れ一つ取つて來ても、大阪の一興行の呼び物ミなるべき中心が出來てゐる。たゞへば、『先代萩』を持つて來るにしよう、福助の政岡と共に宗十郎の八汐が興味である。更に幸四郎の男之助は、云はずに知れた隨市川の荒事の骨法を傳へて、此間不評だつた吉右衛門なごの比ではあるまい。中車の仁木にいたつて男之助の臺詞の如く「一只の鼠ぢやあんめえ」處か、天下一品の金箔付の至藝である。對決や刃傷のグロテスクな處が見られんまでも、この床下で、觀客は満足しよう、椽の下の力持云ふ比喩もあるが、皮肉に云へば、今度は逆に床下のために、この御殿が支へられる結果になりはしまいか。

次は、『鴈治郎の場合』として、上演前から大音聲で褒の上けた『實盛物語』である。果然昭和三年度の劇壇を壓倒した實盛になつた。東西の劇評家は筆を揃へて、鴈治郎の實盛の立派さに敬服したものだつた。その大阪の演出の時は幸四郎だつた瀨尾が、今度は中車だ云ふ點にも、好劇家の足が牽きつけられる。幸、中兩優の演出を比較するに云ふに既に歌舞伎劇觀賞の最大條件であり、怡樂であるからだ。

宗十郎の『釣女』に對しては、そのマンネリズムを咎めてはならない。この場合の太郎冠者は、宗十郎云ふ人ではあるま

いか……誰やらが云つたが至言だ。『曾我の對面』は勿論顔見世情調の豊かな舞臺美にある。千両箱を幾つも舞臺へ轉がしたような眩惑——是れは甚だ卑近な例だつたが、藝術的に云へば古典歌舞伎の一つの形式を律動せしむる處の一樂章である。中車の工藤の貫録、鴈治郎の十郎の優美、幸四郎の五郎の霸氣、宗十郎の舞鶴は、朝日奈を女に行つて顔を揃へた大舞臺。是れに福助の虎が出るか出ないか本稿を草するまでには判らない。

『菊畑』は、中車の鬼一が、彦三郎の髯の意休で出てゐるだけに、何んだか阪彦には、助六に下駄を頭へ乗せられる以上の苦慮を興へはしまいか、遠の松竹も是れには藝題の『三略の巻』を鳥渡置き忘れた態だが、何は鬼もあれ、恐らく初役と思ふ福助の智恵内が見つけものだ。是れには、また臺詞になるが「智恵ないどころか……」ミブラス、マイナスを付けて置く。宗十郎の虎藏は手ごころもあらうが、いつぞやの『三代記』の三浦之助のように、演處に役柄を忘れて貰つちやア、智恵内に代つて杖は私から振り上げよう。扇雀の皆鶴姫、綺麗以上に何かあつても可い年配である。鬼に角此一幕は、私としては今度の顔見世を引つくるめて期待してゐる。

問題になつた『大願成就殿下茶屋聚』の扮本を見せよう云

ふ譯でもあるまいが、『大晏寺堤』は玩辭樓十八番内の一つに極めの付いた刀の切れ味、「すんご切れまます」云ふだけ管なもの中車の高市、幸四郎の加村に眞に東西名優顔合せ狂言、——是ればかりは私達だ、敢えて提灯は持たずとも、名題以上の俳優十幾人が、差し出す箱提灯、成駒家の眼千両の働き「おつここれからごらうじませ」。何にしても今度の顔見世では、『賞盛物語』の世話舞臺さ、この凄愴な土手場さが異色ある舞臺面さなつた。

×

扱て『助六』である。全く、扱て『助六』であるに改まつて見たいほぎの喧しい狂言である。いつ上演しても宣傳の種は盡きないほぎに、通を振り廻せば、いろ／＼な劇書ミ首ツ引きで列べもしようが、「コリヤ又、何んのことつたい」ミ助六に笑はれるから止そう、……だが萬事大業な、この『助六』を先づ上演さした白井社長の太ッ腹な處には、敬服もし、感謝もせねばならない。「この五丁町へ、脛をふん込む野郎めら、己れが名を聞いて置け、先づ第一おこりがおちる」ミ助六が怒鳴つても、京大阪ごころか、東京だつて滅多に出されない歌舞伎十八番中の『暫』ミ共に大物、それが「間近くよつて面像拜みカッカ……奉れエ」が出来るのだから、舞臺の皆々ミ共に無條件で観客も「イヨウ」ミ驚異の聲を思はず放つこみだらう。

×

取り分け今度は、堀越宗家の婆さんが、女意休で買つて出た喧嘩は、矢張舞臺が吉原だけの幸四郎ミの達引こもなり塲所柄花も咲く、さしづめ白井社長が版權料の高も揚巻ミ飛んだ仁和加の太夫さんで仲裁に出るまでは、この女意休、てんかんならぬ下駄を頭へ頂かした位では逆も愈らぬ例の病氣、死んだ田村成義氏も、この版權料問題に疑義あつたらしく、「法律的に何うあらうミも宗家へ無断で上演するこは徳義上遠慮する方が隠かでせう、併し餘り仕舞ひ込んで置くミ、人が忘れて終ふから、門弟方のうちで適當な人があつたら、充分研究した上で演じさせるミ云ふ方が好いかも知れん」ミ、その著『無線電話』の市川團十郎の項に書いてある。

×

一體に『暫』にしろ、『助六』にしろ、その洒落や皮肉は、何うして現代人にピンミ享け容れられよう、京大阪は鬼に角、現に今の東京人だつて、それだけの感銘を受けた人は尠い。「へん、是れが莫大な版權料附ミやらで、萬事にかけて馬鹿騒ぎをする助六なんですか」ミ、大正十四年三月歌舞伎座の羽左の上演したのを見物した時に、傍らの椅子にゐた人がさう云つた。「彼れで昔からの助六ミは多少時代を參酌して變へた處があるのですよ」ミ、幕内の某氏が私に教えて呉れた。

×  
 兎に角「揚巻を鉢巻で買ふ江戸の張り」總ては、この一句で盡きてゐる。歌舞伎十八番の「助六」は、彼の紫の鉢巻が身上である。「……間夫の名じりの草の花」の河東節の合の手で、花道へツーンと出た處が生命である。

×  
 恰で今度の顔見世は歌舞伎のエキスを集積したようなものだ。諄く云ふようだが、大阪の好劇家は、たゞ一二年二年費しても是れだけの歌舞伎の滋味を攝取することは出来まいと思ふ。此點顔見世を見る機會を持つ京都人は、時間的にも、物質的にも利得をしてゐるこゝになる。斯く經濟觀的に藝術を打算しよう



## 吉例 顔見世

山本修 二

×  
 なごごは、甚だあさましい所業ではあるが、實際にそれほごに羨ましくも思ふ。

×  
 『歌舞伎の國の春』と目されてゐる、顔見世も遂々今年の慌しい師走の巷に、何んもなく明るい色彩を投げかける。而も我々國民が赤誠を籠めて奉祝した御大典の歳だけに、斯うした名狂言を揃えられると、たまらないほごに嬉しくて、ゾクゾクする恰度お正月を待ちかねたような少年期のように、何んもなく心がさきめいて、肝腎頼まれた題材を捨て、終つて、自分勝手な歌舞伎を享樂する感激の起くまゝに、まだ見ぬ舞臺の魅惑を机上に感じながら、取りさめもなく一氣に書きつけて終つた。

思ひ起せば、おおそれよ——なごごいふこ、『對面』の臺詞だ

が、そも中學三年の昔、ミいへば、今年でちやうと二十年前、



顔見世てふものを見始めて、或時は三階の大向ふで、案内婆さんのつれなさを啣ち、或時は二階樓敷から、間の抜けた「成駒屋ア」を叫んで、満場の失笑を買つたり、さんざ苦勞はしたものの、好きな道で、十二月の南座を缺かしたことは一度もなかつた。それが昨年、ふじした風邪の心地から、氣の合ふた友垣ミの約束を破つたのである。するに天罰あら恐しや——正月早々子供をなくする。家庭に内亂の絶え間がない、それに借金は嵩むばかり。いかにも吉例顔見世はよく言つた。今年、たゞへ親の仇に廻りあつても、それはまづ後廻しにして、顔見世へ行かうと思ふ。

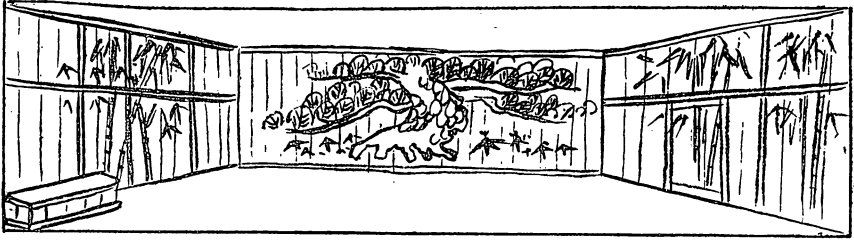
——さいふことに心を定めて、今年の狂言を眺めるに、これは誠に結構な並べ方。まづ何より先きに目立つのは、晝の部一番目の所謂「史劇」のお廢止である。何が下らないと言つてもそこには色々己むを得ない情實もあるのだらうが、あの一番目の二時間くらゐ、欠伸の出るものはなかつた。一體上方俳優の常として、理窟っぽいものはこなしきれない。それからあらぬか史劇をやるさういふ段になるに、變にしやちこばつて、いよいよ理窟っぽいものにする。脚本も脚本で、名文句續出し、いつかも、淀君の臺詞に「猿面冠者の情慾をひしいでくれう」さいふのがあつた。それから見るに、今度の先代萩の「腹が空つてもひもじうない」の方が、同じ無茶な文句にしても、實感が湧き

上る。

しかも中車の仁木である。今度「対決」の出ないのは、少し許り残念だが、あの床下の引込みの四五分間は、もしもこの世に「至藝」さいふものがあるなら、あれこそはそれである。あの鼠色の長社社に、漂々々纏ひつく「凄味」の後光のやうなもの、これは吉右衛門や延若が、いくら力瘤を入れように、到底眞似の出来ないものだ。中車の「床下」の引込みは、その味は違つても、成駒屋の「河庄」の出さしに、後世の語り草になるべきものだ。

それに久方振の「實盛」に、恐らく京阪劇界の年代記ものである「助六」に、鷹の「實盛」は、その押出しに於いて柄に於て、當代一二期待されながら、さうした譯か、明治四十四年頃の南座以來、久しく出さなかつたものを、今年の中座で上演して、喝采を博したものだ。私は不幸にして見損つたが、引込みの馬上の大見得な姿、これはレエニングラードへ押出したら、赤化防止に役立つものだ。次の高麗屋の「助六」——河東節のメロデーが、鴨の河原へ響くのは、恐らく開關以來であらうが私如き贅六が、トンチンカンなことを言へば、それこそ鼻の穴へ屋方船を蹴込まれるから割愛する。

願ひて、よくもこれだけ、平凡な御託を並べたと思ふが、そこが「吉例顔見世」なる所以。おまけに今年は御大典で、そうね、地方のお客が見えますから——。



南座 顔見世 興行 晝の部 上演

釣

太郎 冠者 澤村 宗十郎  
 醜女 松本 幸四郎  
 大名 澤村 田之助

大名 太郎冠者祝して一つ舞つてくれ。  
 冠者 畏つてムる。

〽高砂屋此盃が二世の縁、神の御前で祝言  
 は、三郎様がお仲人下よし、夫迎も浮氣  
 心があるなら、ほんに罰が當るであらう  
 ぞいな、必らず見捨てゝ下さるな、傍に  
 聞き居る太郎冠者、氣をのみあせり。

アリヤ〜願ふた御方、其釣り竿を私にお貸し  
 下され、美事釣つて見せませう。

大名 早うつれ〜。

女

常磐津連中

冠者 釣るんではムらぬ。エイ〜。

常〽つろよ〜 合釣ものは何に〜 合鯛や鰹  
 や惠方の棚につき〜 鐘、合信田の森の  
 狐にあらぬ、合木比壽三郎どの、合釣針  
 をおろして三十二相揃ふた合よい妻を釣  
 るよ、合十七八を釣るよ、おかゝさんを釣  
 るよ、餘念も長き鼻の下、ヲ、當るぞ  
 〜〜どつこい締めたと引上げれば、かつ  
 ぎまぶかにかつぎし女。

ト此内かつぎの醜女出る。

そりや掛つたは〜、あらたふとや〜、こち  
 へムれ〜、イヤ、申たのふだお方、かやうな  
 目出たい事はムりませぬ、まづおかつぎまのか  
 つぎをおとりなされ、御對面なされませ、サア

くこれからは三々九度の盃ぢや、これへムれ何も恥かしい事はない、そなたと夫婦になるからは、春は花見、夏は涼み、秋は月見の酒盛に天におらば比翼の鳥、地におらば連理の袂、そもじは必ず變るまいな。

醜女

何のかわつてよいものかいな。

冠者

先づ何は兎もあれ御面像を。

ハかつぎを取ればこは如何に、履に等しき醜女ゆゑヤ、鬼か化物か早く消へてなくなれエ。

醜女

ノウく我夫マ、今おつしやつたお詞は、わたしや忘れはせぬわいな。

冠者

ヤレ情けない兎してくれく。

醜女

そりやつれないぞへ太郎冠者どの。

ハこちらむかしやんせ、何ぢやいなア。

常ハ思へば深い戀の淵、合しづむ合此身を釣糸に。結んだ縁の合西の宮蛭子もふけて二世三世合かわらぬいろ、アア

合竿竹のすゑばさかゆく合女夫中。

冠者

おふく恐ろしやく。

大名

ヤイく太郎冠者、三郎どのへ授け玉ひし妻ぢやによつて、いやおおはなるまいぞ。

冠者

そなた様は能い月日の下でお産れなされた、此太郎冠者は月も日もなく黒闇で産れたと見へまする。

大名

何は兎もあれ目出たう舞つて遣わすまいか。

冠者

勝手にさつしやれ。

大名

高砂や此浦船に帆をかけて。

常ハ月諸共に舞の袖、合女蝶男蝶の中もよく、結び淡路の鳥かげや合遠くなるせの沖の石、かたい契りは住吉の合早いがお先と太郎冠者、行くをやらじと大名を、結ぶゑにし釣女。

ト此内冠者上臈の手をとり連れて行かうとする。

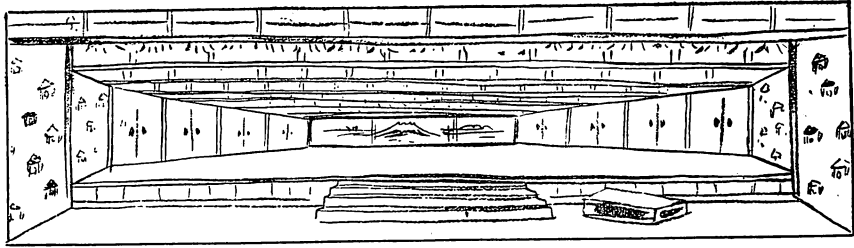
大名やるまいとする。

醜女りん氣して冠者をとらへる。

と追つかけになり。

販かに

幕



(南座顔見世興行登の部上演)

壽 曾 我 對 面  
— 上 —  
演 脚 本 —

工藤左衛門祐經  
八幡三郎行氏  
近江小藤太成家  
曾我十郎祐成  
曾我五郎時致  
曾我臣鬼王  
小林舞鶴

市川中車  
中村政則  
市川九團次  
中村鷹治郎  
松本幸四郎  
阪東彦三郎  
澤村宗十郎

工藤 親はなくとも子は育つと父を討たれて無念なか  
五郎 さん候  
工藤 口惜しいか  
五郎 さん候  
工藤 さもそうぞ、さもあらん、併し如何程無念と思ふとも此祐經は鎌倉殿の御覺え目出度三ヶ莊の大々名連れる時は千騎二千騎連れざる時は百騎二百騎、それにひきかへ汝等はやせ浪人の分際で敵討とは及ばぬ事だエ、叶はぬ事だ

五郎 フム、ハ、  
ト三寶をくだく、すぐと思込むト近江

八幡きつとなり  
近江 ヤア、君へ對して慮外千萬お傍には近江小藤太  
八幡 八幡の三郎、付き添ひおれば  
近江 どつこい  
八幡 そつこい  
二人 やしエしない  
工藤 兩人ひかへい  
二人 ハアツ  
トひかへる  
工藤 今汝の孝心にめで討たれてやり度き者なれど衆ねて紛失の友切丸その證儀をいたさずして某を討たんとは及ばぬ事だ、叶はぬ事だ  
十郎 スリや友切丸が出でざる時は  
五郎 仇討は叶はぬか、兄貴  
十郎 弟  
五郎 イマ、しいなア  
ト此時向ふにて



鬼王 アイヤ暫く

ト出できたりいつもの處にて

しばらくお待ち下さりませう、御主人これに御座り升か

十郎 や、その方は鬼王、何にゆへ在つて此處へ

鬼王 ハアツ、先達て紛失なせし友切丸千辛萬苦して手に入りました

れば持参仕つて御座りまする

十郎 スリヤ友切丸が手に入りしよなア

舞鶴 ちつとも早くここへ

鬼王 ハア、倍臣の身分なれど眞平御免ください

ト本舞臺へ來たりて近江に渡す工藤うけとつてコレを

見て

工藤 是ぞ誠に友切丸

十郎 再び手に入る上からは

五郎 イザ立ち上つて

二人 勝負々々

工藤 かく友切丸出でし上からは討たれてやりたき者なれど今は叶は

十郎 時節をまてとは

五郎 ひきやうな祐經

工藤 イヤ、ひきやうではない、卓月下旬富士の御狩りの惣奉行役目

終らぬその内は私の仇討は叶はぬ

十郎 スリヤその役目終らぬ時は

五郎 仇討は叶はぬか

十郎 寶の山に入りながら

五郎 手を空しく歸へるのか

工藤 イヤ手を空しくは歸へすまじ、今日對面のその印、さしよふ年

ら年賀の玉もの

ト切手二枚投げる、十郎うけとめて

十郎 コリヤ、コレ狩り場の

五郎 二枚の切手

工藤 イヤ切つて恨みをはらせよ兄弟

二人 云ふにや及ぶ

舞鶴 まづそれまでは

工藤 祐成、時致

十郎 案内はかねて覺へある

五郎 卓月下旬の

舞鶴 闇路を幸ひ

二人 工藤左衛門祐經どの

工藤 狩場であをふ

皆々 さらば

ト見得皆々よろしくあつてアリヤト聲をかける此  
件あつて

— 幕 —



# 「先代萩」

## その他

楠田敏郎

私は、たしか三年ほど前の本誌に、南座の顔見世興行のこゝを執筆した。その時も勿論鴎治郎、幸四郎、中車なごの合同大一座であつた。今度はその顔ぶれに東京からは宗十郎が加はつて居るが、其時は梅幸が一戻橋を出して居た。

今年の顔見世本極りの藝題も顔ぶれを見るにつけても、京都のお客は随分幸福である。東京でこれだけの芝居を一日に見ることは鳥渡望めない。と同時に、京都のお客なればこそ、この盛澤山に、おくびも出さず、おさなしく見物をするのださも云へるだらう。

何か研究考證を云ふ註文だつた。然し、我々若輩が口を出す餘地のないほど今度の總ての狂言にはいろいろな人が、いろんな研究を發表して居られる。即ち敢て贅せず、かへりみて他を云はうと思ふ。

其處で、先づ本極りの名題を見て感じることは、おそろしく時はづれの芝居が揃つてゐるに云ふことである。然も、巷間傳

ふるところによるに、わが高麗家は、時はづれだから云ふ理由で宗家の許したがらぬ「助六」を、その爲めに宗家ご何うなつても構はぬ云ふ意氣込みで持つて行くのださうである。したがつて、幸四郎は「助六」をそれほど京都の見物に見てもらひたく思つてゐるのださ考へてよいだらう。

さうして見るに、その他の、時はづれであるところの『曾我の對面』も、『菊畑』も、總て出し物にする諸君が、かなり六ヶ敷い芝居道の傳統も因襲にさからつてまで見て欲しがつてゐるもの、即ち、自信のあるものと視てよろしいと思ふ。さうださするに、今年の顔見世興行は、例年のそれよりも、すつと面白く、また緊張した舞臺なるであらう。——さ、さう書いて來るに、一つ出かけて「助六」や「釣女」が見たい。

東京の連中に、福助を加へて「先代萩」をやる。これは十月こちらの歌舞伎座へ出たばかりだ。極めつけに云はれる歌右衛

門の「政岡」に中車の仁木、八汐と男之助は吉右衛門がやつた今度は福助が政岡、宗十郎が八汐、幸四郎が男之助、さうも、この方がすつミ大舞臺である。歌舞伎座では、流石の吉右衛門歌ミ中車に押されて、ひさく小さかつた。

私は福助の政岡をまだ見てゐない。しかし、これを歌右衛門であるミ、極めつけだミ云はれるのに、私にはさうも政岡ミ受取れないのである。歌の柄は、それが立派すぎて、百萬石の奥方になる。でなければ例の流石がばう、ふつするのだ。即ち、斷じて乳人でなくなる。

◇  
脚本には、床下で、仁木が例の忍術でたじくミさせ、見得を切つてから「うふふ、ば、馬鹿奴」ミ凄味に云ふことになつてゐるが、中車もこれを云はない。充分間を持たせて無言不動の大芝居をやり、そのまゝ花道を引込む。矢張りその方がよけいに凄く来る。その凄さも、中車の「柄」がさうさせるのではあらうけれど……。

話が逆になるが、世の中に、この「御殿」くらひ退屈な芝居はない。忠義をあらはす形式があるひは、昔の見物には、あしななければたんのうせず、また、當時の民衆は、あんな風に若殿が苦しめられることに一種の痛快味を感じたかもしれないが、既に今日の看衆は、あゝ云ふ悲劇ミ、それを運ぶ表現形式に何の魅惑をも、興味をも感じないと思ふ。

◇  
が、強いてあれを見せるミしたら、政岡の藝一つによるものである。あそこでは、政岡役者が、實に充分見せることが出来る。歌右衛門は、柄に無いほご立派すぎはしても、たしかに、満足させた。しかもあの人は癡人に近い身體で、舞臺一杯にうごけない、いや、むしろ座りつきりである。殺された千松の傍へ寄つても、それを抱き上げて、歎き乍らの大芝居がうてないにも拘はらず、實に立派な政岡を見せた。私は、今度のあの藝を、一つの「型」ミして残しても好くはないかさへ考へてゐる。福助が、それだけの芝居を見せてくれるか、それだけの興味でも「先代萩」は見る價値があらう。

◇  
鴈治郎のものミして、私は、さうも定評のある「梅忠」なごよりも、寺小屋ミか、盛綱ミかミ好きである。それには、あの人の匂ひが、すこしでも妙く感じられるからである。(かう云ふミ上方のひいきに叱られるミおもふが)したがつて、實盛も春藤も、おもしろく見る事が出来るものだ。

これから、あの人の年齢が、必然的に、私の好きなものばかりをやる鴈治郎にしてくれろこと思ふ。そして、それを成駒家のためにも祝福したい。——ミ云つてくるミ、今度の南座に於ける鴈治郎の出しもの二つに、大いに賛成をしたことになるのである。(十一月廿三日)



六百日

# 皇室思ひの實盛

新谷誠太郎

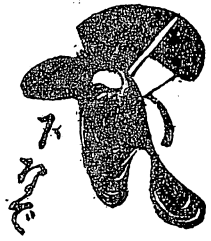
御大典直後の京の街の顔見世に、實盛が出る事が、誠に意義深い事だと思へば、如何に宣傳とはいへ、こじつけもしない、「源平布引瀧」の九郎助家が、何故に御大典に關係深いか、お叱りを受けるか知れませんが、元來實盛の性格は、義賢の御臺の炎を救ひに来て「女ならは助けよさある小松殿の情」を重盛の腹を説明してゐますが、序の西八幡の館で、鏡みがきなつて入り込み、面を肩かして清盛を諷める運びが、まごころ皇室を思ふ一心がある、源平二股武士だなきいふ實盛も斯く研究してゆくと、實に立派な皇室思ひの武士であつたのです、然し劇として九郎助内だけの實盛は、或は二股武士らしい所もありませんが、實盛が北國後原の未來なきをいはするの、一つは作りすぎではあるが、あの一言が二また武士の覺悟を現はしたものと、して作者の注意深さもよく窺はれます、この二股武士の苦惱が役者の腕の出し所で亦興味深くなるわけであります、近頃

この役者も、大がいはづほらをして抜く幕切の馬上の物語、遠に鷹はこの馬だけは決してぬきません、柄の大きな立派な、そして愛嬌こぼるゝばかりの鷹が、馬上豊かに太郎吉を續してゐる型は、綿繰馬との對照がいゝのは勿論、その間の實盛の腹も思ひやられて、思はず涙ぐましくなる程の事がありました、然し中座で見た時には、小道具のセンセイが癡り過かこの綿繰馬が、餘りに馬らしく出来てゐた事で、この分で行く終りは春駒にでもなりはしないかと思はれます、斯くては作者が近江の片田舎へ金ピカの武士を出した趣向が丸潰れになつて地下の千柳も泣出す事でせう、實盛の見せ處は、いふまでもなく、物語が山なのですが、實際に役者の腕は子供を馬上で續なす業で、或人の、チョチアバーの異形で、おちよくつてゐる様であつたり、或時は孫を續す老爺であつたり、結局は老練を待つより外はないのですが、老練になるに、四十男、水もたれる縹子鬚

男にはなり憎いのですが、その注文に陥つた役者は、東西を通じて成駒家程ビツタリ陥つた役者はありません、これだけでも顔見世の値打は充分あります、物語は立派にゆく事は勿論ですが、あまり型式美に囚はれます、所作事の一幕幕の様であります、先年延若が神戸の興行で前の場の舟の場を出しましたが、進歩をしたといえ、今の大道具、布浪の間を小萬が泳ぎついて腕を斬られるまでが、まことにいぢなく、無難作な場でありましたが、次の物語になるに、延若氏入念に物語り、華美に動いた結果が、物語が生きすぎて前幕にした事が全然嘘になり、「實盛は見てきた事にカサをかけ」さいふ川柳が生れさうになりました、實盛は、まづ七三にか、つて瀬尾の十郎の出を待ちますが、たゞ無意味でなく、御臺のお腹を案じる氣持で、家臺を見る心地がこの芝居の見逃させぬ第一で、表口を這入つて九郎助の附廻しも、只武士のエラサを見せて反り身で附廻しにするのは實盛役者落第の第二で、これも上手の家臺に氣を取られてゐるからでないならぬのです、檢分の形は八の字に開く大芝居のミ、かゝりですが、中車の十郎に對して、この見得は、實に一枚繪にも残る繪畫美として將來残る型でありませう成駒家のうまさがか、にもあります、例の手の講釋の件りで、口から出まかせの唐の引事に、武骨一片の十郎を煙に捲く悠心たる餘裕であります、物語の美で華美にならず所々に世話に碎けるいき方等もきつちり當て欲て書かれた様に思はれます、御

産の件りになつて一度扇雀氏が妙な事をやりました、太郎吉の覗きに行くのを三度叱るがキツカケで赤子笛が鳴るのが定ですが、扇雀氏のは三度目には實盛自身がのぞきに行き、太郎吉に叱られ、見物をドット笑はせるをキツカケにオギャ／＼になるのです、勿論、大きな聲で源氏は埋木等いつて俄に口を押へる程ウロタエタ所もある實盛ではありますまいが、如何にお産が氣にかゝるさはいえ、義資公の御臺所の産家を覗く程我れを忘れては困る事で、當時扇雀氏にも注意しましたが、大阪の實盛として残つてゐる一つの型で、未だ青年歌舞伎當時の氏であり、或る先輩から教えられたま、をもちひたゞけで、同氏も此點は不満だといつてゐた様です、今の扇雀クンにこの實盛再演の勇氣ありやミ聞きたゞしたら、何ん答えるでせう、さぞ北國の勇原邊りで見參くゝ茶化して了ふ事と思ひます、事の序でに操ミ、芝居の年代記を述べて責任だけの頁數を濟ます事にします、操になつたのは寛延二年十一月廿八日大阪の竹本座で待宵侍從、優美藏人「源平布引瀧」で序の切錦太夫、二の切上總太夫三段目實盛が政太夫、四段目が大隅掾、道行五段目が長門太夫人形は實盛を吉田文三郎がつこめたが二段目を語つた上總太夫はその年、これを名残りに他界の人となりました、江戸の舞臺にか、つたのはそれよりすつち後の寛政五年の中村座で宗十郎の實盛であつた。





# 常磐津「釣女」

石割松太郎

もう顔見世月になつたか。月日の経つのは早いものだ。去年の顔見世は、病餘のまだ生々しい身で、南座の棧敷の客になつた。あさから思ふさ少し冒険であつた。が、あの時に梅幸の「茨木」を見たのが、恐らく優の「茨木」を見るのが、終りになりはすまいか、「茨木」で發病した梅幸は、この狂言に想出が深からう、同じ病ひになやむ私も、その「茨木」に思出が多い。

その梅幸は、今年には來ないが、幸四郎はよく顔見世に來る。いつか、幸四郎の「道成寺」を夜の切に見て、花やかな舞臺から出るさ、四條の通り、東山は總かにくろすんで、圓山あたり灯がチラ／＼、するさ、さつさ、私の横顔を掠めた京名物の時雨。これ以來「道成寺」も「時雨」もが聯想されるそれほごに舞臺も京の町も、クツキリも印象されて、今に私に「顔見世」の思出の一つにして残る。

今度は「實盛」か「大曇寺」か「助六」かを書けといふ注文だつたが、前二者は度々書いたので、芝居を見ない前に筆執る氣がしない。この點からいふに「助六」が、私の執筆慾をそよつたが、東西の劇界文壇の人々も、恐らくこの「助六」に筆を執らうと思ふさ、——實は「助六」もつまらない、雑魚の魚まぢりはよさうと思つた。

只いひたいことは、「助六」をやるならば、金に殺目をかけずに積物も吉原から、河東も——藝の巧拙はいひませぬが、品のある旦那衆らしい河東を聞かしてほしい。憎まれ口をいふぢやないが、家元さはいふ山彦ながしの河東の三味線はまつびらだ、藝の巧拙でなく、品がない、河東の生命は「品第一」です第一「山彦」さいふ家元があるかしらん、河東の三味の家元ならば、聞えてるが、河東の家元ならば「河東」でなければならぬやうに思ふがどうあらうか。

藝の「品」をいふことについて思出したが、この間ある席で  
浄るり博士でノドの御醫者さん加藤亨博士の「吉田屋」を聴い  
た。ほんのその場の思つきであり、準備がなかつたから、三味  
線もあり合せ、これでは浄るり博士の藝を品隠しようとは思  
へないが、外の人物は措いて問はず、藤屋伊左衛門が、あれだ  
けの伊左衛門を、浄るりに限らず、常磐津その他の流派でも、  
あれだけの品——御大盡の品を持した伊左衛門は未だ聴かなか  
つた。この一點に教へらるゝところが、私は多くあつた。

漫談が長くて、私が書かうとした「釣女」が、逃けてしまひ  
さうになつた。——この「釣女」は河竹默阿彌の六十八歳の作  
き聞く。即ち明治十六年十二月、花柳壽輔の大濠ひに出た踊り  
であるのが、後に劇場に度々上るやうな人氣ものになつた。

「戻り橋」も、常磐津明治の傑作、面白くもあれば、誰  
でも知つた曲。林中が小文字時代には、嚙華やかで面白かつた  
らうと思はれる。晩年の林中が、萬世橋の白梅さいふ席に出て  
さつかへ引かへ夜毎にいろ／＼な名曲をこの林中で聴いたが、  
「乗合」や「關扉」に記憶が多くあつて、この新曲にさう深い  
印象がないことを、常に悔んでゐる。

ミ、我々の聴いたうちでは松尾大夫のが最上の「釣女」であ  
らう、松尾もうまい、「釣ろよ／＼」の太郎冠者のイキがいつも  
面白い。が、私はいつも思ふのだが、松尾大夫に「おうな病」  
がある。松居の「おうな病」さいふのは、さういふのか、をん  
なさいふところを又しても、「おうな」古雅めかして語つてゐ  
る。さうあらうか、こんな狂言から脱化した軽いうき／＼し  
た調子のもに「おうな」もをかしいが「氣高きおうなを釣上  
て」ミ語る。

「關扉」にも、このおうながある。「關扉」のやうな古曲は、猥  
雑なところでないのだ。が、恐縮すべき箇所は既に「高尚病」  
の團十郎が直してあるのだからいゝとして、松尾大夫に封じた  
きものは「おうな病」である「をんな」「をなご」時に應じて  
これでいゝ。「釣女」の場合は「氣高き」さいふ形容詞があるか  
ら「思ふのは誤りだ。一曲の調子を基として考へれば「をんな」  
でいゝではないかさいひたい。誰れの加筆か知らぬが餘計な事  
だ。

「助六」は總出のこゝと思ひ、わざと醜女でもいゝ、一人舞臺を  
ミ、望んでのこの「釣り女」のつもりだつたが、書きかけたこ  
ころで與へられた紙數がつかた。何れはかう並び大名格に出來  
てゐる。(完)



# 南北二座對立時代の顔見世

堂 本 寒 星

たしか大正十五年の本誌「顔見世」號に「明治時代の顔見世」のこゝを記したが、今度はもう少し遡つて四條河原で南北二座が對立し始めた文化文政時代から明治に至る頃までの顔見世を記いて見やう。

文化文政といふに、京阪の方面に於ても一般民衆は太平の極致に心酔し、そこに何か強烈な刺戟的なものを要求してゐた時代で、上方劇壇でも怪談や仇討ものが人心に迎合され、兎も角特徴のある一時代を劃してゐたのである、そして四條河原の盛衰を見るに、元和の七つの櫓が順次廢絶し、安永天明には未だ北側に「東の芝居」、「西の芝居」、南側に「南の芝居」三つあつた櫓が、南北二つの櫓の差向ひとなり、二座對立時代となつた、北側の芝居は「東の芝居」が残つた譯で、後の北座と呼ばれた劇場である。

此の時代での劇壇の特色は芝居茶屋の殷賑で、南北兩側には

劇場を中心として十三軒の芝居茶屋と、河原にも水流を差挟んで十一軒の芝居専門の水茶屋があつた、その名稱を擧げると、半、石輪、はりまや、さかいや、扇市、かいや、中上、錦屋、角輪、升五、菱屋、松屋、島屋が芝居茶屋で、糸屋、花屋、木屋、尾張屋、萬屋、大阪屋、和泉屋、來屋、近江屋、戎屋、河内屋が水茶屋である。

これらの芝居茶屋は慶應、明治になるに、伊勢市、堺屋、輪五、都、江戸屋、柳屋、志満屋、一源、榎屋、矢倉といつたやうに變化してゐるが、何れにしても四條の芝居街に櫓を取巻いて恁ふした多數の芝居茶屋が櫛比してゐた盛觀は到底今日では見られない光景で、僅かに二つの劇場に依つて華々しく店を繁昌させてゐたのだから、當時の劇場の勢力も大したもの云はなければならぬ。

芝居茶屋の利用は顔見世に最も有効に使はれたもので、當時

の顔見世は大概霜月一日から一興行凡そ四十日間、明け六つ頃から始まつたのであるから、見物は何れも前日から観劇の準備に取かゝり、提灯の火をたよりに霜氷る曉の四條大橋の板を踏みながら、先づ最貧の芝居茶屋へ落着く、そして朝食に比すべき温かい鯛雑炊をすゝつて、草履ばきで芝居へ送られる、するに棧敷には赤毛氈が敷詰めであり、茶屋の提灯が軒から吊してあつて、舞臺には鯨蠟燭が燃えてゐるこいつた式で、見物はもう劇中の人になつて了ふのである。

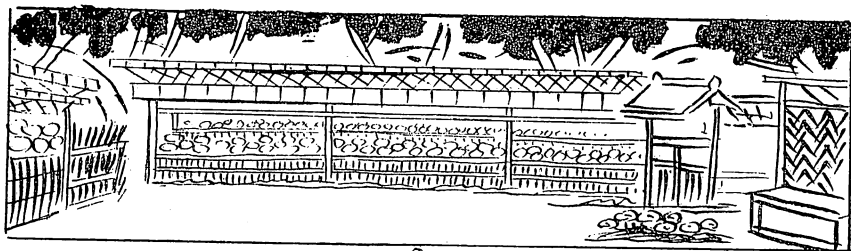
さて棧敷では京阪の慣習にして、茶屋から顔見世にはつきもの、三つ組のお重、鯛蕪の鍋が運ばれ、藝妓は白襟紋附、町方の人々も一張裏を着飾つて悠々見物するのであるから舞臺に比適すべき花やかさである。

さて舞臺であるが、顔見世の古風な式例作法は時代の推移と共に漸次廢れて了つたが、俳優の挨拶廻りを兼ねた評判振れや翁三番の舞は顔見世氣分を彌が上にもそゝつて好劇家を歡ばせたらしい。

顔見世の登場俳優の顔觸に就て云ふに、先づ化政時代に於ける四條河原へ出演の三ヶ津の俳優で主きを成してゐたものは二世嵐吉三郎、三世中村歌右衛門、七世片岡仁左衛門、二世中村大吉、二世大谷友右衛門、二世澤村田之助、五世市川團藏、淺尾工左衛門、四世嵐小六、二世澤村國太郎、坂東重太郎、五世岩井半四郎、五世松本幸四郎、三世坂東三津五郎、三世嵐三五

郎、三世坂東彦三郎、初世嵐橋三郎、三世尾上菊五郎、二世藤川友吉なきて、就中吉三郎、仁左衛門、歌右衛門は殆んぞ京都劇壇を背負つて起つた感がある、天保に入るに七世仁左衛門の養子片岡我童(八世仁左衛門)實惡の名人であつた片岡市藏、二世中村富十郎、三世菊五郎の女婿四世尾上菊五郎、先々代尾上多美藏なきが撞頭し、三世嵐璃寛、七世市川團十郎(海老藏)三世中山文七、十一世中村仲藏、二世嵐璃珥、三世中村大吉、三世小川吉太郎、淺尾富十郎、市川助壽郎、市川鍛十郎、二世實川額十郎、八世嵐三右衛門、四世三樹大五郎、その女婿三樹源之助(後の中村宗十郎)中村南枝、六世市川團藏、四世山下金作、五世市川門之助、先代中村歌六、三世嵐吉三郎、先代尾上梅幸(後に先代實川延若)なきは嘉永から慶應までに活躍した人々に見られる。

次に此の時代に好んで上演された顔見世狂言は、きんな風なものであつたかを「南の芝居」の顔見世年表で見るに、「菅原」「廿四孝」「千両職」「近江源氏」「戀女房」「先代萩」「千本櫻」「伊賀越」「八陣」「忠臣藏」「曾我」「布引籠」「加賀見山」などは未だ年代が新しいだけに昭和の今日もは變らないが「廓錦繪」「住吉物語」「奴請狀」「東鑑」「戰戀木」「遠江瀉戀賊」「品評林」「油商人」「接合北國櫻」「増補艶白賊」「八重葎浪花濱菴」「傾城飛馬始」「花筏清水棹」の如きは、もう全然封じられ、又は忘れられた狂言で、現代人から見ると珍らしいものになつてゐる。



芝居物語

(南座顔見世興行夜之部上演)

鬼一法眼三略卷 (菊畑)

村田和緒

主なる役割

鬼一法眼 市川中車  
 奴智恵内 中村福助  
 皆鶴姫 中村扇雀  
 笠原漑海 市川九團次  
 奴虎藏 澤村宗十郎

時は平相國清盛が全盛の頃——  
 軍學兵法の師範鬼一法眼の奥庭であ

る。  
 秋も酣あぢにて障子しや星根花壇ねかたんの植附うゑつけに、  
 色いろぎりぐりの菊花きくはな入り亂みだれて咲あき誇ほつ  
 てる。

其そのの傍そばに奴やつの智恵内ちゑない、葉毎はごゑに潤うるほす露つゆの風情ふぜいを一入いしほの思おもひ  
 め乍なら頻しきりに髻こむぎを抜ぬいてゐる。同おなじ奴仲間ぢゆうなか三三人さんさんぎやくつこ  
 入り来る。

髻こむぎばかり抜ぬいてゐて肝心かんじんの掃除そうじは如何いかなつた。油あぶらを取るも  
 大おほがいにせい。

追付おつつけ漑海かい様さまがお出いでなされて此この體ていを御覽ごらんなされては強つよい  
 お叱しかりを蒙かかるは知しれた事ことぢや——と寄よつて集あつて毒どく付つけく。が、  
 智恵内ちゑないは平然へいぜんとして。

入いらざる心配しんぱいは止とせ、叱しからるゝのは俺おれが不調ぶてう法ぽうぢや。漑海かい  
 様さまでもたんこぶ様さまもできうでもいゝわ、俺おれが旦那だんな云いふは鬼一きいち  
 法眼ぽうがん様さまより外ほかにはない筈はずぢや。

そう云いふ汝おまへが馬鹿ばかの骨頂こてうと申ますものぢや、漑海かい様さまはお旦那だんなの



一の弟子、殊に、跡目を取る息子が無い故に差詰姫の皆鶴様を視言して此の跡目をお取りなさるこの噂ぢや。それ故大勢して被の下、追笑の一つも云ふて、金でも貰ふが當世云ふものぢや——口さがない奴達は智恵内を嘲笑する。

嘲笑された智恵内は、却つて彼等を嘲笑し、彼等が敬める一の弟子の笠原湛海をさんくごぎ下す。それが爲め、彼等の怒りを招き一同智恵内に打つてかゝる。ミ、智恵内は彼等と同一の奴ではなかつた。腕に憶へのある智恵内、餘り荒らけずこも彼等の膽には一段さ、こたへたさ見へ顔を歪めて逃げ去る。

ミ、此時、清盛公の御前に出仕した皆鶴姫の歸館が遅い爲め其の歸りを待ち兼ねた吉岡鬼一法眼は、

病苦忘る、氣晴しミ、女小姓に介抱せられ心勇みの駒下駄に、石ふみわけて花ばたけ、見廻しく

——ほう、咲いたわく、此の花開いて後更に花なしと思へば取わけ色香も身にぞ沁む。これ、この菊は打水に、つゆを含みてぬれ咲や、斯程やさしき花の名を誰が……ミ

名付けたる主殿司御垣守二つ一つの大内山君が下には隠れなき花の笑顔に打ちきせて、名わけをされぬ京小袖、例へば花の物狂ひ、羅生門に住む鬼たり共、紐解き染る大般若御法の菊を見る時は、心利らぐ敷島や、されば法祖が七百年、姿を替へぬ若やかも、此の徳なりミ菊の露、我はよわひを延さんミ暫

らく詠めた、すめり

法眼は以前源氏普代の侍であつたが、六條判官爲義ミ左馬頭義朝親子の仲が悪く、常に弓矢の道に背いてゐた。で、彼の父は、源氏の滅亡も近い中ミ見極め、幼少の彼を母の手に預け熊野の山深く忍ばせ暮して來たのであつた。その時彼には、鬼二郎、鬼三左云ふ二人の弟があつた。で、法眼が年長じた或る日、彼を膝下に引寄せた父は——汝は兎も角、世に長らへて、源氏の成行ミ末を見届けよ、そして、若し大將の器に備はり給ふ人があれば、家傳來の虎の巻を傳へよ——ミ遺言して、爲義義朝親子の不和を憤りつ、病歿したのであつた。

が、現在の彼は、清盛公に仕へ、清盛公に心服し、主君ミ仰ぐは清盛公一人を仰でゐる。で、平家に敵對し源氏に心傾けるものは、例へ兄弟であるにもせよ搦め取らん氣持ちさへあつた其の心の裏には一入二人の弟を案し煩ふ念で一杯だつたが、智恵内が、現在血を分けた弟鬼三左清澄である事は夢にも知らなかつた。

こゝに源氏左馬頭義朝の八男牛若丸、御母常盤の懷を放れ鞍馬山東光坊の御許に忍んで人となり給ひ、十六年の春も過ぎ、葛の錦は着つれ共、いつ會稽に齧かへさん、袂もせまき下素奉公、心は天下を取りしぐ鬼一を主に田面の雁つばさ公、かけし文のならで、直ぐに申上げ度御用、虎藏龍歸りしミ切戸の外

につくばへば……

皆鶴姫のお供をして行つた牛若丸が世を忍ぶ假の姿、奴の虎藏が歸り来る。

—— 姫は如何いたした。

—— されば、姫君様には清盛公の御前をお立遊されてから、私を近う召され、是より盛重公の御許まで行かねばならぬ、父上も嗚お待兼ねの事と思ふ故先へ歸れよの仰せ、それに、清盛公の仰せには、鬼一病氣を構わす虎の巻は明日中に差出せよ、又鬼二郎、鬼三左ミ申すお尋ね者、これは殿様には御縁のあるお方故漕海を遣はし厳しく御詮儀ある思召し、直ぐに申上よこの御出上であります。

—— 何つ鬼二郎鬼三左の御詮儀にあの漕海を?

ハツミ驚く面色にて、ミむねを突かれて見へた。同じ驚きは智恵内の胸、我身の上ミ悔りしたがさあらぬ體——

成る程、それで思ひ當る事がある。彼の兄弟達は兼ねて源氏に心を寄せてゐるご聞いてゐるからそれ故の御詮儀は必定ぢやが、濟まぬは虎藏。何故なれば、いやしくも奉公する身はそれ〴〵勤める役がある。その一つでも勤まらねば不調法の吐りを受けても無理はない筈だ。殊に虎藏は姫の草履を掴むが役、さすれば、姫が何ミ申そうきも、従はねばならぬ筈ぢや。でなければ、六原の玄關、一門の御所の案内等ごつくり見覺へスハミ云ふ時、晴れの草履が掴まれまいが——

謎の如き法眼の言葉、一門の玄關達も行き得ずして歸つて虎藏に厳しく叱るその云の草こそ、怪しと思へば怪しくも思われ

た。  
—— 役目を捨て、歸りし不忠者、打てミ云つたが誤りか、サア打て、打て、打つて—— 打ちのめせ

ミ智恵内が頻りに詫言る言葉も問かばこそ、猶執拗に打擲を強ひる。如何に強ひられても、姿こそ同じ朋輩ミやつしてはゐるが、虎藏は主君、主君を打ち杖を、家來の身で持てやう筈もなく智恵内は、ただ、ウロ〴〵身を悶搔きつ、ミ泣入るばかりである。

—— おのれも主の詞に香くか。ならば二人共出て行けい。

ミ云つてゐる所へ皆鶴姫が歸る。併し、姫の訛事も彼は恕さなかつた。如何でかして館を追放しやうミ計つた。館を出すは是か? 恕すが是か? それは、法眼の心を知るもの、他には判らなかつた。

此の時荒くれ武士の笠原漕海、清盛公よりの内談ミ袴のひだも荒々しく出で來り法眼を誘ふて家に入る。後に残つた虎藏の牛若丸ミ鬼三左の智恵内

—— 鬼三左、汝も我も此の姿に身をやつして此の家に入り込んでは何の爲め、六韜三略虎の巻を傳へ受け、亡父の敵平家を滅し再び源氏の世にひふ返さん爲めではないか。鬼一が打てよ叩けミ怒つた時、何故汝は打ち据へなかつた。打たれても、踏ま

れても、此の家に足を留めてこそ、虎の巻を手に入る期もあらうに、此家を追ひ出され、立寄る事も叶はねば何日本懐を達する事が出来やう

ミ、思はず拳を握つて悲憤する。が、智恵内は如何に手段は云へ主を打つ事天を打つと同じ、それは到底出来なかつた。二人は身の不運源氏の不運を相擁して歎息した。ミ云つて湛海の密談こそ我等の身に及ぼしてゐるのだと思へば望観してゐる事も出来なかつた。で兩人は相談の結果鬼三左が蔵に忍び入り虎藏が見張る事ミ定めて盗み出す計畫を立てた。鬼三左が見張りに立つ事は萬一鬼一が出て来た折兄を打つ刃に心にもぶると思ふ智恵内の深謀からであつた。

此の時皆鶴姫はソツミ役等の傍に忍びよる。それミ氣付いた兩人、再び姫に、さあらぬ體にて託言を頼む。皆鶴も彼等を出したくはなかつた。虎藏を戀ひ慕ふ皆鶴は、娘、心の一筋に此の戀を叶ふか、命をかけての託が叶ふかの交換條件で彼に迫る

ミおほこ育ちの戀路には菊のませ垣くあからむ、泪ぞ戀の誠なり

—これはしたりお姫様、貴女はお主様私は家來、數ならぬ身をこれ程までに

數ならぬミは偽り、誠は源の牛若丸さま

—えつ

—智恵内ミても伯父の鬼三左

—これツ

目的を達する迄は、飽くまでも守らぬばならぬ二人の素狀、それを知られた上は伯父姪始めての對面に不愼には思へ共姫の命は申受けるミ、鬼三左が意氣込む。牛若丸のお爲めになるならば……ミ戀する者は犠牲に身をゆだねる——

ミ取つて引寄せ差殺さんせし所へ湛海すかさず飛んで出で娘をかばひ突つ立つたり

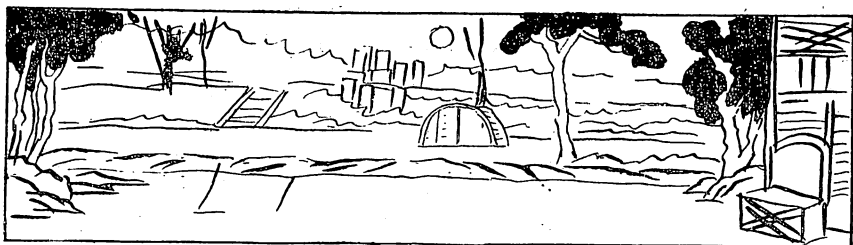
—湛海が想ひものむざく殺されてなるものか、牛若ミ鬼三左自ら名乗る上は清盛公に注進する。その褒美には姫は自分の妻

—ミ嫌がる姫を無理無體に引つ立てやうミする。

—己れツミ追つかけた牛若丸背後からサツミ斬りつける。が湛海もしれ者、牛若の刃を素易く引外し、秘術を盡して戦ふ。が、天晴武勇の太刀さばきに流石の湛海、牛若の爲めに下つミ斬り伏せらる。

ミ、鬼三左、皆鶴は殺すに及ばぬ。事態急變した上は直ちに鬼一法眼ミ面接して虎の巻を譲り受けやう、否ミ云つて打ち向へば、鞍馬山の僧正坊に習ひ受けし奥儀を盡して戦ふまで——ミ刃にかけても受けんものミ、互に勵まし勵まされ、皆鶴姫を案内に奥殿さして勇ましく、主従刃を並べて進み行く

—幕—



芝居物語

(南座顔見世興行夜之部上演)

敵討檻樓錦

(大晏寺堤の塙)

松鼻莊主人

主なる役割

春藤治郎右衛門	中村鴈治郎
加村宇田右衛門	松本幸四郎
春藤治兵衛	澤村宗十郎
春藤新七	中村扇雀
高市武右衛門	市川中車

玩辭樓十二曲の中でも屈折の當狂言です。ざつここの大晏寺堤にいたる『敵討檻樓錦』の筋を申します。備後國入江の城主の若殿が慰安のため舞子を召抱えられるこじになつて、家中の春藤助大夫にその選擇方を命ぜ

られた。上意畏しこあつて助大夫早速助太郎といふ白痴の次男を若黨の佐兵衛を連れて京都は先半町へ上つて来た。處が同家中の須藤六郎右衛門とその組下の彦坂甚六の兩人も殿の御用で京都で滞在中であつた。會、「百夜の計歌」いふ舞を見物してゐる内に深草の少將に扮した舞子でるさいふのが助大夫の眼鏡に叶ふて直ちに膽入傳八に命じて身受けの相談を整えたが、この舞子でるに豫てから執着してゐたのが須藤六郎右衛門で今てゐるが助大夫に受出されて若殿に召上げられては自分の戀がかなはぬさいふ處から、彦坂甚六を計つて白痴の助太郎を欺いて、これを奪ひ去らうとする。さつこいやらぬ助大夫が遮つたのでこれをばつさり殺して失ふ、こゝに敵が発端する譯です。春藤の屋敷では京都でそんな事があるさば知らぬから助大夫の

三男新七は隣屋敷になる敵六郎右衛門の妹お霜と契つていそ懇ろである。長男の治郎右衛門が下城して来るに佐兵衛が次男の助太郎を連れて歸つて語り出したのは旅先での異變だ。さあ大變だ。兄弟三人は敵討に出立しやうと慌てる。母親は矢庭に助太郎をぶつりし射殺した。それは妾腹の治郎右衛門と新七兄弟に義理を立て、白痴で足でまごひになつては申譯ないさあつて殺したのです。こゝまでが上巻で、下巻は郡山の松原で舞子でるを連れて逃走した六郎右衛門が傳八に出合ふて二百兩の金が出来ないならてるを親元へ連れて行くさいふて聞かないのを耳にしたが、須藤、彦坂を匿つてゐる加村宇田右衛門です。この加村がてるの身受金を引受けてその金をつくるため無銘の一刀を備前長光だと言つて、そこへ來合せた高市武右衛門に殿へ賣代を目利を頼む。武右衛門の一子庄之助が以ての外の偽物ださいふのでその言葉の息張から、遂に非人を試斬りにして是非の判断をしやうと連立つて出て来るのが大晏寺堤です。即ち願治郎の演ずる所の『大晏寺堤の場』となるのです。ではこの件を委しく申しませう。

〽急ぎ行く春藤治郎右衛門兄弟は、首尾よく殿の御暇賜はり須藤、彦坂尋ね國々廻る年月も早や二歳。

貯へには事を缺かないが、わざと非人に姿を變えて、寒風の吹き荒ぶ郡山の晏寺堤の三昧の蒲鉾小屋をつくつての住居で

す。四圍は石塔や卒塔婆新佛、それに石の地藏がござらうさいふ松の立木もまばらに物凄き夜です。春藤兄弟はこゝに早や二月あまりを過した。そして大和國のはしくまで身心を碎いて敵の在所を探し求めたが何の手がかりもない。

今日も弟新七は足を疲れさせて歸つて來た。小屋の礎を引上ける三兄の治郎右衛門が五十日さかやきにつどれの着付けで箠を被つて寝つてゐた。唯一人で咄し相手もなく松吹く風についてさく／＼眠つたのです。兄弟は枯枝を集めて焚火する。

〽髪はおさろに延び亂れ、顔は髭むし身は苦むし思ひにやつれ兄弟が、身の有やうぞ哀れなり。

兩人は火にあたりながら此所に滞留するこゝ二ヶ月今に知れない敵の在所に氣を腐らした。今日も新七は木津の方から新直家。心がけたが駄目だつた。そうこうする間にもし敵が病死したら何を目當てに本意を達するのかと思ふ。矢も盾も堪らない。

新七の氣の弱さを叱りつゝも治郎右衛門まで前途に光明は見えない。それでも今に天道の恵みでも氣を強めて、弟を泣くな泣きやるなさいさめる。それは口先で心は不便さで一杯です。ぬるい茶を啜りあつてゐる三新七が思ひ出したのは土産に買つて歸つた諸白の事である。

〽まづ御初穂は荒神様へ茶碗に酒をつがうとする。治郎右衛門は俄かに身體の痛むのを覺えた。二年此方の風邪の滞りで



す。新七が背中を擦らうといふのを断つて町へ出たら配毒散でも買つて来てくれ頼みます。兄思ひの新七は早速郡山まで行つて買つて来やうと立ちまゐる。治郎右衛門は驚いて止めた。五十町からある夜道物騒だといふのを聞かぬ氣性は強つて買ひに行く。では是を差して刀を渡し提灯まで與えます。大事を抱えた身體、前後に心をつけて怪我せぬ様も注意する。

『待て、提灯は左りぢやぞ』

治郎右衛門は提灯の火の見えなくなるまで見送つた。鐘がなる。治郎右衛門は國に残した女房や妹を思ひ出した。今日は本意を遂げるか明日は敵の首を引提げて戻るか、その便りもきたえた今日返り討にでも逢ふたもの、出た日を命日に吊ふてゐるかも知れない。不便でもあり愚痴でもある。まあ小屋へ這入つて神佛を祈らうと痛む身體を庭の中へ引ずる。

士しの心こころを志こころざし讀よみませ、士しの口くちを吉よし讀よみむ、夫それには背そむく宇田右衛門、高市武右衛門一子庄之助諸共に、大曼寺の堤傳ついでん三味みづ近く立た止どり……

向ふより提灯をさけた大勢の奴を従へて出て来たのは野袴にぶつ先羽織の加村宇田右衛門と高市武右衛門父子です。非人を捉えて新刀の試し斬をしてみやうといふつもりだ。奴に非人の様子を見させざるつてゐるに聞いて急いで行かうとする宇田右衛門を、アイヤ暫く武右衛門がこめた。寝込みを試すは安いが本意でない、引起して得心させ念佛の一遍も唱えさせて

行届いた言葉です。宇田右衛門の下知に従つて奴達は、非人の御用がある。出おろう、出ませいよ叫んだ。へいこ答えて治郎右衛門は頼冠りに本身仕込の竹杖をしかみ小脇に抱えて出た。武右衛門はそちの身體が貰ひたい、その譯は今日、宇田右衛門との論争から試さねばならぬ刃があるよ談じた。治郎右衛門は悔りして自分が腹からの非人でない事、たゞへのめり死に逢ふまでも死なうといふ心のない事を言つて助けてくれ頼んだ。

武右衛門に詫言宇田右衛門にすがり庄之助に情けを求めた。庄之助はいぢらしく思ひ近々の内に仕置者も有るよ聞くからこの非人の命を助けてやらうと言つた。それを宇田右衛門は皆まで聞かず、奴達に引立ていよ命じた。治郎右衛門もこれまでこそ奴を左にかわし右に投じた。真二つ宇田右衛門が抜きかけるのを治郎右衛門はたつた一言申上けたいとすがつた。武右衛門はすつかり同情してしきりに取りなした。治郎右衛門は遂に大切な望みのある身分であることを告げ、その望みの叶ふまで非人の命を非人に預けてくれ涙こもりに願ひ出た。武右衛門は言葉の端々で敵持ちを推察した。治郎右衛門も隠しおぼせお親の敵をねらふものと言つた。宇田右衛門は見えずいた偽を言ふ奴、またその偽に乗る武右衛門を馬鹿……いや馬鹿々々しい事だに嘲笑した。

『斯く非人まで様をかへましたれぎ、人目立つを憚り一刀はこの竹杖に……』

「治郎右衛門は寄り来る奴を一人を投げのけ一人を踏まへて  
すなりと抜いてさしつけた。」

「青江下坂二つ胴敷院親重代でござる いや、それから御覽じ  
は、敵に出逢ふ事、いつ何時か知れませぬ故、兼ねて寝及は  
合はせ置きました。よつく切れます。づんご切れます」

「武右衛門は今更に感じ入つた。お見事く、抜擗して治郎右  
衛門に刀を納めさした。かゝる御大望ある方を存せず慮外の段  
々眞平御免下されし詫びた。宇田右衛門はその狙ふ敵の生國姓  
名はさ聞いた。武右衛門は非人さんまで姿を變えて敵を狙ふ者が  
うか／＼敵の生國姓名を名乗らうか、あまりに馬鹿々々しい  
事だ、宇田右衛門に返報した。そして懐中より金子を取出して  
路用の足しにさ差出した。治郎右衛門はその親切を厚く受けて  
金子を辭退した。宇田右衛門は自分も抜擗したけに、また金子  
惜しげにうぢ／＼してゐたが武右衛門を勧めて堤傳ひに歸つて  
行つた。」

「治郎右衛門はやれ／＼と思ふに急に身體が痛み出した。弟が  
戻るまで一寝入り酒を少し飲んで小屋の内へ這いつた。寒  
念佛の坊主が鉦を鳴らして石塔の前では回向しつゝ、寒さにふ  
るえながら提灯の火を頼りにいそいで立去る。」

「月なき夜半の夫よりも後ろぐらき宇田右衛門、かくまい置き  
し須藤、彦坂二人を引具し、頼冠りに顔かくさせ……」

「火繩をふりながら忍び足して出て來ます。そして小屋に近づ

くなりぐさつと白刃を突込む。わあつと叫ぶ聲は治郎右衛門で  
す。手負ひながら親の敵須藤六郎右衛門、彦坂甚六に聞いては  
命かぎりの奮闘だ、さゝ須藤、彦坂の二人は斬つた。そこへ人  
の足音が近づく。宇田右衛門が驚いて逃げる背後から治郎右衛  
門の一念こもつた刀がひゆうと飛ぶ。

足音の主は弟の新七と次弟の治兵衛でした。小屋へ歸りつい  
て兄はさ探す姿が見えない。さてはさ四邊を探さず瀕死の體  
です。兄弟は無念泣きに泣いた。だが死者も同然だ。これでは  
さ敵の名を呼んだ。治郎右衛門はむくつき起上つた。さゝもに  
倒れてゐた須藤、彦坂の二人も氣附いた。そして逃げ出そうに  
するのを引取らえた。

「ヤア、ウヌは須藤六郎右衛門」

「彦坂甚六」

「弟拔かるな」

「ハア……」

「今こそ日頃の本望さ、さふに捻じ伏せのつかゝり、すでに止  
めさ見えければ……」

「親人の敵」

「兄弟者の仇」

「さ手負ひの治郎右衛門を兄弟が抱きのけて首尾よく敵の止め  
を差しました。」

# 歌舞伎十八番の内 助六由縁江戸櫻

永松 愿

止め木を開いて場に入る。

通り神樂の合方につれて幕が開いた。

吉原三浦屋の場——

その舞臺の絢麗さ、結構さに場内は暫し観客のどよめきが續く。實に大懸りな舞臺ではある。

清掻の彈流しで、上手下手より提灯を持つ茶屋女、さては按摩、臺屋の男、辻占屋等すべて廓にのみ觀る男女が三々伍々出て舞臺を入違つて這入る。

と上手から後見が出て来て口上を述べる。

つまり、この「助六由縁江戸櫻」が歌舞伎十八番の中でも極めて重用される狂言であること、所謂容易に上演は困難であることを披瀝するのである。さてこの口上が済むと、正

面格子内の河東節連中に向ひ

「河東節御連中様何卒御始め下されませう」と町重に言つて上手へ這る。特に河東節御

連中様と呼びかけるのは昔時より河東節連中が一般の女人でなく、皆町家の旦那衆によつて組織されたもので、一切の利害關係から離れて、この「助六」のみには助勢の意味にて多額の金子を費してまで出演したもので、現今尙さうした旦那衆によつて組織されてゐると聞く。

後見が入ると直ぐ河東の前躰きになり、東

西花道より金棒引二人出て付際にて金棒を突けば唄になり各入れ違つて揚幕に這ると直ぐ傾城八重衣が出る。あとから浮橋、胡蝶、愛染と何れも新造一通り、番新造手若い者二人

が附添ひ

河東へ國の名の豊声原や吉原に根越して植えし江戸櫻……の唄一杯に八文字を踏んで舞臺へかゝる。夫と同時に暖簾口より誰袖と梅ヶ香が新造を連れて出て舞臺端に立身に居並ぶと、清掻通り神樂の合方で外郎屋を待つほどに、揚幕から外郎屋藤吉が極りの扮装で舞臺へ来る。こゝで番新造がいつものいひ立てを外郎屋に所望する。これにて外郎屋は薬のいひ立てを見せ、又清掻通り神樂の合方で上手へ這入る。と直に傾城の渡りせりふになり、かくするうちに愛染が向ふを見て。

「アレノアノ提灯は儘に杏葉牡丹、揚卷さんであらうわいなア」とせりふの切れに唄入り渡り拍子(闇の夜)になり揚卷の出になる。純蘭目を射る如き扮装で若い者、禿、振袖新造、詰袖新造、番新、進手、等の介添にて、酒に酔ひたるをなにして、出て来て揚卷は東向に、外皆々舞臺斜向花道一杯に居並ぶ。揚卷は、  
「これはくおれきくのお揃ひなされ、此揚卷をお待受けとは、マ、難有い」と言ひ、

醉ふた理由を訊かれこれにて、揚巻は優しい管を巻く。と禿が酔のさめる薬とて袖の梅を渡す件りがあり、前の(闇の夜)の唄にて一同舞臺へ來ると清掻の合方にて上手より曾我の満江が揚巻を探し出る。と揚巻は一同をのれん口に這入らせ、これより満江が揚巻に助六の喧嘩沙汰を心配のあまり、廓へ呼びつけぬやうと頼む件がある。やがて若い者が出て揚巻に意休の來た事を報らすので、満江は尙も助六の事を頼むで去る。

舞臺は揚巻一人になり、満江を見送り涙を拭ひ、

「おいとしやお袋さんは、助六さん故子故の暗、私は又助六さん故戀路の暗、何かに附けて女子程はかないものはないわいなア」で左の手を懐ろに右に煙管を突いて眼をつぶり考へると。本釣、薄く風音、直ぐ河東節にかゝる。

河東(おちこち人の呼子鳥、否にはあらぬ逢瀬より、こゝを浮世の仲の町、よしやはせし越方)の此唄の初めに白玉の出になる。このうち

前の傾城六人、新造六人、暖簾口から出て來て後ろの床几に順に居並ぶ。

向ふ揚巻より白玉が出る。若い者が型の如く後ろから傘を差掛け、禿二人が持物よろしく、その次に意休が左手を懐ろに右手に鳩杖を伊達に軽く突き乍ら出る。後ろに男達四人それに續いて振袖新造二人、詰袖の新造一人番新造手、若い者、茶屋女房がついて出る。

一同花道に東向に居並び、河東の切れより清掻の彈流し。これにて意休を始め、男達四人の伊達の渡り臺詞があり皆々舞臺へ來てよろしく居並ぶと、八重衣が意休が揚巻に熱心で通ひ來るを知つて優しく抑捺すれば、揚巻は始めて心付きし料にて、

「ハテ仰山な、意休さんがござんすを、先刻から待つてゐたわいな」といふと、意休はすかさず、

「待つて居たとは、助六の事か」とこれより意休が助六の事を惡しざまに罵るので、揚巻はムツとして、

「意休さんでもない、煩いこと云はしやんすな。お前の目を忍んで助六さんと逢ふからは

仲の町の真中で踏まれ様が、手にかけて殺されようが、夫がこはうて間夫狂ひがなるものかいな」と屹と云ひ、

「慮外ながら揚巻でござんす、男を立る助六が深間、鬼の女房にや鬼神ぢやわいな、さあこれからは、揚巻が惡體の、マ初音」と大きく張り袖の襟に両手をかけ、肩から外し加減に斜に極る。清掻の合方になり。

「モシ意休さん、お前と助六さんを怨う並べて見る時は、此方は立派な男振、此方は意地の惡さうな、たとへて言はゞ、雪と墨、硯の海も、鳴門の海も、海と云ふ字は一つでも、深いと浅いは客と間夫、サア間夫がなければ女郎は闇、暗がりで見てもお前と助六さん取違えてなるものかいなア。オホ、わ、と身體を引いて心地好く笑ふ。意休は思入、堪へ兼ねて刀を取り、意氣込むと、揚巻は。

「お前私を切る氣でござんすか、切らしやんせ、たとひ切られても殺されても助六さんの事は思ひ切らぬ」と云ひ切るので、意休は刀を鞘に納めて、

「失せう」と凜とした調子で強く云ふ。

「行つても大事ござんせぬか」  
「タ、失しヤアがれ」と長く引く。

揚巻は禿、番新、振新、若い者の介添へを  
うけ花道のスツポンの處まで行くと、白玉の  
呼び止になり

「お前が其様に腹立しやんしては、お前が思  
ふ其人の難儀にならうも知れぬぞえ、とサア  
皆さんを差しおいて、おこがましふも呼び止  
めたは、出過ぎ者とのお叱りを受けるも知れ  
ぬ白玉は、ホンの杵の敷袴、お前に向つて口  
青い、訛りも取れぬ小雀が、小癩な者と思は  
んせうが、名前に免じて揚巻さん、どうぞ戻  
つて下さいいなア」と極る。揚巻はちよつ  
と振り返つて、

「可愛い男の所へ行くは嬉しいが、仲の好い  
お前の顔が潰されもさしやんすまい」と合方  
で揚巻は舞臺へ返つて来る、そして意休を見  
て、

「意休さん、モウお前には逢はぬぞえ」と揚  
巻先きに續いて白玉、二人に附いて来た者一  
同暖簾口に入る。外の者は皆舞臺に残る。と  
向ふ揚巻の内、尺八の音がかすかに聞える。

「アレ虚無僧が来やんしたわいなア」と八重  
衣が向ふを見ると愛染が、

「アリや虚無僧ぢやない地廻りの衆ぢやわい  
なア」皆々

「どれくぼんにナ」  
で河東節のかゝりになる。

河東へ思ひ出見世やすがゞきの音締の撥に  
招かれて、夫といはねど顔世鳥、問夫の名  
とりの草の花。  
の合の手で揚巻より助六が出る。右手に傘  
の握りを持ち、左手に轆轤を軽く持ち半ツボ  
メにして頭迄冠り、

河東へおもひそめたる五所紋日待日のよす  
がさへ子供が便り待合の、辻占茶屋にぬれ  
てゐる。

河東へ雨のみのわのさへかへる  
でいろく本極りの型があつて、體は稍舞  
臺向、首は東棧敷の末を見上げた形で極ると  
舞臺の並び傾城が  
「助六さん、其鉢巻はえ」と問ふ  
「此鉢巻の御ふしんか……」と助六がゆつ  
り張つて言ひ

河東へ此の鉢巻は過ぎし頃、ゆかりの筋の  
紫の君がゆるしの色見えてうつり變らで  
常盤木の、松のはけ先すきびたひ、堤八丁  
風誘ふ、目あとの柳花の雪、傘につもりし  
山合は、富士と筑波をかざし草、草は音せ  
ぬ、ぬり鼻緒、一つ印籠一つ前、せくなせ  
きやるなサヨエ、浮世は十車サヨエ、廻る  
日並の約束は籬へ立ちて音づれも、果は口  
説がありふれた手管におちて陸言となりふ  
りゆかし、君ゆかし。

で極りの型あつて、  
「君なら、君なら」と少し張つていひ

河東へしんぞ命を揚巻の、これ助六が前わ  
たり、風情なりける次第なり。

の段切で大きい見得で極る。茲の大見得で  
河東が切れると並び傾城皆々  
「ヤンヤ〜」とほめ詞、續いて愛染が  
「助六さん待つて居たわいなア」といへば助  
六は傘をツボメて後見に渡し傾城の方を見て  
「どうでんす〜、いつ見ても美しいお顔ぞ  
ろひ、なんなら一番、割込みませうかな、冷  
ものでエす、御免なせえ〜」と清極になり



助六床几に眞向にかけると、傾城新造皆々立つて、助六を取巻くやうに吸付煙草を出す。

助六その内の一本抜き取つて呑みながら

「この様々御馳走に預つては、しんぞ、火の用心が悪ふござんせう」と軽く言へば、意休が一寸横目に見て

「君達の吸付真、一ぶく」と所望すると、傾城達は、

「お安い事ぢやが、きせるがムんせぬ、このきせるには主がムんすわいなア」

「して其ぬしは誰だ」と詰寄る、助六は意休を一す見て

「わしでござんす。何ときついものか、大門へぬつと面を出すと、仲の町の兩側から、馴染の女郎の吸付真で、ナ、煙管の雨がふるやうだ。(張つて延す)なんぼ大盡だのと味噌をあげ、大きな面をしても(意休へかけて思入)かういふ事は金づくぢやあ出来ねえ、誰だか知らねえが、煙管が入用なら一本貸して進ぜやう」とそろ／＼喧嘩の下地を賣りにかゝる。煙管を左足の親指の股に挟み意休の方へ眞直に延し

「どうでんすな、どうでんすな」と大きく一杯に言ひ、意休はきげすむやうに

「ウハ、ハ、ハ」と大笑して

「ヤ見かけは立派な男だが、可愛いやこいつてんぼうだそうな、足のよく利く鉄屋の男かこんによく屋の手間取りか、總じて男達といふものは、第一正直を守り、不義をせず、無理屈を云はず、意氣地によりて心を磨くを誠

の男達といふ、理非を辨へず慮外を働く奴を氣負といふ、兎角跡に絶へぬが地廻りのぶら／＼耳の端の蚊も同然、手のひらへのせて、シタが虫けら同然、馬の耳に風、儘よ、蚊やうに伽羅でも焚かうか」と云ひながら香爐へ伽羅を焚く、助六は意休のせりふの切れで直

に  
「變道常ならず、敵に依りて變化なすとは此三略の詞、相手によりてあしれえやうが違ふ來つて是非をとく人は是非の人、大きな面をする奴は足であしれえ無禮どがめをするやつは下駄でぶつ、ぶたれてぎやしやばると引つこ抜いてたゞ切る習えも傳授も外にやあねえ、引つこ抜いてから竹割にぶつ放すが男

達の極意だ、誰だと思ふエ。つがもねえ」と居並ぶ傾城に、意休の棚下しをする。

此時、のれん口よりくわんべら門兵衛が湯

上衣の扮りてやりてと口争ひしながら舞臺へ來て居並ぶ傾城に憎まれ口を叩く

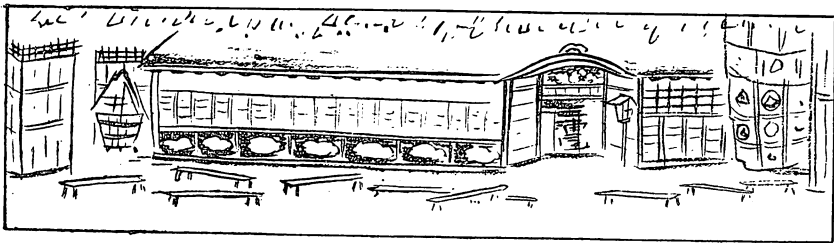
と、花道より福山左肩にけんどん箱をかつ

ぎ、舞臺へ來て門兵衛へ棒の先を當てたので福山が詫げるのを門兵衛は諷かす

「何だあうぬあ、人にけんどん箱をぶつつけておいて……變なそばかす野郎のたれ味噌野郎のだしがら野郎め、うぬ、おれが目の玉へ

還入らねえか」と棒を突放して尙も意氣まき傾城等が口添へも訊入れないので、とど福山も了簡しかね、舞臺の眞中に尻を捲つて胡座をかき

「廊を通つた福山の、のれんにかゝわる事だから、けんどん箱の角だつて、いはにやあならねえ喧嘩好き、出前も早えが氣も早え、かつきが自慢の延びねえ内水道の水で洗ひ上げた肝の太打細打の、手際をこゝで見せてやらあ」と門兵衛の手を逆捻ぢ上げる。助六が中に入り口を利くが尙も門兵衛は猛り



立ち、助六に喰つてかゝるので、助六も業を煮やし、福山の持つこせうを振りかけ、門兵衛がくさみをするを尙もせいろうのうどんをぶつかけると、門兵衛は「切られた〜」と大仰に言ふ。福山は「ごまあ見やがれ」と上手に入る。とのれん口より、朝顔千平、門兵衛の着物と脇差を抱へて出て、門兵衛より事の次第を聞き、門兵衛が「ソレ、やつつける」と下手へ合圖をすれば若い者大ぜい三尺棒を持つて助六に打つてかゝらうとする。門兵衛と千平はこの内にのれん口に這入る。助六は若い者へ向つて、

「その棒の先がおれの體に當つてみる、五丁町へ死人の山あきづくぞ」と言ふので若い者は「イヨウ」と尻込みをする。こゝへ又千平が出て來て

「ヤイニ才野郎奴、三才野郎め、イヤサ四才らしい野郎だな」とせりふの切れで首を下からシャクツて助六を見、

「およそおらが親分、門兵衛どのに、刃向ふやつは覺へがねえ、夫に親分のあたまへよくもうどんをぶつかけたな」とこれより己が經歷を大仰に述べ立てる。そして助六の胸ぐらをとりにかゝるを助六は上手に投げ

「アイタ」と叫ぶので門兵衛も出て來て千平をいたわりながら如何したと訊く、千平は負けおしみを言ふ。門兵衛は脇差の鉤元を持つて、

「重ね〜の曲手まり、一體うぬあなんと云ふ、野郎だエ、イヤサ何んといふ野郎だえ」と大きく云ふ。

助六は兩人を流し目で見、肩で軽く笑つて

「ナ、いかさまなあ——此五丁町へ、脛をふん込む野郎めら、おれが名を聞いておけ、先づ第一おこりがおちる。まだいゝ事がある。大門をずつとくどくるとき、おれが名を手のひらへ三遍けえてなめる。一生女郎にふられるといふ事がねえ、見かけは小さな野郎だが肝が大きい、遠くは八王寺の炭焼ばいたんの齒つけぢぢい、近くは山谷の古や、そして、梅干ばぢあに至る迄、茶のみ咄しの喧嘩沙汰、男達の無盡の掛捨て、つひに引けをとつた事のねえ男だ、江戸紫の鉢巻に髪はなまじめ、ソレや、はげ先のえゝだからのぞいて見る、安房上總が浮繪の襟に見えるわ、相手がふれば龍にち、金龍山の容殿から、目黒不動の尊像まで御存知の大江戸、八百八町にかくれのねえ、杏葉牡丹の紋付も櫻に匂ふ仲の町、花川戸の助六とも亦揚巻の助六ともいふ若え者、間近くよつて面像拜み」と右足をトんと踏み出すとツケを打つて門兵衛、千平は、ドーと尻持

をツク。助六は右手を開いて腮の下より「カツカ……」といひ乍ら頭を上げ其手を返して握り腮の下へ腕を張つて構え、左手は右の二の腕に受けて、

「奉れエ」とツケを打たせて大見得、門兵衛、千平、若い者一同「イヨウ」と氣を吞まれる。助六は、

「爰などぶ板野郎め(門兵衛に)たれ味野郎(千平に)だしがら野郎奴(門兵衛に)引つ込みやあがれ」と強く言ふ。門兵衛が「ソレやつてしまへ」で通り神樂、追ひ廻しの合方になり、門兵衛、千平刀を抜き斬つてかゝるをよろしくあしらつて、二人の刀をヂツと鈍元より見改める。とど二人は折り重つて倒れるので、傾城どもは、

「助六さんの大當り、ヤンヤ〜」と咄めそやす、若い者一同去る。助六は拔身を投げ捨て意休を見、

「ヤツトコ、トツチャア、ウントコネエ」と大きく極り、  
「そこな撫付どの、こんたの子分はみんなアノ通りだ、こんた了管がなるめえ、切らつせ

え、どうだな、〜」

意休が黙つてゐるので、  
「なぜものをいはねえ、啞か、つんぼか」と床几を意休の傍まで運び、すりよつて、

「抜きやれき、抜きやれき」と左足を下駄履きの儘上げて意休の脇差の柄にのせて二三度身をゆする。意休は猶無言――

「いけ張り合のねえ野郎だ、――可愛やこいつあ死んださうな、ム、いゝわ、おれが引導を渡してやらう。」

と、下駄をぬぎ、意休の頭へのせ、拍手を打つて、  
「如是畜生發菩提心、頓生菩提、南無阿彌陀佛」と拜み「ヨウ〜乞食の闍魔様め」

意休は助六のせりふの切れで、靜かに頭の下駄をとつて、「ブツ」と驚き投げ捨て、刀架の刀をとり、抜きかける、助六はすつと立つて、

「コリヤ面白くなつて來たわへ、ぬげ、ぬげぬけ〜、ぬかねえか」と大きく言つてツケを打たせ大見得をする。

意休はム、と意氣込んで三四寸ぬきかける

が、大きく氣づきそのまゝ收めて、

「ぬくまい――鶏をさくに、なんぞ牛の刀を用ひんや、意休が相手になるやつでない」と空うそぶく。助六は立身の儘、ツカ〜と脇息をとつて前へおき、抜打に眞二ツ。

「一寸しても此位えのものだ」と刀を鞘に收める。と意休、

「ソレぶちのめせ」で立廻りの合方、意休、門兵衛、千平、八重衣、浮屠、傾城、新造等一同のれん口へ這入る。前の若い者大ぜい出て助六に打つてかゝるを、尺八をぬきとり花道へ追込む。

と、下手より白酒屋新兵衛實は、助六の兄十郎祐成、極りの扮りに出て、若い者につて花道スツポンの處まで行き舞臺に向いて俯伏になる。

「口程にもねえやつらだなあ」と助六が肌を入れ、尺八を腰にさし、下駄を履いて、

「ドレ、揚卷の蒲團の上で一杯やらうか」と上手へ行きかける」と新兵衛が呼びかけ、呼びとめ、やがて、新兵衛はしみ〜と、

「モ、そなたはなア、どう心得て居やるのち

や、父上の敵が討ちたさに、早月下旬を待つてはないか、夫に此程より毎日此所へ入込み喧嘩沙汰、母者人はそなたを案じ、コレ祐成ナゼ時致に意見をせぬ……とこれより新兵衛が助六にいろく意見し、とど兄弟の縁を切るまで云ふので、助六もその喧嘩は親達への孝行の爲、喧嘩を賣つて相手に刀を抜かせ友切丸の詮議をしてゐるのでございませと事をわけて述べるので新兵衛も今は却而自分の意見が恥しくなり、こゝに兄弟揃つて刀詮議の爲に喧嘩を賣る事にする。助六について新兵衛が喧嘩の仕掛を稽古する件があり、助六が上手を見て、

「兄者人御覽じませ、とそういふ内、風吹鳥が来るわ〜」で唄入り通り神樂（ハチゴが前がみ）の合方になり、上手より國侍が奴を供に出ると、助六イキナリ侍の刀を引抜きデツと見て投げ出す、奴がそれを拾つて、侍に渡し鞘に収めて構わず行きかけると、助六上手向に兩足を踏んばり、

「股アくだれ」とやる。國侍無言で四つん這になつて助六の股をくだり、行きかけると

新兵衛が同じく、

「股をくだれ」とふるへながら云ふ。とど、國侍は新兵衛の股もくだり、奴も怒りながらくだり、向ふへ這入る。

夜櫻唄入り當り鉦の合方で通人里鴨、微酔ひにて出て来て、やゝ厭味なせりふがある。こゝで助六と新兵衛は又、通人に股をくだらせる。いろく通人の洒落せりふがあつて、流行唄の當て込みをいつて通人は向ふへ這入る。兩人は見送つて、

「變な野郎でござりまする」といふ時、のれんの奥にて揚卷が、

「おあぶのうござんすわいなア」とハ風かほる、の合方になり、のれん口より滿江編笠を冠り、後より揚卷附添ひ、出て来る、助六は稍嫉妬の思入れにて滿江に難題を吹掛ける。

やがて母と知つて、恠り、滿江が紙衣を出しての意見がある、兄弟がいる〜事の言譯をするので滿江も合點し、尙も揚卷によろしく思入れして向ふへ這入る。新兵衛もそれに續いて、這入る。あとに揚卷と助六は顔見合せじつとなる。

と、のれんの奥で意休が揚卷を呼ぶので、助六は屹となつて揚卷の襦袢の裾に蹲踞むで居ると禿をつれて意休が出る。そして揚卷をなびかせやうとするが揚卷は訊かないので意休は助六の事を悪しざまに云ふ。やがて了簡しかねた助六が裾を飛び出すので揚卷が、

「コレ必ず紙衣を忘れさんすなえ」と助六を座らせる、意休が、

「揚卷といふ土傾城の裾へ、助六といふ溝鼠が蹲踞んで居るといふ事は、意休が鬆松明で睨んで置いた。助六、わりや何故盗み喰ひする。其様な魂性を大望成就するものか、コリヤ時致の腰拔め」といふので助六は向き直り「ヤレ待て意休、某が本名を知るといひ、此時致が何で腰拔だ」

「サ、父所泰が無念の最後、其仇を報はん心もなく傾城に本心亂せしうつけ者——」と持つたる扇で助六を打つ、助六は其手を取つて

「意休わりやアあやかり者だナア、吾々兄弟十八年附狙へど、今において敵も討たれず、夫に引きかへ助六は、其方が爲には戀の敵、其敵を目前に、扇の筈、サア打つといふ字が

浦山しい、あやかりたい、我に教訓の扇と云ひ、母の紙衣に手向ひならぬ此時致、打て、たゞけ、打つて腹だに癒るならばいくらも打てえよ」と吃と云つてポン／＼と兩手を膝に突いて、

「跽の意休」

と身體を反して少し首を垂れる。意休はら

なづき前の香爐を取つて置据え、

「コリヤ時致、譬へて言はゞ此香爐臺、此三足は曾我兄弟と、三人心一致して、まづ此如く、力を合はせるものならば、祈經は思か、

伯父伊東の敵たる、頼朝殿も討たれるぞ、其方等が頼朝殿を恨む所存も有るなれば、年老つたれど此意休が、力となつて、サア得きせ

まいものでもない此香爐の如く、兄弟心合體なさは、百斤の鼎を置くと倒れず崩れず、

まつた兄弟、離れぬ／＼になる時は、まづ此如く」と太刀を抜き香爐を眞二つに切る、助六

はじつと意休の拔身を見て、

「こりやコレ正しく」と意氣込むので、意休は素早く刀を鞘に收める。揚卷は襦袢で助六

を圍ふ。

意休は太刀を肩一杯に上げて見ぬ、それより唄になり唄一杯に悠々と暖簾口へ入る。

揚卷は助六の身體を見て、

「助六さん、紙衣が破れたわいな」

「ナニ紙衣が破れた、オツ、此紙衣を破るま

いと、じつと堪へて居たが、モウ勘忍がならぬわえ」と立上るを揚卷は、

「モシ短氣を出すまいぞえ」と押へる。

「コリヤ揚卷、今意休が抜いたる一腰こそ、

豫て尋ねる」

「友切丸かえ」

「コレ」と押へて兩人は四邊を見込み、助六が何やら揚卷に耳打する。

「そんならお前は」

「今宵意休が歸りを待受け」

「早ぶござんせ」

「オウ」でバタ／＼にて花道附際へ来て、

「然うだ」と右の足を踏出すを木の頭左を折

つて夫へ掛り、兩手へ後ろへ廻して帯へかけ

稍頰を上げて吃と見得、兩手で裾を持つて大

きく足を踏んで向ふへ入る。揚卷は後向にな

つて暖簾口を氣遣ひ、助六の後を見送る形、

木に付曲撥の合方で幕になる。あと通り神樂でツナグ

やがて清掻き早めの合方で幕が開く。

舞臺は總て前の通りだが、前よりグツと暗

くして、暖簾口の處へ木地の大戸が下りて居

る。下手の用水桶は前幕の時より、稍大格子

の角から前へ出してある。

嵩の者の見廻りが上下から出て入れ違つて

這入ると、風音でバタ／＼になり向ふから助

六が拔身をさげて出て来て、用水桶の前あた

りで吃と見得、それより大格子の間より内を

窺ひ、用水桶の後ろへかくれる。「更けて」の

合方に風音をあしらひ入口より千平先に後か

ら意休が出る。次に若い者一人、振袖新造三

人が隨ふ。意休は若い者や、新造の世辭を開

き流して退け、舞臺は意休、千平兩人になる

千平が右手に提灯を下げて、先に立ち、下手

へ行きかけると、用水桶の後ろから助六が突

然出て、提灯を切落す、助六は刀を正眼に附

けて意休と向合ひ、ツケを大きく打たす、こ

れをキツカケに八千代獅子の合方になる。「汝の一腰こそ豫て尋ねる友切丸、夫を所持

なす汝こそ、本名なくてかなはぬ、姓名明かして尋常に友切丸を……」と云ふを意味が、  
「最前情けを持つて教訓せし意休に双向ふ人外め、蹴て汝等兄弟をも我味方となし、頼朝を一刀刃恨まんと、義経が奉納の友切丸を盗み取、本望遂げんと思ひ、露の意休とは假の名、眞は頼朝に恨みを合む、伊賀の平内左衛門、長盛とはおれが事だ」と此の臺詞のうち依々下駄をぬぎ、羽織をぬぎ、着物をぬぐと白の四天になる。

「千平ぬかるな」と、これにて八千代獅子、竹笛入の合方に風音をあしらひ千平が助六に斬つてかゝりいろ／＼立廻りの末、とゞ千平は助六に斬られる。あと、意休との立廻り、本極りの殺陣があつて助六は意休を殺し、助六も手疵を負つたが首尾よく友切丸を奪ひ取りすかしみると、揚幕のうちで「人殺しだ」と多勢の聲がする。やがて兩花道から蕪の者や臺屋の若い者等が總出で出て来る。

助六はかくれる心算で用水桶の中へドブんと入ると水がザツと溢れる。

多勢が助六をなほも探しながら上手下手へ

這入つたあと、助六は用水より出んとすると又も向ふで三ツ太鼓の音がして、上下で大勢の聲がする。で見つけられまいとして再び桶を冠つて沈む、やがて静かになつて助六は用水桶より飛下りて氣を失ふ。上下から以前の大勢が棒や藁口を持つて出て、ワイ／＼騒ぐ時、揚巻が出て来て裃袴の裾を助六の身體にかけて、大勢を押へる。

「お前方、其棒の端がちつとでも身體へ障るが最後、此五丁町は黒闇ぢやぞえ」と兩手を裃袴の襟へかけたまゝ極り、

「サア是からは私が相手。此揚巻が相手ぢや」と調子を一段張つて云ふので、大勢はひるみ各捨臺詞にて花道と、上下へバラ／＼になつて入る。

揚巻は助六をいたわりながら、

「助六さん、心が附きましたか」とこれより友切丸が手に入つた事も助六が語るのので揚巻も喜び、

「此上は片時も早く立退かん」と助六が立上るのを、

「モシ、此廓は八方取巻いて居る故に遁る路

はないわいなア」と揚巻が涙ながらに言ふ。

「ナニ遁る路がないとな、チエー残念——」と助六は無念のこなし、不圖後ろを見て、かけ放しになつて居る竹梯子に心附き、

「幸ひの此梯子、家根傳ひに」と言へば揚巻も、

「そんなら私は西川岸の方へ廻つて居るぞえ田市の方へ下りて下さんせ」と言ふ。

助六は梯子に上つて、左手を後ろへ廻して梯子の横木へかけ、左足を曲げて横木の四ツ目、右足は三ツ目へ伸して身體は正面を向く

「そんなら揚巻」

「助六さん」

「オー」

で兩人顔を見合せるが木の頭、助六は右の刀を返して下手へ斜に突き出し揚巻は下に片膝を立て強く引締る意であんこ帯の兩端へ兩手をかけ、西向斜めになつて双方あざやかに極る。柵に付新内の前彈き、舞臺は急に明るくなつて、三ツ太鼓入風の音にて幕が閉まる。

——あとの切大津繪の開くまで外氣に當るべく夜の四條通へ出てみた。





# 理想の人「助六」観

島 華 水

極端な寫實劇(近代劇、印象派)が漸く飽かれて突飛な理想劇(表現派、怪奇派)が歡迎される時代が來た。藝術の本意は如實に人生の一片を描寫して教導訓誨を施すのでは無く、演劇の目的は人生よりの脱離を促して遊戯三昧の裡に大道を悟らしむるのだま云ふ理論が大分勢力を得るやうになつた。それは實際に於て劇は獨立した一個の藝術であつて文學の附庸でも無ければ勿論歴史の侍妾でも無いからである。

然しいくら歴史を超越すべきにしても劇は何様しても作家の個性を離れることは出来ないのみか、上演して觀客の批判を求むるからには決して時代の精神を輕視することは出來無い、例へば近松の「上代もの」にしても其の骨髓とする邊には作家の時代元祿享保の人情世態が必ず自ら現はれて來る。假名手本で判官官淺きたくみの塩谷殿ミ暗々裡に示したのも其の一例も見る

られやう、乃て歌舞伎十八番の隨二「助六」の劇はさうかま云ふ三矢張り時代の反映を示して居る様だ。

京の萬屋助六は半太夫の道行にも見るやうに、遊君の情にほだされ兩親に背きて紙子一重、終にさらし繩手に心中する感傷的な柔弱な商家の遊治郎に過ぎないが、花川戸の助六なる三剛毅活潑弱きを扶けて強きを挫く堂々たる金看板の達家である、而も寛永慶安度の町奴に見る鉢鬘丹前の荒事師と違つて「松のはげさきすき額」の大通氣分が目立つて來た。要するに徳川末期の時代精神が遊戯的所作の内に混和して相當に現はれて居るのである。

なるほき劇と時代との關係は此の如く到底離れ難いものではあるが、さりさて時代を寫すのみが演劇の本領であるか云ふに必ずしも左様には限ら無い。舞臺に現はる、風俗、必ずしも當

時の特色を斷ずる譯にはいかぬ、之に反して寧ろ現代より懸け離れ、實現し得ないで而も甚しく時人に渴望せられた世態の類が主人公の性格に移された場合が多い(之を逆言すれば劇の主人公としての威嚴品位は現實的な爲よりも寧ろ理想的である爲に異つて行く場合が多いのである)即ち時代精神が醇化され、それが具體的に舞臺に現はれる事が比較的に多いのである。然し此の如く舞臺面は時代の現世相に異なるにしても其實は當時の好尚なり理想なりを暗示して居るから、矢張り時代精神の真相は劇の舞臺に認め得る譯なる。

洋の東西何れの國でも略同一であつたが封建の基礎が動き始めぬ内に、民衆の權力が發達した、又それが傳統の勢で依然として壓迫せられた爲に、機會を得て其の鬱憤を洩らさうとした此の火山の爆發の最も華やかに輝いたのが即ち「助六」の狂言であるのだ。

民主的の氣象が愈よ發達すれば因襲的傳統は自ら崩潰する道理で之に隨つて娯樂や藝術も宮廷や社寺を離れて俗衆の手に移り、又寫實味の著しい淨曲が理想を逐ふ論曲よりも悦ばれ茲に貴族社會の能樂に對して庶民階級の演劇が發達する。又演劇の内於に於ても「世話物」が一度現はれた以上は現代の生活に關係の薄い「時代物」は終に遺棄せらるべき運命に逢着する。

現に二十世紀の初頭までは歐米の劇壇に於ても寫實の主義が風靡した程で、回顧すれば我邦でも團州の有名な「活歴」論が、當

時流行した歐化主義の風潮に乗じて一時は著しく稱揚され、引續いて壯士劇の横行時代を見たのであつた。然し純粹な寫實、云はゞ理想を含まない惡寫實は、其の内容が如何にも空疎である爲に到底人心を慰安する事が出来ず、終に一朝にして滅んで仕舞つて、其反動さも見らるべきか夢幻的な理想劇が其後劇界に復活せられる事になつて然も頗る原始的な即ち時代を無視した「時代もの」が二十世紀の今日却て人氣を博して來た、此の春の「誓」が、異様な荒事の扮装に道頓堀の見物をさながら隣若たらしめたのを見るに今度師走の「助六」は江戸紫の録卷に又お庫前の大通ぶりに、顔見世の呼物となること疑あるまい。

何にしろ「人世の記録」にして觀察するに、此の助六の狂言なご錯誤に富んだものは少い。人物も亦葛藤も單に實の詮議云ふ平凡な筋を逐ふのみで、ハムレットの復讐以上遙かに悠々々々停頓する計り、人生哲學の一片を含むでも無く、只だ無邪氣で花やかな遊戯氣分が舞臺に横溢し譯もなく見物を魅し終るのである。誠に舞踊か演劇かを辨別に苦まじめるものであるが又一面から見るに極めて大膽な理想劇であるのだ。

一體の藝術に在つても寫實派が廢れて理想派の流行する時代は率ね世路辛酸の際に多い。他力本願の宗派が國歩艱難の時に多く起るのミ丁度同じ原因から、現實の生活に一縷の慰安を見出すことが出来ないミ、世相を超越した藝術に因つて畫かれた理想の相好を見て渴望を醫するの外は無い。それと同じ關係で

思想も行動の自由が全く束縛せられた時代には寧ろ理性を棄て去つた突飛な理想劇が出現するのである。

恰も幕府の運命が衰へかゝる頃には財政が先づ逼迫して綱紀も漸く弛み、而も武門の徒は困窮に依つて自我を押し通す有様だつた。庶民階級の富力實權は其の間に已に増大したに拘はらず尙も抑壓を恐ばねばならなかつた。随つて堪え難き不平不満を慰安する方法を何處にか求めねばならなかつたが、幸にも其の安全瓣を劇場に發見したのである。當時の劇場は所謂一個の別天地であつて、事實を無視し理性を超越し、時代錯誤を恣にして却つて責を免がるゝ口實を得た程だから甚だ適當な機關だったのである。此の如くにして、現代の葛藤を描寫する「世話物」よりも荒唐無稽な夢幻劇の方が拔苦與樂の徳によつて遙に俗衆を悦ばすに至つた。

劇場が一個の別天地ならば遊廓も亦た天下晴れての別世界である。浮れくるわの大門を過ぐれば貧富貴賤も一味平等、如何な権門富豪でも野暮天ミ蔑まれながら一言の返答も出来ない。されば二重に現實世界を超越した音原三浦屋の店先は積年の不平を抑へて居る關東町人が、思ふ存分に氣焔を揚げる好個隨一の舞臺であるのだ。此の一幕が満都の人氣を惹いて今日にすら及んだ理由は要するに時代の理想を反映して十二分の慰安を當時の民衆に與へたからである。

かくて、助六は何時か花川戸の住人になつて、江戸ッ子の「先

祖」になり、爾來開演を重ねる毎に愈よ誇張せられて愈々現實より離れ、其の性格は半神半人云はん計に理想化されて仕舞ひ、終には會我五郎時致を襲名するの勢もなつた。助六の性格變遷、是れ即ち時代精神の推移を暗示するのであるから、此の方面の精密な考察はアーサー物語の時代的研究に當らう面白結果を齎すに相違無いと思はれる。

あふむ石

### 伽羅先代萩 (床下の場)

荒獅子男之助

松本幸四郎

男之助

アラ怪しやな。五十四郡に人も知る陸奥譜代大忠臣荒獅子男之助輝當が佞人ばらのさんげんによつて君の御目通りをさふざけられ御寢所の床下に殿衛なすもしらすして伺ひよつたるさぶ鼠め、うぬも只の鼠ちやアあるめへ、おほへの力瘤と共にきたへし此鐵扇、くらわぬ内にその一卷、きりきりわたしてなくなれ、エ、。



## 箱根越への「助六」

— 江戸子と京の人の愚問愚答 —

高 原 慶 三

京の人……幸四郎はんが「助六」をおやりやすやおへんか。

江戸子……へえ？江戸の花、男伊達の總本山隨一の「助六」を箱根を越えさしちや先祖の「助六」に相すむめい。

京の人……そない威らそうなご云はんごおきやへ、助六はんの御先祖は京の「揚巻助六心中」の萬屋助六はんごすえ、都一中が江戸へ下りやはつて「助六心中」の淨瑠璃を、二代目の柏庭團十郎がお聞きやしたごを、お知てるやすか。

江戸子……へん、上方に萬屋助六なんてニヤケ男があつたかきうか俺ア知らねいが、お江戸の「助六」は承應年中に花川戸に助六といふ男伊達かゐたごもいひ、大捌助八さか市兵衛さか正銘まがひなし江戸子がゐたごいふごを聞いてらア。

京の人……まアそない喧嘩腰にならんかて、話は分てゐますえ何ちしても助六の御先祖は上方生れて、柏庭の時に江戸へ養子に行きやはつて隨市川の荒事さやつしの總元縮のやうな顔をおしごいはりますのえ。

江戸子……江戸子は氣が短けいからクヅノした系圖調べなんか面倒くせいや、黒羽二重紅絹裏の小袖、下は淺黄無垢の二つ前、綾織の帶、紫縮緬の鉢巻、後さしの尺八、くり下駄二つ印籠かうした江戸流行の粹の着物を着せてやつて、藏前の旦那衆の河東節で踊らせたごもくの初めは何ごいつても柏庭から初まつたごさ、「助六」を磨き上げたのはまつたく江戸の水さ、鴨川の水ではかうもスツキリいたしませんよビ

ビ……

京の人……「助六」いふたら、河東節が本家のやうになつてゐますが、長唄にも常磐津にも一中節にも「助六」ちうもんがおすえな……

江戸子……「助六」いつたら直ぐに河東節助六由縁江戸櫻「ミ來なくちや江戸子はおさまらねい。今の菊五郎が清元でやつたこどもあつたが、何とつてもやつぱり御廉内。河東節のツツン、テンレンレンの前弾が聴く聞こえて、金棒の音がミだへる。舞臺一體が靜かに水をうつたやうな氣分になつてゐる時に「春かすみ立てるや三浦美吉野の……」ミ來なくつちや江戸子の胸はおさまるめいぜ。

京の人……「助六」の前弾で餘程やかましいものミ見えますな。

江戸子……そうさ、こんな芝居に理屈も筋もありやしない、要するに音楽第一といふ芝居さ、河東の前弾の間の氣持だけで俺アまつたく涙がこぼれるほごうれしくなつちまふぜ。

京の人……こんさもやつぱり河東節の連中がお越しやすんさすか？

江戸子……そりやくるにきまつてるさ、いやしくも歌舞伎十八番の「助六」で賣出す以上は、河東でなくつちや先祖の柏庭に濟むめいぜ、東京でない十寸見會の丸に三つ引（？）の紋附を着た連中が廊下をうろついて、天下の通人を一手販賣するやうな顔をして感張るさころさ。

京の人……吉原からの積物も今度くるのんさつしやらうか？

江戸子……そりやさうか知らねいが、吉原の積物が箱根越しに京へ来るなんて年代記物さ。一層飛行機で運んでくるのも現代のさいふものぢやねいかな。

京の人……そないハイカラになつてしまふたら『鼻の穴へ屋形船を蹴込むぞ』が『鼻の穴へモーターボートを蹴込むぞ』ミ云ひ換えんミ現代式やおへんへな。

江戸子……それこそ『そりやまた何のこつたい』さ、アハ……京の人……「助六」をほんまにやつたら二時間もかゝるさいふこ

ささすが、そない長い芝居さすか

江戸子……長いさも長いさも、まづ最初に口上、次に金棒曳、河東節があつて、揚巻の出、滿江の最初の出、意休の出、それから助六の前渡りがあつて、意休のかけ合、かんべら門兵衛のかけ合、白配賣の出、股くりり滿江の意見から紙衣のくだり、次ぎは意休の詰合で、近頃はだてい幕さなるんだが、その間に福山のかつぎや、外郎賣の出もあるさ。股くりりて思ひ出すのは死んだ甞太郎の通人のうまかつたこささね。甞太郎以後に甞太郎なし、「助六」一幕を通人でさらつて行った甞太郎て不思議な名人の部類に入る奴さ。

京の人……こんさは誰が通人をやりはりますのんえ。

江戸子……今のさころ、一寸想像がつかねい、無論大阪側の役者がやつては打毀し、東京側では誰がやるんだらうか？

京の人……それから「水入り」三いふこがおすえな。

江戸子……そうさ、「水入り」がなくなつちや「助六」の魂は漢抜

けさ。紫の鉢巻に白無垢の羽二重を素肌に着て、五斗樽の

用水桶に飛び込む壯快さは、さても上方狂言なんか思ひも及

ばねいさ。舞臺一杯水が溢れるその中を揚巻が襦袢をひきす

つたま、濡れ鼠になる。豪快さも壯快さも何さも想像のつか

ん芝居さ。贅六さもの度膽をぬいてやりてえな。

京の人……そうさすけれき、この頃は役者はんが無精になりや

はつて「水入り」まで演るお方ておへんえな。

江戸子……残念だが演らなくなつたね。こんごは寒い京の冬だ

からますく、無精を極め込むだらう。まさか湯を沸しちや、

気がぬけるし、高麗家に風をひかしちや老人虐待、人道問題

さいふやつさ。

京の人……これがほんまの年よりの冷水さすえな。

## 『助六』劇中の人々

——歌舞伎細見抄——

助六の出所に就ては諸説がある。その一は都一中の『萬屋助六心中』から二代目團十郎が思ひついたさいふ説、萬屋助六は島原の遊女揚巻の許に通つて遂に心中したので、義大夫に作られて『萬屋助六二代衾』さいふ。その二は江戸花川戸に助六さ呼ぶ俠客が居たさいふ説であるが兩説を併せ採つても差支へないと思はれる。何れも元祿享保頃の事實である。かの十八大通の一人大口屋曉雨が二代目團十郎の助六の扮装そのまゝで吉原へ通つたさも或は團十郎が舞臺で曉雨の吉原通ひの衣裳を真似たさも傳へられる。髭の意休に就ては元祿の頃江戸に髭の無休さ呼ばれた有名な菊間さ、又髭の自休さいふ吉原に出入した俠客さが居た。思ふに意休のモデルは後者にある。自休は本名を深見十左衛門貞國と稱して吉原なごを横行して亂暴狼藉を働いた。深見の手下にくわん貫門兵衛さいふ町奴があつた。これ即ちくわんべら門兵衛である。朝顔仙平は北八丁堀の菓子屋藤屋清左衛門から賣出した朝顔煎餅から出た洒落である。清左衛門は町奴の仲間入りをして居た。福山は七代目團十郎以來の役名である。これその頃堺町にはじめて福山さ呼ぶ蕎麥屋が店を出して繁昌したからである。最初二代目の時にはその頃の市川屋さいふうざん屋の名を用ゐた。





## 顔見世漫談

— 助 六 の 事 —

高 安 吸 江

もう顔見世になりましたか、早いものです。今度出るに聞いた鴈治郎の二役の中で、實盛は是までから何故やらぬのかと、私も時には勧めましたが、一向乗氣にならなかつたのを、按じるより生むが早く、やつて見れば豫想以上の成功をおさめ、既に旅へも持ちまはつたものです。春藤次良右衛門の方はもよもり是まで度々上演して定評のあるもの、即二ツ共皆手に入つた役ですが、あの長丁場を出たが最期段切まで、引込で一息つく事も出来ない布引ミ、何時も寒い頃にきまつて居るので、布圍も敷かず冷たい舞臺に尻餅ばかり搦いて居るせいとか、キツト痔

が出て困るゝ本人がよくこぼして居た襦袢錦ミで、此名優を苦めるのはチト老人（コレは内證虐待ではないかと思ひましたもの、其後の消息によれば他に對面の十郎一役ミの事故、それなら我慢をせすばなりませんまい。扱此三役の中何れにしるそれにつれて書くべき材料は無いではありませんが、皆まだ近頃道頓堀で出たばかりで、今更らしく感想でもあるまいかミ考へられますから、今回はわざと差扣へます。

それよりも殊に關西で珍らしいのは幸四郎のやる助六、即ち歌舞伎十八番中の助六由繪江戸櫻です。助六が義太夫や一中の

萬屋心中からさうして一ツ印籠一ツ前の江戸式に變化したかに  
ついでに種々な傳説、又は正徳三年江戸初演の花館愛護櫻以來  
今日までの沿革なきの考證がましい事は、既に是まで諸大家や  
各大通方の研究が發表せられて居り、又年表を見ても大體はわ  
かりますから詳しくは申しませんが、さかく二世園十郎が元  
祖で、淨りりは始め半太夫であつたのを、享保十八年から河東  
に改まりました。そして正徳から今日まで二百十餘年間に五十  
數回の助六を繰返して居る中、約半數が河東で、しかも今日現  
存して居る曲は其内で僅に廓の家櫻と由縁江戸櫻の二種に過ぎ  
ません。家櫻の方は海老藏白猿が始めて勤め(寛延二)、江戸櫻  
は九代目羽左衛門になつた市村龜藏に書卸された(寛曆十二)も  
のですが、後に(天保三)十八番の内へ加へられ市川家のものこ  
して今日まで傳はつたのであります。

河東の外に長唄でも常盤津でも又は富本や清元で何回も演ぜ  
られました。が、前述の通り河東の上演回数が遙に多かつた。云  
ふ外に、江本舜平氏の云はれた様に江戸淨りりの組合せでこれ  
の完成したもの、つまり河東節の助六は江戸淨瑠璃の代表と認  
められる事も一つの理由となつて、助六云へば直に河東を連  
想する様になつたのです。一方俳優側からは二世以來代々の團  
十郎が演じ終には十八番中に編入するといふ有様で、かの  
杏葉牡丹の五紋つけた黒無地紅絹裏の上着は、奥女中江島がも  
この近衛家から頂戴したのを更に二代目へ贈つたもので、それを

其儘服用するといふ風に完全に市川家のものにしてしまつたの  
です。

助六實は曾我五郎なきの一條を別にしても、劇として甚だ愚  
劣なものであるのは十八番中の他のもの、例へば暫なきも同様  
です。然しその荒唐無稽なうちに云ふに云へぬ滋味があつて、  
夢幻の極樂郷に遊ぶやうな氣持になる點も亦共通して居ます。  
暫を眞の荒事に見れば、助六は草に當るもので、彼を王朝も  
のミすれば、是はその世話化したものです。それに助六を見て  
いつも痛快に感ずるのは助六は無論のこゝ、揚卷の所謂惡體の  
初音はもより、福山のかつき、意休以下端敵の門兵衛、仙平  
に至るまで、出る者々何れも分相應に痰呵を切り熱を吐くが  
愛嬌に満ちて決して憎めない人物のみである事です。

吉原は當時騎樂の中心であるが又同時に社交や趣味や風俗流  
行の中心をなして居ました。その美しく艶ツポイ世界を背景に  
する定型的江戸兒の豪放な助六が、江戸の民衆中から多大のフ  
アンを得たのは自然の勢で、従つて此芝居は他に比してより多  
く民衆との接觸を示して居ります。一二の例を云へば、新吉原  
竹村の蒸籠を書割に使つたり、或は頭取が口上の後、正面格子  
の内へ(河東節御連中様さうぞ御始め下されませう)と挨拶する  
なきがそれです。又九代目が最後の助六の時(明治二十九年四  
月、仲の町連中數百人の見物で、割間一同露八を先頭に花道へ  
並び、約束の褒言葉に、舞臺一同總立で手打をしたり、又紫

の鉢巻を貰つた禮をのべて其披露をした後に手拭を見物へまいたなごは其最も著しいもので、此れを遊蕩のミ批難する人もありませうが、たしかに一種の妙趣を覺えさせられます。

私に見た助六は菊五郎の曲輪菊(大正四、七)三津五郎の二重帯(同六)羽左衛門(同四)幸四郎(同六)の江戸櫻なごです。六代目は四年に延壽が新作した清元で、初日には恐ろしく河東振つたものと思はれ、再演時にも大分コナされたことは云へまだ其臭味がぬけきれては居ませんでした。舞臺の方では五郎の件がない丈で他は江戸櫻と大差のないものです。三津五郎の方は常盤津で、是は寧所作と見るのが穩當ですから別として、菊、幸三優の印象を記せば、愛すべき驕兒として五郎を思はしめる菊、優雅な遊俠で煙管の雨も尤も肯ける羽左に對して、幸四郎は風姿殊に其容貌が九代目ソツクリの様に感ぜられて故人が惚ばれました。九代目ミ云へば彼が明治十七年四月に新富座でやつた時、六二連はこんな事を書いて居ります。

……若い時より色氣が薄く成て、近年理屈ツポイ狂言計り仕當てゐるのが身に喰付て居るせいか、堂も己前より勢ひが無いかと思はれ升た、イヤ斯様に申物の先後年に至つても此人が無かつたら、此助六の狂言を見らるゝ事が出来ぬと思へば有難いミ三拜して見物し奉れ、誰だと思ふア、つがもネへ。彼の河原崎權十郎時代に、海老藏三回忌、八代目七回忌追善として演じた文久二年が初で、次は明治五年河原崎三升ミ名乗

り、揚卷の總本家ミ云はれた岩井半四郎を相手に勤め、それに既記の廿九年ミ都合四回、即ち十七年は三度目で當時四十七歳でした。幸四郎は今年……オット役者に年は無い筈、助六に野暮は禁物でした。マゴくして化物並に取扱はれるのも「恐れるね」ですから此邊で幕にしませよ。

## 『助六』と紫の鉢巻

助六の紫の鉢巻は扮装の焦點を爲してゐる。而してそれが最初二代目團十郎が正徳三年江戸山村座で『花館愛護櫻』で助六實は大導寺田畑之助を演じた時は柑子色の木綿鉢巻であつたが、次の正徳六年『式例和會我』を演じた時には紫の鉢巻ミ變つてゐた。それに就ていろ／＼説がある花川戸助六が喧嘩をして尺八で眉間を割られた所を揚巻が通りか、つて自分の襦の袖を裂いて傷口に鉢巻したといふ實説を芝居に採用したとも言ひ、又當時の俠客夢の市郎兵衛が頭痛持ちで常に紫の鉢巻をしてゐたその伊達を眞似たとも言ひ、又昔時の所作事には女形若衆形一同に紫の鉢巻をしたのを二代目團十郎が立役で助六に之を用ゐたといふ説、又最初の助六の出は尸八を振り上げて相手を追ひかけてくる喧嘩場である。その威勢をつけた喧嘩鉢巻が後には優美な象徴に變じて色も柑子から紫に改めたとも、皆一理ある説である。



## 「助六」の問題

團十郎直傳の歌舞伎十八番が舞臺から消える——、悲しむべき問題だ。さなきだに歌舞伎の前途を兎角に噂されてゐるこんにち、更に寂寥を感じるではないか。

いまさら「許す」とか「許さぬ」とかの問題より、もう一步進んで考へやう。

「助六由縁江戸櫻」は十八番物中でも殊に大物の一つである。京都南座の本年度顔見世にこれが上演を計畫されて、幸四郎が師匠團十郎譲りの助六に大阪福助の揚卷宗十郎の白酒賣新兵衛彦三郎の摺の意休である。何のこだわりもなく開けば開く幕を、初日前に「幸四

郎の悲憤」と題して容易ならぬ問題が新聞紙面に現はれた。

幸四郎は絶対に今後十八番物上演はせぬと聲明したとか。堀越宗家では「助六」の「外郎賣」を許さなかつたとか。これが問題の表面である。これに依ると今後幸四郎の「勸進帳」「暫」その他は絶対に見られない事になつた。

堀越にも理由はあろう、幸四郎にも云分のあることは世の常のもめごとと一應は聞かれ様が、この際だ、歌舞伎が段々と時代につれて古典味を失ひ、歌舞伎本来の生命が稀薄になりつゝあるうではなからうかと思はれる現状を考へて、後世に傳へて歌舞伎の華と咲く十八番物は失ひたくない。願はくは直傳の尊い舞臺は極力今のうちにドン／＼やつてもらひたい。幸四郎よ、健在なれ、そして十八番物に精進せよ。堀越宗家も自家のタカラとしての十八番物の「光り」を歌舞伎壇共有のタカラとしてともに後世に傳へやうではないか。と、もう一つ、幸四郎の「助六」上演に困ん

で、松竹は幸四郎と共に九代目團十郎の演劇界に残した功勞を長く長く記念するための社會奉仕を十二月にすることになつてゐる。そして今後、十八番物が出る度に、どこへ行つてもこの慈善を行ふことに新しい例を開くといふが、いゝことである。雨降つて地面まるの俗諺に洩れず、この劇界の佳例が開け、こののち共に歌舞伎十八番物がドン／＼と上演されんことを希望する次第だ！。

## 劔劇對話

A、劔劇が流行してゐる、映畫の方は今のところ此種のが全盛だが、舞臺劇の方は少し下火になりかけてゐるのではなからうか。

B、下火どころか、舞臺劇の方では劔劇をやる方も見る方も、その銀紙細工の刀林のもとをくゞり脱げやうとしてゐる。

A、と、いふと。

B、一步その劔劇の奥へ足を踏み入れて、や

つて見やう——。またそんなものを見た  
いといふ希望と要求が生れて来てゐるの  
ではないかと思ふ。

A、劍劇なんて、全く下らないものさ、凡人  
の見る英雄のお伽噺だ。強がつてよろこ  
んでゐるんだからなア。

B、そればかりぢやないよ、それは劍劇の意  
義を餘りに知らない言草だ、さう一語に  
呟しつけてやるのも可哀さうぢやないか  
劍劇とは眞劍劇とも通ずる、眞劍とは必  
らず人が斬れる刀の眞劍ではない、心持  
の眞劍さと解譯しても面白いではないか  
その意味で、劍劇のこれからは刀を抜か  
ずともいゝから、ぐいツと人の心に喰ひ  
込む位の眞劍味を見せてくれるものでな  
くツちやいけないよ。

A、新聲劇や新潮座が刀を持たない芝居をし  
て客が来るだろうか。彼等の劇團はそれ  
を賣物にして今日の存在を確立したので  
はないか。

B、だから、いままで刀を持つて無暗に氣張  
る芝居ばかりをして来たそれらの劇團が  
今度は少しはしんみりした芝居もするこ  
とが肝要だ。

A、それが彼等に出来るだろうか。

B、出来やうさ、新聲劇にゐる連中だつて新  
劇出の人たちだし、新潮劇だつて達者な  
のがあるからね、たゞ彼等は餘りに最初  
の出發の時からの方針を保守しすぎて來  
たかの觀があるだけで、そんな懸念もさ  
れるが、大丈夫やらせて見ればやる連中  
ばかりだ、たゞ惜しい事には彼等の中か  
ら世の大家をぐんぐんと曳きづつて行く  
傑物がまだ現はれないのみだ。

A、まだ現はれないといふことは、これから  
の未來に期待をつなげる言葉かね。

B、まあ豫て期待してもいゝだろう、だが無  
駄かも知れない、こんな話がある、それ  
は大阪に劍劇が始めて組織された當時、  
何でもいゝからみんな大きな聲を出して

元氣のある舞臺を見せやう、そして藝の  
巧拙はとにかく男前がよく、それに熱の  
ある役者に劍を持たせて活躍させ様とし  
た時代があつた。その當時の劍劇界の人  
氣者となつた役者は、近頃では——段々  
とこの種の劇團にも技巧第一の時代が來  
て——盛んにもがいてゐる様だ。

A、もがけくだ、さうするうちにどこかへ  
出て行くだろう。

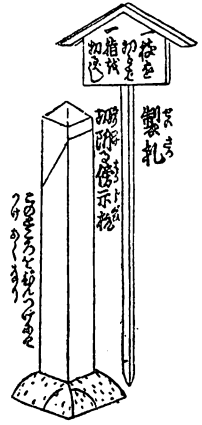
B、内面的な劍劇、やがて來る劇界現象はこ  
れだよ、ヨタぢやない、きつと來る、來  
る！。

A、劍劇俳優諸君、大いに奮闘すべしかね。

B、奮闘も奮闘だが、少しは他人の卓見にも  
耳を藉し、もつと物を識ることに努め  
て欲しい。

A、すると、君は劍劇俳優は無能だといふの  
か。

B、いや、左にあらず、一部の人にいつてゐ  
るのさ……。



# 大晏寺雜記

森 ほ の ほ

「大晏寺境」は謂ふ所の「非人仇討」であつて、主演俳優の「手負事」を見せるのを主眼とする。そして唯それだけのものである。だから「悲莊」さが舞臺の上に浮べば、それで既う可いのである。それ以上のものを私はこの芝居に要求しやうとは思はない。

◇

「手負事」の名人であつたといふ金子六右衛門は言ふ——手負事は、刀を杖について苦しうな息をついて見せるだけではない。敵はまだ近くに忍んでゐるなと思つたら、あたりに氣を配らなくてはいけないが、さりて深手こいふことを忘れては困る。深手こ見えさせて、その深手を苦にせぬ趣がなくてはならない。敵が逃げ歸つた三分つたら、そこで始めて手疵に悩むのである。味方が駆けつけて介抱するやうな場合だつたらば、口では強い事を言ひながら、自然氣も弛み、力も弱つた態を見せるべきだ。又、手負になつて刀を杖に突くにしても、小さざみに歩いて、刀を度々突くのはいけない。刀を足下から二

三尺先きへつき、刀が後へ残るやうに、刀より二三足先きへ歩み越すやうにしなければいけない。刀の長さは、柄が乳の處までくる程のが宜しい。この後半の説明は、「能」の竹杖の扱ひ方から暗示を得たものだらうと思ふ。

◇

最初の「非人仇討」の狂言で荒木與次兵衛が好評だつたのは、全く彼が「武道」に「太刀打」の以外にこの「手負事」なる演技に功みだつたからのこゝである。

「大晏寺」にも、敵と思つて松の枝を切る件があるから、多分やはり「非人仇討」の狂言と思ふが、ある時松の立木に仕掛のしでないのを大道具が知らずに飾つてしまつた。が、與次兵衛は美事にその松ヶ枝をスツパリ切落したので、彼の藝の力に驚いたと言ふ話がある。鷹治郎はこの科介を除いたこゝもあるが、「手負事」を見せる上から言へば是非あつて欲しい。

◇

東京で初演の折は、治郎右衛門が返り討にあふと、新七こそ

の兄の治兵衛といふのが連れ立つて来るのであつたが、この治兵衛といふのは原作……といつても『襤褸錦』だが……に見當らない。團十郎や仁左衛門の場合にもこの役はない。併し、鴈治郎は故人宗十郎の治郎右衛門で勤めたことがあるこの話だ。が新七以外にこの役を出す必要はあるまい。恐らく、役者の役の振り當てに困つた場合、考へ出したものだらうと思ふ。

シバキでは治郎右衛門は、須藤彦坂の爲に傷けられ、遂に落命するので、暗澹とした悲莊味で終始してゐるが、原作ではハッピーエンドになつてゐる。治郎右衛門は武右衛門に救はれて、その邸内で傷養生する。須藤彦坂も加村の屋敷へ逃けるが、大話では兄弟が首尾よく仇討をするのである。が、それは折角の悲莊味が、フイになつてしまふ。今日の脚本としては無論、アレエンデされた現行の臺本の方が宜しい。



大昔の荒木與次兵衛の扮装は、今の鴈治郎のやうに髭ほうほろした寫實の顔を拵へや、身苦しい着付ではなく、病ひ鬘でも黒々油を附け、顔も白粉を濃く塗つて美しく見せた。衣裳も白無地の廣袖にもみの裏の附いた着附で、縹色の丸括け幕を前結びに、手足も白く塗つて出たこいふことである。併し、もう次の時代の姉川新四郎になるに、袋裳も演技も、餘程寫實に傾

いたらしいが、それでも今日ほきではなかつたであらう。雛助宗十郎の治郎右衛門も、顔の拵へは綺麗だつたさうである。



このシバキの頂點は、仕込の青江下坂をズバミ抜放し「よっく切れます。さんご切れエマアす」の前後だらう。この件に於ける與次兵衛新四郎の演出の相違が『佐渡島日記』に擧げてある。それに據るに、新四郎は「二つ胴に敷腕、さんごよう切れます」三會心の笑を洩らしたらしいが、與次兵衛のは「二つ胴に敷腕」で差し付けた刀を左の方に作寄せ、調子を抑へて、「さんごよう切れます」三言ひ、冷かに笑つたらしいので、宗十郎の型を主としてゐるこいふ鴈治郎も、やはり宗十郎を通して後者を踏襲してゐるこいふべきであらう。



歌舞伎劇の様式としての面目さは、武右衛門の「お道具拜見」の件である。開いた扇を口に當て、足を割つた形で武右衛門の見込むのが下座の笛入りの合方、下部一同が堤の上から箱提灯をズラリ突き出す。治郎右衛門、武右衛門の眼が刀の鏢元から切先へ移つてゆく……あのホンの暫くの間の靜寂である。故梅玉の武右衛門は、また優れて好かつた。この優だけがこの大昔のシバキの役者らしかつた。「馬鹿くしう存する」の髯髯返しなき、いかにも「味」のあるものだつた。





## 大晏寺堤のことなど

並山拜石

……十二月二十四日、所要あつて京都へ行く。御大典氣分のみなきつた四條橋畔で、京阪電車を降りる。直ぐ眼についたのは南座の表、竹矢來ミ、招牌——吉例顔見世。

顔見世の起源ミか考證ミかに就いては、その向きの博識家が専ら述べられることであらうが、京都に生れた私には、顔見世は、幼少時代からの顔馴染で、「顔見世」云ふミ、さんなに少年の胸をききめかしたことだらう。

今は昔、顔見世見物の前夜、その夜は、さうしても眠られなかつたものだつた。鴨川堤の枯柳、四條の橋におく霜、白い呼吸、底冷え、師走の風、比叡から東山の色、朝まだき、うつくしい着物……なごそれらのものが一つミなつて顔見世ミは切つて離せない種々の情景を添えてくれる。

節季師走の多忙の折柄、一年一回の法樂ミして、京都市中の老若男女が、蒔繪のお重に御馳走を詰め込んで、暁の寒星をいたゞいて、四條へ四條へミ繰り込んだものである。

前後三日間、中二日は殆んど徹夜の體たらく。顔見世中は京

の風呂屋は未明から湯が沸き（京都は以前殆んど朝早くから湯を沸かす風呂屋はなかつた）髪結ひさんは、テンテコ舞ひをするミ云ふ景氣。遊廓では毎日數組の切落しがあつて、藝子は替衣裳で出かける。

洋行歸りの羽左衛門氏は興行時間の短縮を主張してゐるが、私等にミつて誠に結構なことである。が年に一度の顔見世だけ普通通り（今も興行時間だけは、ほとさうであるが）餘裕のある芝居見物がしてみたいものだ。

私が鴈治郎の大晏寺堤を見た印象ミして殘つてゐるのは、好い氣持でこの芝居が見られたことだ。作の殘酷味や陰慘味なミが、少しも感じられなかつたことである。前興行の「殿下茶屋聚」の東間三郎右衛門でもさうであつたが、かうした悪人に扮しても、返討に會ふやうな悲惨な運命を持つ役をしても、前者では少しも悪人らしく後者では少しも憐めらしい人格があらはれてゐなかつた。これは作者の技巧が足りないミ云ふより寧ろ

鴈治郎の生地が、それらに同化しない爲めだもう。私がこの前鴈治郎の大晏寺堤を見た時は、月は忘れたが、寒い時だった。その舞臺ごしらへを、不圖覗いた。蒲鉾小屋の下はさぞ冷えることだらう氣の毒な、ミ思つてゐるミ、薄よごれた敷蒲團を重ね重ねて、その上に地面の敷布を引いてゐた。ハ、成程ミ、いらぬ事に感心したものだつた。

かうした蒲鉾小屋の場は、日本の舞臺に屢々見るところであるが、特にこの大晏寺堤は私の好きな舞臺の一つである。簡粗なところがいゝ。自覺的にさう考へられたのか、或は不識の間にさうなつたのか、兎に角、色の使ひわけが巧みに行つてゐる。藪疊の暗緑、蒲鉾小屋の薄黄、背景の暗黒——さうした色の中に仲間の持つ提灯の明るさ（たしか左右に六個づゝ並んで居たミ記憶してゐる）それが又仲間のそろひの着附をはつきり照しつゝ、仲間ミ共に規律的に動く。いかにもいゝ舞臺面だ。

兄の次郎左衛門、弟の新七、この新七役ミして私は長三郎のを見た。父鴈治郎に、子長三郎ミして、この新七が可憐なものであつた。役の巧拙は、今はつきり記憶に残つてはゐないが、その巧拙を度外視して、この新七は長三郎でなければならぬやうに思ひ込んで居た、それはミ印象の深いものであつた。今度新七役を愛兒扇雀が扮することになつてゐるが、さうであらうか、あのデツブリ遅ましい肉付では、何んだか、これも役

の巧拙を度外視して、新七らしくないやうな氣がする。

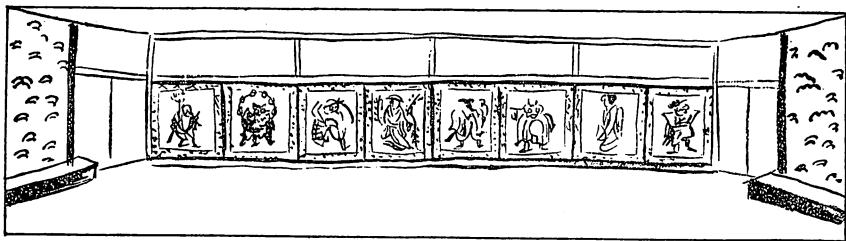
前段に云つた舞臺上の色——それを作者が意識した上での企圖ならば、その技巧には驚かされる。それと同時に作そのものの技巧にも、觀衆の心理を握むに十分な味を見せてゐる。そのうち返討は返討ではあるが、最後に正當な敵討をするところに最も味がある。最初兄弟の對話から加村高市の非人試し斬りに移り、其處で加村は自分の二人の友達、須藤彦坂は、この非人の仇であることを悟る、そして其の二人を非人小屋へ連れて來て返討させることになる。が、須藤彦坂は重い傷を負ひ、右ミ左の藪の中にかくれ、加村は逃げる。其處へ新七が歸つてくる、ミ兄は殺されてゐる。ひたすら悲歎に暮れてゐるころへ、高市が、一子庄之助の關係で出てくる。新七は高市を兄の仇ミ思ひあやまることなきあつて、ミと、高市に注意されて、兄の耳元で須藤彦坂の名を呼ぶ。これを聞いた治郎左衛門は蘇生する、ミ同時に藪の中に倒れてゐた須藤彦坂も、自分達の名を聞いて息を吹きかへし、寄つてくる。其處で兄は弟に助けられ二人の咽喉を刺し、同時に自分も落命する。觀衆はホツミする。その邊の呼吸は實にうまいものである。兎に角、『大晏寺堤』は舞臺上の技巧から云つて上乘のものである。

—南座顔見世興行夜の部上演—

# 大津

# 繪

竹本連中  
常磐津連中  
長唄連中



長へ昔々のその昔、あつた土佐繪の筆ぐさや  
うつしならうていろ／＼に名も大津繪の  
筆のさえ。

ト、しらせにて段幕きつて落とすと、  
義太夫になる。

竹へ名畫も時にうかれけん、あらはれ出づる  
ぞ不思議なる。

ト、真中から辨慶、上手に壽老人（げ  
ほう）下手からは辨慶齋ふすまから

ぬけて出て大ドロ／＼にて前へ出る  
長へ南無阿彌陀／＼、鬼の念佛かみくたく、  
撞木をもつてたゞきかね。

竹へその釣がねも三井寺へ、ヤットウントコ  
力餅、強い自慢の辨慶に。

長へはしこでたらぬ大あたま其さかやきのむ  
つ七ツ。

竹へヤットとどいた色文も、あら有難の世の

長へ佛の道は願へども、かげに邪慳の芽をか  
みて、つふりたてゝとつてかも、クツ  
ツクワと燃え立つしんにのほむらか、阿  
責の責に、地獄まはりや六道の辻のちま  
たに迷ひ来て、たのむは佛の誓ひなり、  
うつやうつゝの夢の世に、鬼が佛ときく  
鐘の、音よりもこわいつりがねの。

竹へまかり出でたる武藏坊、ひつかたげたる  
釣鐘の、三井といはねどおちこちに、ひ  
いきわたりておそろしき、何の遠慮も荒  
法師、法師力にちようちんと、一荷にに  
のふまはりもち、重いくらしに身すぎは  
軽い、ういた調子のうかれ唄。

長へはしこエ、はしこ買はんせげほうのあた  
ま、長いなわ手にナニ買はしやんす、か  
ねと撞木のあひがなる、かねと撞木の合

方か、うかれて遊ぶ十八の鬼も  
テントシヤン、うかれ  
うかれて繪ぶすまの、もとの座  
敷へ。

ト、又大ドロくになり三人  
踊りぬいて消えると、長唄  
を消し常磐津になる。

背景は唐崎になる。

常へ筆にさらへのたわむれや、ドツ  
コイ締たぞしやとこい。

ト、總逃げて出る、瓢箪をも  
つた裸男追つて出て押へる  
常へ汝元來地震の孫彦、ヤシヤゴか  
ひしやごかこしやくな事よ、身  
ぶるいギウく又もにげたか何  
處までも。

常へ浮氣の石氣の川せりエ、春長  
にまた、ぞつとした。風はなま  
ずのひれ吹雪。

常へこやまち御子様方を、どち

ら向いてもピヨコくとピコと  
いふたとナゼ腹たてる、このよ  
いくく、よいとまかせてこ  
てがらみ、瓢箪鯨のうんくらべ  
おかしめづらしあほうらし、笑  
ふ鳥や朝薦、かけたか逃げたか  
雲かすみ、外へはやらじと追ふ  
て行く。

ト、追ふて這入る。と、又長  
唄になる。

背景は堅田の遠見になる。

長へ津の國の浪花の春は夢なれや、  
はや、はたとせの月花を、なが  
めし筆の色どりも、かきつくさ  
れぬかずく、に、山も錦のをり  
をよて、故郷へかざる袖たもと  
長へ若紫に十返りの、花をあらは  
す松の藤波。

ト、藤娘出てよろしくふりあ  
る。

長へ人めせき笠ぬり笠シヤンと振り  
かたげたる一枝は、紫ふかき  
水道の、水に染めてそめてうれ  
しきゆかりの色の、いとしか  
いて藤の花、エムしよんがいな  
裾もほらくしどけなく。

長へいたこ出島のまこもの中にあや  
め咲くとはしほらしや、サアよ  
いやさく。

長へ花はいろく五色に吹けどぬし  
に見かへる花はない、よいやさ  
く。

長へしどもなや。

長へ折しもあれやソレ鷹よ。

ト、トピヨになり、鷹飛んで  
来る、鷹匠追ふて出る、藤  
娘と行あふ、上手へ行きか  
けるを藤娘とめる。

藤娘  
アモシ。

ト、くどきになる。

長へ男、心の憎いのは、外の女子に

神かけて、粟津と三井の鎮ごと

も堅い誓ひに石山の、身はうつ

せみの唐崎や、まつ夜をよそに

比良の雪。

ト、くどく。ふりはなして。

鷹匠

其處放されい、我等の役目はこれこの通り。

長へそも、鷹のらんちやうは仁徳

帝の御宇かとよ、吾彦の國より

貢ぎしを、くだらの酒公承は

つて、紅のあしををつけて野

外に放てば雉子をうつ、是日の

本の鷹匠のはじまりなりと聞き

及ぶ、鷹に縁ある藤紫のひも

にくりて二人が中も、堅田の

雁のおちこちに、噂をうむやな

りふりも、しどけなきさにもつ

れあふ。

ト、二人色もやう。

この時座頭の坊出て二人の間に這入る。

長へ戀に目のない座頭の坊、戀慕の

鬨に割つて入る。

座頭

二人 エツ。

座頭 ハテ目はきかねど鼻はきく。

長へ月雪花も鼻でたのしむ盲目の、

一寸先きは扱て置きぬ、いつも

闇なら苦もなくて、うかれ座頭

のちよんぼりと、つえつきのの

字の腰のし目、袴の裾を高から

げ。

ト、よろしくからみ二人は座

頭からよけては入る、と、

犬出る、犬を、二人だと思

ふてなほもからむ。

長へ不斷になれし小唄にも、布山が

見へ候朝日山には霞棚引く景色

を御三味せんの合の手がいのむ

く犬が馴れふんどしのはしにそ

ばへて引戻す、悪ぢやれしやる

なわるじやれしやると浮名の種

よ、戀に目のない通り者、そや

し立てられはやされて、犬はや

らじと争へば、エ、畜生ふめと

夕日かげ、あたるをねらひめつ

た打ち、折しもふりくる雨の足

足にまかせて追つて行く。

ト、雨音になる、常盤津とか

け合ひ、雲幕を一切にふり

落す。

常へ雨は次第にふりしきり、山河一

度に鳴動して、前後も忘ずる斗

りなり。

長へ雲のひまより雷さんが、下界

はるかに見下して。

ト、雷出て。

雷

ヤア／＼／＼下界では、うつ／＼いあね

えと、うつ／＼い野郎、ヤア／＼／＼、

犬めに追はれる座頭坊ハハ、人間共が騒ぐは〜。

常ハあそこもこゝも夕立に、あわて

ふためくなりふりも、オツトた

まらぬドッコイあむない雲ふみ

はづし落ちては虎の皮さん用よ

ソロリ〜と鳴神の。

常ハうかれ拍子のたいこの音。

長ハガラリコロ〜ソリヤ無理だん

べ、太鼓ならしてひと踊り、こ

としやめでたいみのりの都、王

は十善かみなりも浮かれ拍子に

おちこちの。

ト、大ドロ〜雲にてかくし

引ぬくと奴になる。

背景を瀬田のはしにかへて

何んだ雷めがおつちたか。

常ハそんな奴めを槍おつとり。

長ハふつてこり込む大鳥毛、足並そ

ろへてまかしよとナア、ありや

んりや〜、こりやんりや〜

シアよやまかせ、エ、わきよれ

しゆく入り下馬先合點か、派出

な道中おいらん達の外八文字引

かへて、裾はシツカとねじから

げ。

長ハオ、はづかしの肌自慢、戀にや

抜目も何のその。

常ハ石突しやんと持おくり。

長ハ酒きげん。

常ハ主のさ主の三階松の枝は千代に

ヤトサテナ千代に八千代の舞の

袖、ヤアサ、つるだんべ。

常ハこのしよんであら。

長ハ君はさんやの三日月様よ、背に

ちらりと。

兩床ハ見たばかり。

ト、きまる。

奴大ぜい出て。

奴大ぜい ドッコイナ。

長ハドッコイやらぬは、奴島田は川

どめに、ソレふりの袖、六尺ゆ

たかのふり袖、ユラリユラ〜

ヤットナ。

常ハ名残りはつきじ萬代の、龜は君

たちいつまでも。

長ハわれもかへりて此處のいしづえ

ト、一同きまる、よろしく以

下出て……まづ今日はこれ

ぎり。(終り)

## 五等席の客

野淵昶

たしか五等席だつたらう。顔馴染の赤ら顔のおばさんに云はれなくとも、私達は勝手に二階のてつべんに上つて行つたのだから。時々、廁の歸りなきに二階の上り場でも立見しやうものなら、こつびさく叱られたものだ。

舞臺では盛綱の首實験——ちようき「高い山から谷底見れば……」ミ云つた感じで、五等席からすつミ下へ展開してゐる見物席は呪文にかかつたやうに變に靜まりかへつてゐる。このまま放つておけば舞臺も見物も啞ミなつてしまひさうな息づまる沈齡だ。ふミはたはたミ風になびく檜下の音が聞えて来る。舞臺ミはまつたく無關係に「もう日が暮れるな」ミ感じる。

相棒はいつも同窓の神學生のTミミだ

つた。Sは荒畑寒村編輯の「近代思想」

——當時こんな雑誌を愛讀しようものなら刑事が訪ねて来た——の讀者で、一かきの社會主義者きざりをして居たが、歌舞伎にはなかなか通じてゐた。櫛をあてたここのない長髪がいつも二階席の好奇の焦點になつてゐたTは羽左衛門をはざえもんミ云つたりして歌舞伎ではSに頭があがらなかつたが、俳優の家號だけはここで查べたかよく知つてゐて、吉野家、伊丹家にまで及ぶその智識を我流の演劇論中ミよく交へたものだ。

Sだけは顔見世の初日を前夜からつめかけ、中日過ぎて私等を連れてまた見るミ云ふ熱心だつたが、Tも私も橋のたもミまで来て水雨にでもなりさうな朝の川端に花のやうにならんだ職を見るミ胸が

さきめいて小屋にかけつづけたい程度の普通の初心者の見物の熱意だけで、同じ顔見世を二度三度見る氣もなければ、また懐中の都合から云つてもそれは不可能だつた。

中日過ぎては一番目の幕が開いても、

平場や棧敷は「何某様」の場ざりの白紙ばかり目につくだけで客はまだまばらだその何ミはなしに劇場外の冷たい空氣が流れこんで來てゐるやうな中で、箱登羅が炬火をかかけて花道から出て來たり、新升の侍女の聞がさへかへつたりする。

いかにも顔見世特有の朝の芝居の氣分だ一番目か中幕上がすむミ、私達は歩みにくい小屋の下駄をつつかけて外に出るおや、まだ正午前だつたんだなミ、外の明いのに驚く。粉雪が時々おちて來る。向ひの矢倉にさびこんで例によつて天ぎ

んだ。牧師の長男に生れたTは食前の黙禱の習慣はここでもかかさない。不思議さうに見てゐる子供さんにきまりわるい思ひをするのはこちらだ。矢倉の天さんは相國寺附近のミルクホール兼うきん屋



の川さびの天ぶらより口にしない私達にはこてもうまかつた。そして天ぶらで充分油をそそがれた三神學生の演劇論の奇想天外に滑走することは！ Tの獨斷は

り、同君や渡邊均君を話すやうになつても、え、こじに守つて相手にされなかつた持論だつた。

一度も見たことのない吉右衛門を團十郎の正統、歌舞伎の本道と論じてやまない Sは彼の社會主義的見地から鴈治郎によつて代表される關西歌舞伎の世界を攻撃するが、しかも私の多見之助、卯三郎禮讚論が出るに忽ち豹變して鴈の名優たる所謂を吹聴する。中學二三年の頃に自然主義の全盛期にあつて白鳥の「毒や」泥人形、秋聲の「徼」や「足跡」等を耽讀して荷風の「すみだ川」や鏡花物を甘い云つて輕蔑して居たこまつちやくれの私は情感の上から歌舞伎の世界に這入れても理窟ではいつも無理に攻勢に出て居た。その理窟上から好きな俳優にしてしまつたのは多見之助、卯三郎、魁車、新派の高田實、村田正雄、それに大正座で變な女優劇の補導をしてゐた小堀誠だつた。これはその後、同志社を二人で殆ど同時に退學して（私だけは放校されたのだが）京大に這入り、山本修二君等と同窓にな

SやTや私のグループへその後、變種が二人をびこんで來た。水向を云ふ神學生Mを云ふその頃京都で巡回文庫を初めてやりだした年輩の古本屋さんだ。水向はSに連れられて右團次の鯉つかみを見て感激した美濃大垣出の純な男だつた以後、右團次を呼ぶに千兩役者の尊稱を持つてしてTから古い嘲笑された。その水向が初めて顔見世を見た感激を云つたらなかつた。T直傳の「成駒屋」の振廻し登場する俳優をSにあれが「成駒家か？」と聞いたりしてSにうるさがられた。M古本屋はその昔、阪東彦三郎の男衆をしてゐただけ、よくもみ手をしてここへこ辭儀をする男で阪彦のこを「彦且」と云つてゐた。齒ぎれのいい江戸っ子で市村座や新富座の舞臺裏のこを話してくれるので、Sもこれには二目も三目もおいて傾聽した。Mの宗十郎最負には三人で喰つてかかつたものが、工左衛門、源之助、關三十郎の宮戸座の話、

魚河岸の最負の話、初日の樂屋の困亂から拍き子のいれかた——荷風や勇や薫の作品でだけ知つてゐるまだ見ぬ世界をこの人は手にさるやうに話してくれた。

「あんたにア團藏は是非見せたかつたね」かう云つて私だけは特におだてられた。また幾分囑望されたのだらう、小さんや團右や燕枝の嘶や女義太夫の席に連れて行かれたり、一緒におでんやに這入つたりして、基督教の學校からおかまひを食ふだけの修業はさせてもらつた。默阿彌の狂言百種や帝國文庫の脚本傑作集新群書類従や燕石十種の演劇篇をこの人に貸りてよんだのもその頃だ（勿論、幾分見料をもられたが）

同志社を出てSは關西學院に走りTは白河の地藏裏の小山の一軒家にこもつて詩作に耽つてゐたが、私の芝居熱は次第に高まつて來た。英國の近代戯曲を研究の對象としたが、岡崎のや大學の圖書館で讀みにくい南北や並木五瓶や勝彦蔵の寫本をあさつたりした。そして師匠のM古本屋を出しぬいて新升や多見之助の樂屋に通ふこをおほえ、鴈治郎の由良之

助の城明渡しを、すのこの上から見たたり  
多見藏襲名の熊谷陣屋を寒胃で鼻汁をす  
する熊谷にはらはらしながら舞臺の袖で  
三日もつづけて見た。そしてMの芝居學  
の淺薄さにそろそろ倦いて來てゐた矢先  
明治四年の芝居評判記の版元、寺町K書  
店の親父さんにすつかり私淑して當時の  
名優の型をよく教へてもらつた。源之助  
丈にあつたのもこの爺さんの宅であつた  
私がお富やお國やお百でお馴染の田圃の  
太夫が老人であることは知つてゐるが、  
こんなにもいい爺さんであることは想像も

しなかつた。靜に綠茶をすすりながら、  
さびた江戸辯で話してゐた。多分「牡丹  
燈籠」を南座で出して居た時だ——  
その後、私は卒業の前年、新劇團を組  
織してから歌舞伎にも勿論、顔見世にも  
さうしたものが必前のやうな關心を持って  
なくなつた。しかしあの南座の前に竹矢  
來が組まれる頃になるさやはり一度は中  
をのぞいて見たくなる。  
此頃私は西洋劇の翻譯演出にすつかり  
行きつまつて何か回轉を必要とする際、  
歌舞伎の演技様式や劇場の構造を充分研

究したいと思つてゐる。  
今年ももう顔見世だ！  
前に書いたSは大阪外語裏で葦屋ミ云  
ふ初版物、珍本物専門の古本屋の主人で  
おさまつてゐる。Tは一時、同志社圖書  
館の司書をしてゐるが、今は美作の山奥  
で傳道してゐる。水向は永年アメリカに  
ゐるがグロッド、ウエイの劇場も見て昨  
年だつたか歸朝した。大阪近郊で牧師を  
してゐる。M書店は同志社附近に引越し  
て毎年目だつて繁榮してゐるが、主人の  
もみ手は相變らずだ。

## 畫 面 と し て

吉 川 觀 方

今度の顔見世は、恰も錦繪をならべた  
やうな、私等には至つて好ましい出し物  
ばかりである。

中車の仁木は初代豊國幸四郎の男之助は  
三世豊國の繪が實盛も祢經も智恵内も虎  
藏も皆悉く生きた錦繪ではないか。

福助の政岡、宗十郎の八汐は國周の筆

そが中にもかの助六の如きはぎの浮世

繪師も筆を試みぬものはなかつた。

扱て此の助六……助六由縁江戸櫻」は  
同じ市川家十八番物の中でも、五郎や景  
時とは少しく趣を異にし、和事さ荒事さ  
を巧みに結び合せて演ぜられたる、かの  
所謂荒事を以て得意とした父初代の藝風  
を祖述し、しかも尙、曾根崎や天網島、  
八百屋の如き心中物をも演じた、かの二  
代目團十郎によつて創められたのである  
因つて、二代目は、三度此の助六を演

じて、三度ながら成功したのであつた。即ち、正徳三年四月に、木挽町山村長太夫座にて名題「死館愛護櫻」をして演じ古今未曾有の大入大當りさいふを最初に享保元年正月に中村座にて二度目の助六、寛延二年三月に又三度目を演じた。而して、服装的意匠に富んでゐた彼は、その演ずる毎に巧に新奇な風姿を以つて舞臺に現はれるのであつた。

最初の助六の衣裳は、三升さ牡丹さのふせ繡した黒袖の小袖に、巾廣の帯、柑子色の木綿の鉢巻に、紺足袋を穿き、長刀の一本差し。

二度目は、黒小袖に小さ刀を差し、黒絹の鉢巻。

三度目は、黒羽二重の小袖に紅絹の裏を附け、魚葉牡丹を友禪に染めた五ツ紋中着は淺黄無垢の一つ前に、織物の帯、絞袴、一つ印籠、紫縮緬の鉢巻。而して此の三度目の扮装は、その髪風や履物の様まで、當時の所謂藏前風を寫したと稱せられ、以來助六は、實に此の扮装を以つて演ぜられることになつたのである。

かくて市川家では此の狂言を代々御家藝として演ずることになり、かの六代目

の如きは、寛政十一年その二十二歳の時四代目團十郎廿三回忌追善に、助六の初役、古今稀成大當り、又、七代目も、文化八年六代目團十郎十三回忌に中村座にて追善として助六の初役、幕積物山の如く、例によつて吉原よりは蛇目傘を、又傾城の提灯長柄傘は毎日變りて演ぜられたさいひ、同十一年三月河原崎座にて、四代目五代の追善に、次の文政十三年春には大阪角の座にてこれを演じ大いに好評を博したさいふ。

これらの風姿を寫し出した錦繪として私の今日迄に見たうちで、古い方では、烏居清滿筆かき記憶する、里小袖の妻先きに大きく三升さえびさを描いた一人立の姿繪……これは或は肉筆繪であつたかもしれぬ。……岸文調、勝川春章合作の有名な、明和七年刊「繪本役者舞臺扇」の中巻に市川雷藏の半身繪……これは小袖が紫色に摺られてゐる……又、初代歌川豊國の繪にはその晩年作……文化五六十年頃……に尾上榮五郎の助六、初代門下の國貞が漸く五渡亭を名乗り出した文化十一年頃にも菊五郎の助六をよく見る

やはり初代門下の國安は、「助六見立河東節」を題して岩井半四郎の助六を描き五渡亭國貞は「岩井半四郎七役の内」をして同じ助六を描いてゐるが、いづれも文化十二三年頃に作られたものらしい。尚ほ五渡亭は、五代目松本幸四郎や七代目團十郎の助六を、又花川亭國富なさいふ浮世繪師も文化の中頃の七代目の若い頃の助六を描いてゐる。八代目のは、五渡亭が二世豊國……實は三世であるが……を名乗つてから、又同門の國芳なごも競つて筆を染めたものであつた。

これらは私のこれ迄に見た助六の繪の記憶の一部であるが、かく多くの昔の助六を觀た後に、私の想像には、今度の幸四郎の助六に、二代目や四代目七代目なごのそれと比べて、畫面として或る何物かに物足りぬ恨みがないではない歎。同じ十八番物のうちでも、「鳴神」や「矢の根」なきは全く別な趣のこの「助六」に幸四郎が最もふさはしい役割を思はれない。たゞ最後に私としての望みは、今度の顔見世に、此の春大阪で演じられたかの「暫」を京都の人たちにも見せて慾しかった。

漫

筆

大村嘉代子

顔見世の狂言名題、お知らせいたゞきました、京ミ東京に距つては、その後又さう狂言が變つたか判らず、滅多なこゝは書かれませんかとおゆるしを願ひます。ミ云ふのは今年の二月御誌から中座の三月に出る宗十郎の鏡山について何か書けぞのお手紙だつたので、宗十郎の鏡山ミいへばお初であらうミ思つて何か書かうミ考へて居ましたら、こちらの新聞に中座の鏡山の尾上は宗十郎ミ出て居ましたので、半信半疑ながら宗十郎の尾上に就いて書いてお送りしました。でも不安であつたので、もし宗十郎が尾上の役でなかつたら此の原稿は全部取消しにして下さいかき添へておきました。その後新聞を見るミ矢張り宗十郎の役はお初であつたので、私の原稿は無論載らな

いもの思つてゐました處が、送つて下さつた道頓堀の三月號を見るミ、ちゃんミ私のお初ミ書きなほしてありました。不思議だミ思ひながら、そこをあけて見るミ驚いてしまいました。私のかいた原稿の尾上ミいふ字をお初ミいふ字に訂正してしかも初めの方を抹殺し終りの方の文に加筆をして出してあるのです。考へても御覽下さい。尾上ミお初では役がまるで違ふではありませんか。それをお初ミいふ字ミ尾上ミいふ字ミを、置きかへたのですから全く譯のわからないものになつてしまつてゐます。私は雑誌にものを書いて、あんなになほされたことは、まだ一度もありません。不愉快な思ひをしました。併し同じ紙上で正誤していたゞ

いても、月刊雑誌ですから、薄くなつた讀者の記憶を更に濃くするやうなものでその上自分でももう一度不快な思ひをしなければならぬミ思つて目を瞑つて、そのまゝ、今日まで過しました。昨日又幸四郎、宗十郎が京の顔見世に出るので何か書けミ編輯部からのお手紙ですが、又狂言がつかかへになつたり役が違つたりするミ、此の前のやうな見こもない事になりますから、今日みて來た東京の宮戸座の印象を書いて責をふさぎます。宗十郎、幸四郎に滿更縁のないこゝでもありませんから……。

淺草の宮戸座は區劃整理で改築ミなりました。その落成興行の晝の部を、宗十郎が改築の口上で花を添へて、帝劇の高助、田之助、金太郎、訥升その他の若手連が活躍してゐます。だしものは第一が田之助の綾衣で宮島のだんまり、第二が田之助の十郎、金太郎の五郎で夜討會我狩場の曙、そのあミ宗十郎の改築口上があつて、第四が高助の操三番、第五が金太郎の萬歳、高助の才藏で乗合舟、それから第六が廿四孝の十種香を訥升の八

重垣姫、金太郎の勝頼、梅三郎の濡衣で出してゐます。

紙敷がありませんから、一々の細評は出来ませんが、高助の操三番を第一におします。それから田之助の綾衣實は袈裟太郎が、いかにも歌舞伎らしい味がありました。かういふものをするに、田之助は形なり顔なりに歌舞伎味のあるこは今の若い優のうちでは第一です。今月の帝劇の伊藤博文なども評判がよく、此の優新劇の方面にも望みをかけられ初めたやうでそれも結構ですが、あの持つてゐる歌舞伎味を自分自身にも尊んでもらひたいと思ひます。狩場の曙では田之助の十郎、金太郎の五郎は意氣がよく合つて二人が並びたつたけなげな美しい舞臺を見た時、此の二人の母の紀伊國屋夫人、高麗屋夫人が生きてゐたらばさ、思はず眼がしらがあつくなりまして。宗十郎の口上は非常に立派で明晰で、而も見物の心に解けこんでくる親しみが、近頃になり口の上でした。金太郎の勝頼、訥升の八重垣姫、ごちらも叮嚀なよい演出でした。八重垣姫はきまりきまりの形もよく

時々宗十郎を忍ばすやうな美しささ色氣ミ品があつて立派な出来でした。金太郎の勝頼これもさかにか高麗屋が染五郎時代の美しさを思はせるやうな面影があつて、ふつくりさしたたいゝ出来でした。

誰れもくゆつたりさ叮嚀で、眞面目に大事に舞臺をつこめてゐるのが見る目にぎんなに心持がよかつたかしれません十種香の舞臺の終つたのが四時半ごろ。帝劇ではもう西郷さ大久保の二幕目位が進行して居る時分で、十種香に出る優達は、帝劇のその三幕目がされるさ次の女暫に出るのです。さぞ疲れもし忙しくもあるでせう。

此の若い優達は帝劇でも皆なもういゝ役がついて來ました。高助は西郷の僕小牧新四郎、小栗栖の長兵衛の馬士彌太八田之助は西郷さ大久保の伊藤博文に女暫の清水冠者、金太郎は女暫の手塚太郎光盛、訥升は女暫の紅梅姫に紙治の小春さいふやうに、大分いゝ役がつかますが、時々はかうした彼等自身しんになる芝居もしてほしいと思ひます。

## 新刊紹介

### ○沓掛時次郎 (長谷川伸氏著)

今夏澤田正二郎が浪花座で大好評を博した『拘摸の家』を始めとして、『沓掛時次郎』『舶來市着切』『九郎の關』『代理殺人』『馬の背』等の異色な戯曲を集めた書である。今日の脚本として最もテンポの速きもので讀後常に爽快を覺ゆる良著である。新國劇事務所内柳蛙書房から出版されたもので定價壹圓貳拾錢。

### ○愛憎亂麻 (下村悅夫氏著)

大阪朝日新聞連載の大家作品であつて、道頓堀の浪花座にては關西歌舞伎の一座が、又角座にては新聲劇が脚色上演して大好評を博したものの乾雲坤龍の二刀が相呼び血を見ざればおさまらない大活劇と名鏡のなぞの文言に珍寶を探らうとする、そこに敵討がひそむといふ興味深き書である。東京市麹町區久保六番丁九平凡社發行定價壹圓參拾錢である。

### ○苦闘の跡 (澤田正二郎著)

實に涙ぐましく受難史である。一青年より志を得て天下の澤正になるまで著者は實に苦闘に繼ぐ苦闘の生活を續けて來た。一讀今日の盛果は決して偶然の賜でないことがよく解る。澤正劇を見る人は必ずこの書を讀んで舞臺以上の努力を以て世間に處して來た人間澤田君を見る事も無意義ではない。新國劇事務所内柳蛙書房出版。定價壹圓。

京都 四條 南座

吉例顔見世興行

十二月二日初日 晝の部 午前十時開幕  
夜の部 午後五時開幕

ひるの部

前狂言 伽羅 先代萩 二幕

中幕 源平布引瀧 實盛物語

淨瑠璃 釣 女 常磐津連中

切狂言 壽曾我對面 一幕

よるの部

前狂言 鬼一法眼三略卷 菊畑

玩辭樓十二曲の内

中幕 敵討襤褸錦 大學寺堤

歌舞伎十八番の内

二番目 助六由縁江戸櫻 一幕

大喜利 大津 河東節御連中

繪

常磐津連中 竹本連中 長唄連中

總配役

齋藤一郎實盛、曾我十郎祐成、春藤治郎右衛門(廓治郎)乳人政岡、娘小まん、奴智恵内、三浦屋揚卷(福助)妻沖の井、大磯の虎、皆鶴姫、春藤新七、雷、奴好平(扇童)絹川谷藏、

葵御前、座頭彌の市(當之助改め嵐吉三郎)八幡三郎、武藏坊辨慶(政治郎)實盛の臣、仲間角助、茶屋女房おまつ(成笑)實盛の臣、奴小良藏、袖浦金之丞、奴秋平(廓之助)こし奴小萩、奴三平、三浦屋愛染、奴竹平(老太郎)工藤大坊丸、高市庄三郎(章景)百姓九郎助(鯉十郎)こし元楓、茶屋廻り市松、鬼念佛(市郎)實盛の臣、奴五良藏、三浦屋胡蝶、奴實平(福萬壽)仲間可門、三浦屋梅吉、奴福平(雀)黒川官藏、猪猿小平太、仲間八内、男達半鐘勘八(右左次)庄屋太郎作、大江廣元、須藤六右衛門、男達追手風七(齋五郎)近江小藤太、笠原湛海(建藏改め市川九團次)矢橋仁惣太、彦坂甚六、朝顔千平(箱登羅)榮御前、母小よし、曾我の満江(蓮女)仁木彈正、瀬尾十郎、工藤祐經、吉岡鬼一法眼、高市武右衛門(中車)妻八汐、太郎冠者、小林舞鶴、奴虎藏、春藤治兵衛、白酒屋新兵衛(宗十郎)足利頼兼、大名、福島のかつぎ富吉、鷹匠由の丞(田之助)妻松島、上落、化粧坂少將、三浦屋白玉藤娘(源平改め澤村訥升)大藤内成景(連倉)海老名八郎、奴紀の平(淀五郎)葛西清春、男達釣鐘權兵衛(錦四郎)國侍利金太(金五郎)三浦屋誰袖(千鳥)西山半十郎、助六の後見(大七)愛甲三郎、奴蛇内、奴作平(中三郎)三浦屋八重衣、壽老人(竹三郎)梶原景高、通人里鴨(團右衛門)茶屋廻り龜松(龜三郎)梶原景時、寒修行西念、くわんべら門兵衛(新十郎)鬼王新左衛門、罷意休、裸男音作(彦三郎)荒獅子男之助、醜女、曾我五郎、加村宇田右衛門、花川

戸助六(幸四郎)

中座

御大典記念吉例師走興行

曾我廻家五郎一派

十二月一日初日午後四時半開幕

第一 結びの神 一場

第二 不言不語 二場

第三 四海波 三場

第四 御國訛 一場

第五 奉祝提灯行列 三景

引拔 總踊

重なる役劇

植木屋吾助、高砂頼母、鮮人朴妻抱、夏祭り團七、舞子敷島、天使(五郎)學生殿井、弟子太吉、門番岡平、食堂親方櫻井兵助、五段目與市兵衛、舞子大和(蝶六)學生小原、女房お種、息女浪路、娘お菊、四谷のお岩、舞子朝日(大磯)學生山田、會社員林良造、門番陸平マツサージ鳥具又兵衛、軍兵、神官(小次郎)骨董商田原福松、仲間鹿六(五樂)學生矢代、仲間馬太、舞金井利吉、め組辰五郎(時雄)妻お咲、下女お久、侍女千鳥、下女お竹、雷女舞子(林蝶)田原の友人松本、伯母磯路、踊子(五郎丸)實業家椋原、父俊造、沖津俊賢、會社員平井喜代松、明渡しの由良之助(致雄)實業家碓井、若徒與八、豊年屋山森、辨慶(時右

衛門) 櫻原番頭與八、衛生係上村、店員三好、  
彌子(笑將) 女お竹、召使お棍、高尾太夫、  
舞子(時和)

角座

モログチの愉快劇

十一月三十日初日 正午 開演  
五時半

篠崎謹二作

第一 地下鐵騒動 七景

門脇陽一郎作

第二 人情讀本 四場

佐々木邦原作

門脇陽一郎脚本

第三次 男坊 五場

門脇陽一郎作

第四 モダン行進曲 四景

役割その他

第一、地下鐵騒動

帽子洗濯屋十吉(道尾運平)妻おむら(守八千代)客(黒木憲三)労働者(井田昌介)若旦那風  
の男(長田健)藝者(若葉蘭子)男(中村哥三郎)  
女(岩間百合子)靴を忘れた商人(林孝)拘摸  
(小高眞太郎)拘摸を追ふ男(水島緋紗志)同  
二(石田守衛)同三(村井正雄)同四(笠間紋治  
郎)拘られた男(今井録郎)

第二、人情讀本

庶務課長櫻井義雄(諸口十九)社員泉川四郎  
(黒木憲三)會計課長今村(岡本五郎)社員春田  
智利(井田昌介)同秋山進(水島緋紗志)同冬野  
雪夫(石田守衛)同加藤龍介(林孝)タイビスト  
加良子(岩間百合子)同網子(竹久千枝子)社員  
夏目保(中村哥三郎)夏目妻久子(茨木勝子)輸  
出課長友田幹(柴朝美)洋服屋佐々木(千賀海  
壽)一櫻井妻綾子(春野音羽)隣人(吉田源吉)  
(今井録郎)吉田妻おかめ(浦邊椿子)魚屋倉吉  
(小高眞太郎)遊客細井(長田健)藝妓玉龍(松  
平美子)同とき子(若葉蘭子)同きん子(中野律  
子)半玉つばめ(竹久千枝子)同いろ子(九條靜  
子)同小君(中村光恵)女將おかつ(木の花澄  
子)女中お竹(鈴木よしみ)とき子の父未造(道  
尾運平)

第三、次男坊

英語教師加藤先生(千賀海壽)體操教師申本  
先生(柴朝美)中學生堀尾正晴(諸口十九)同横  
池(水島緋紗志)同鈴木(小高眞太郎)同原(林  
孝)同若宮(中村哥三郎)同岩崎(井田昌介)同  
矢田部(村井正雄)同藤原(石田守衛)同湊(長  
田健)同木下(水室徹平)辯護士横池(黒木憲三)  
(藝妓奴(守八千代)同おきた(若葉蘭子)同て  
る吉(茨木勝子)同こきみ(中野律子)半玉小太  
郎(竹久千枝子)同小すい(九條靜子)同いろ子  
(中村光恵)賄の女中おふく(鈴木よしみ)同お  
きみ(初音光子)賄方作三(道尾運平)無頼漢不  
死身の玄三(小高眞太郎)安藤校長(岡本五郎)  
安藤夫人信子(茨木勝子)安藤娘美津子(高砂

すゞ子) 驛員室田(笠間紋治郎)鳥屋多市(道尾  
小運坊)

第四、モダン行進曲

西條八十作歌

一 歌詞

一 銀座々々と通ふ奴あ馬鹿よ  
帯の幅ほどある道を  
セーラーズボンに引眉毛  
イーロンクワツプ嬉しいね  
スネークウツドを振りながら  
ちよいとかしませう左の手

二 向ふ通るはスターぢやないか  
青い眼鏡が氣にかゝる  
キネマ女優は玉の輿  
ネグリナルヂイスマンソ  
娘スターになるまでは  
親父かち棒でバツト吸ふ

三 東京銀座は恐ろしところ  
虎と獅子とが酌に出る  
そーちやんハーちやん上りだよ  
注いだりキユルの薄なさげ  
たとへば夜を來ればとて  
チツプリヤンコぢや惚れはせぬ

四 昔柳で鳴らした街を  
今ぢや岡タク夜泣きする  
ナツシユにシボレーバツカード

フオードは仲間の面よごし  
更けて雨かとテールのぞきや  
乗せたお客のキツスの音

松  
島  
八千代座

新聲劇若手一黨

十二月一日初日晝夜二回開演

徳田純宏作

第一 忠告した彼 一幕

夕刊大阪新聞所載

鳥江鏡也 新作

第二 實説 天一坊 五幕六場

第一、忠告した彼

河村は鳥田をカフエーへ連れ出して、彼の  
情婦多美子の密會を見せて諦めさせようとし  
た。ところが皮肉にも隣室には河村自身の情  
婦清子が若い音楽家と墮落するところだつた  
鳥田は反對に河村を感服する。後には河村  
が得も云はれぬ苦痛をなめるといふ筋

第二、實説天一坊

師匠の住職とお三婆を殺して吉宗公の落胤  
の證據品たる短刀とお墨附を奪つて來た寶澤  
は藤ヶ岡の山中に來寛り、其處で山賊の赤川  
大膳に危く命を落す處を、二品の威力と巧言  
に依つてうまく彼等を味方にする。之を立開  
いてゐた浪人山内伊賀亮が又もや寶澤の味方

に加はる。一方寶澤を戀人としてゐた純眞な  
娘お霜が圖らず寶澤に出逢ふが、之亦巧言に  
依つて三人の中へ加はり、遂に御落胤天一坊  
として名乗り込み、無事松平伊豆守を誤魔化  
すが、お霜の改心と大岡越前守の卓見に依り  
捕縛される

配 役

徳川天一坊(壯野)天一坊家臣常樂院天忠(新  
田)音楽家富岡、池田大助(澤)水戸家浪人藤  
井左京(一條)水戸家浪人赤川大膳(山本)無口  
な男島田、大岡越前守(藤本)松平伊豆守、平  
右治右衛門(小波)よく饒舌る男河村、九條家  
浪人山内伊賀亮(芝田)河村の情婦清子、妻小  
澤(金剛)腰元初代(濱地)腰元田毎(高嶺)腰元  
時代(富士岡)腰元花香(若柳)老女吳竹(中村)  
天一坊召使お霜(守住)

辨 天 座

人形入りで

女義昇之助出演

辨天座師走興行は一日初日で、豊竹昇之助  
一座の女淨瑠璃が文樂の人形入りで出演。開  
場は毎日四時、語り物は二日替り、因に同一  
座の連名左の如し

豊竹入登、豊竹昇華、豊竹昇司、竹本末吉  
豊竹昇光、豊竹君一、豊竹小登昇、豊竹昇  
鶴、豊竹仁昇、豊竹呂玉、豊竹昇之助、糸鶴  
澤金昇、豊澤咲之助、豊竹助八、豊澤長糸  
豊澤新六、人形吉田小兵吉外

ルビヒサア  
シロシンボリ 科飲涼清  
贈答品



↓  
観劇に、座右に、

# 好伴侶たる劇壇の繪巻物

石の上にも三年——本誌『道頓堀』もこゝに苦戦奮闘の三星霜を経て漸く來春『新春號』と共に光輝ある第四年を向へるのこゝになりました。この間、本誌は常に内容刷新し誌價低廉を念頭に、愛劇家の觀劇に座右に好伴侶たるをモットーにして参りました。處が昭和四年は加之、大衆的意義を強調して演劇即大衆、皆様の御生活に唯一無二の慰安娯樂品として拍手喝采されんことを希望してあらん限りの計畫を作成しつゝ、あります。就ては本誌を御愛讀下さる皆様は本誌の新しい活躍を擴く御吹聴下さるご同時に一人にても多くの愛讀者を御紹介願はしう存じます。と共に書店の店頭でお買上げ下さるのもごより、此の改年の好機に御住所氏名を御一報下さいまして年極讀者ごなつて頂ければ幸甚であります。本誌はこの年極讀者の御熱誠に報ひたく、最も便宜ある、最も御有利な觀劇會を催したく、即ち『道頓堀ドラマリーグ』の發生に努力致すつもりでございます。その他宣傳部發行の特別通信はその都度洩なく御發送致します。この特點は誰方よりも先づ『道頓堀』の年極讀者に決定しましたからさし／＼御加入願ひます。

年極讀者にお成り下さるお方は此の際金三圓四十八錢を小爲替にて大阪市南區久左衛門町八松竹合名社内『道頓堀編輯部』宛御送金願ひ上げます。當方にては直ちに登録署名致します。



松本泰三

今年も早や顔見世芝居に京の夜を一層美しく飾る日が参りました。柳並木に小旗やのぼりのはたためく四條河原に、みぞれまぢりの北山時雨がちらつくの

も顔見世の華美な繪看板とともに私達のあこがれの姿です。竹矢來に出場俳優のまねき、肉太な勘定流の筆、その上に朱線で區切られた馴染多い定紋、それは今年は目出度御大典の紅提灯に映えて連年よりは美しく見られたことせう。

さて、本誌も今回は全員をあげてこの顔見世芝居のために割愛しました。晝の部、夜の部、いづれ劣らぬ名狂言揃ひです。昭和三年度の東西大歌舞伎の粹粋を一堂に網羅したこの興行をそのままに永遠に記録し、敏銳に報告し、詳細に精述したのが本誌で編輯者の苦心も全くこゝにあります。

幸ひ御寄稿を仰ぎ得ました諸先生の御厚意により豫定以上の完成をみる事が出来ました。それがため、本誌誌上に發表する豫定にありました『道頓堀總勘定』の掲載は次月新春號に延ばさねばならぬことを遺憾に存じます。

社告

廣告部員

鈴木金之輔

右は今般不都合の廉有之候爲め解雇致し候爾今本誌ニは何等關係無之候に付き謹告申候

昭和三年十一月卅日

道頓堀編輯部

劇文壇の泰斗、島華水、成瀬無極、林久男、山本修二、高原慶三、高谷仲、森ほのほ、野淵昶、堂本寒星、それに齋伯吉川觀方の諸氏に大阪より高安吸江、石

愈々昭和の三年も残る旬日に迫りました。讀者諸子の御健康と共に多幸なる新年を迎へられることを祈りつゝ稿を止めます。

昭和三年十二月一日發行

月刊『道頓堀』 第三年 第廿七輯

誌代は前金でお拂ひを願います。

郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。

御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

定價 金參拾錢 (空欄五圓)

昭和三年十一月廿八日印刷  
昭和三年十一月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地

發行所 松竹合名社

編輯者 島江 鏡也

印刷所 山上 貞一  
大阪市東區船場町三丁目三〇

印刷所 中央堂印刷所

大阪市南區久左衛門町八番地

松竹合名社内

發行所 道頓堀編輯部

電話 (一六六八四番)

# パームオイル 松竹石鹼

日本に初めて

完成せる石鹼

「パームオイル」は純粹の植物性油で絶対に酸性なく、石鹼原料として最も優秀なものであります。

歐米には既に之を主原料とした高級石鹼があります。日本では此度發賣された松竹石鹼が全く唯一最初のものであります。

而も松竹石鹼は野村南洋事業部特産の最良「パームオイル」を主原料として居ますから決して目にしみます、肌を荒さず、完全に皮膚を清潔に滑かにします。従て洗粉、クリーム等を使ふ必要は全くありません皮膚の保護上最も有効な石鹼として推奨する事が出来ませ

有名化粧品店・小間物店・薬店にあり

製造元

松竹石鹼工場

發賣元

大塚久資寺町

製日堂株式会社

記録し、敏銳に報告し、詳細に精述したのが本誌で編輯者の苦心も全くこゝにありませぬ。

子の御健勝と共に多謝の意を込めて、祈りつゝ稿を止めます。

電話（二四〇番）  
六六八五番

若く明るいの顔になる

# リート白粉

東京・大阪・平尾・賛平商店



昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可  
昭和三年十一月廿八日印刷  
昭和三年十二月一日發行

金參拾錢(郵一錢五厘)稅